ISSN 2433-2151

未来の図書館 研究所
調査・研究レポート

2019

The libraries of the future research, Inc. Annual Report. Vol. 3 (2019)

未来の図書館 研究所

The libraries of the future research, Inc.

調査・研究レポート　Vol.3（2019） 目次

■ ごあいさつ ―――― 1

■ 未来の図書館 研究所　第 3 回シンポジウム　記録 ―――― 3

図書館とサステナビリティ

岡﨑正信，内野安彦，永田治樹

■ 第 3 回ワークショップ「図書館員の未来準備」報告 ―――― 32

■ 研究レポート

1 日本語の歴史的典籍のアーカイブ構築と活用 | 増井 ゆう子 ―― 37

2 デジタル世界にいまなにが起きているのか | 宇陀　則彦 ―― 47

ごあいさつ

またこの号も，遅れての発行になってしまいました。年明けのあと，武漢でまん延していた新型コロナ・ウィルスがわが国にも侵入し，多くの感染者が出ております。いまは早く落ち着きを取り戻すことを祈るのみです。

その騒動のせいで，1月末にマスクなどが薬局やマーケットの店頭からなくなりました。そして2月末には，突如トイレットペーパーが店頭から消えました。いずれも人々を突き動かしたのは，それらが不足するかもしれないという情報が流れたからでした。

専門家は「ウィルスにはマスクでは対処できない，マスクは気休めほどのものだ」といいます。しかし，気休めであっても，人々はマスクを買いに走ったのです。そしてマスク不足は，増産に入っているという政府報道にもかかわらず，変化はありません。

また，トイレットペーパーについては，中国からの供給が途絶えることが想定されるマスクとは違い，供給不足はデマでした。国産品だし，業界からはむしろ在庫はだぶついているとの表明もありましたが，石油危機のときを想起されるような買い占めがしばらく続きました。

いち早くデマであるという報道もなされましたから，多くの人々は間違った情報を受け取ったわけではありません。社会的な不安のなかでそれを解釈し，この結果がもたらされました。エピデミックやパンデミックをもじって，2003年のSARS流行の際につくられた造語「インフォデミック（infordemic)」（わずかな事実，恐怖や憶測に基づいたうわさなどが情報技術によって流布される状況）の様相です。その当時と違って，いまやSNSなどの情報拡散は強力無比です。

買い占めのあと，買い物をどこでできるか探したり，列をつくったりして，入手するための負担が大きくなるのは，まったく不愉快です。ネット社会になって，市場における情報の非対称性や取引コストが極小化したのに，これではネットが逆に作用しています。前々号でとりあげた米国大統領選挙にまつわる「フェークニュース」や，前号でのわが国の政府の「統計不正」などは事実を歪めるものでしたが，今回のものは，情報を操作する側の問題よりも，受け手によって解釈される際の問題を提起しています。情報を正確に理解し，それを適切な判断につなげるという問題は，いずれも一筋縄ではいかないようです。再び引き起こされた「インフォデミック」の情報ウィルスに対する耐性は，私どもにはなかなか得にくいものなのでしょう。

本号では，第3回シンポジウムと第3回ワークショップについて掲載し，記事としては，国文学研究資料館の増井ゆう子さんと，筑波大学図書館情報メディア系の宇陀則彦さんにご寄稿いただきました。

2020年3月

未来の図書館 研究所
所長　永田　治樹

カーリル

ゆるくつながる、かるいしくみ。

図書館をもっと楽しく。

カーリル　検索

――― 未来の図書館 研究所　第 3 回シンポジウム 記録 ―――

図書館とサステナビリティ

日時　：　2018 年 11 月 2 日（金）13：30～16：30

会場　：　日比谷図書文化館内（地下 1 階）日比谷コンベンション大ホール

プログラム

13：30～13：50 **シンポジウムの開会ご挨拶と趣旨**

永田 治樹（未来の図書館 研究所　所長）

13：50～14：30【講演】「**エリア価値を高める図書館**」

岡崎 正信 氏（株式会社オガール　代表取締役）

14：30～15：10【講演】「**図書館をまちのたからものにするには**」

内野 安彦 氏（立教大学　兼任講師）

15：10～15：30　休憩

15：30～16：30 **ディスカッション**

●パ　ネ　リ　ス　ト　岡崎 正信 氏

内野 安彦 氏

●コーディネーター　永田 治樹

登壇者プロフィール

■ 岡崎 正信（おかざき・まさのぶ）氏／株式会社オガール 代表取締役

1972 年岩手県紫波町出身。日本大学理工学部土木工学科卒，東洋大学大学院経済学研究科公民連携専攻修了。地域振興整備公団(現：都市再生機構)入団後，建設省都市局都市政策課などで地域再生業務に従事。現在はオガールプロジェクトの中枢であるオガールプラザ㈱，㈱オガール，オガールセンター㈱代表取締役として，紫波町の公民連携事業を企画推進している。

■ 内野 安彦（うちの・やすひこ）氏／立教大学　兼任講師

1979 年に茨城県鹿島町役場（現鹿嶋市役所）入所。図書館に異動のあと，図書館長，学校教育課長を経て 2007 年退職。同年，長野県塩尻市役所入所。図書館長として新図書館（えんぱーくの中核施設）の建設を指揮。現在は，三大学で教鞭を執るとともに，FM ラジオで図書館をテーマにした番組のパーソナリティも務める。

■ 永田 治樹（ながた・はるき）／株式会社 未来の図書館 研究所 所長

名古屋大学附属図書館を振り出しに，国文学研究資料館，東京大学・金沢大学・北海道大学の図書館などに勤務後，1994 年から図書館情報大学，筑波大学図書館情報メディア研究科，立教大学文学部等で教育・研究に携わる。専門領域は図書館経営。ISO TC46 / SC8 の国内委員。
近著：永田治樹編著『図書館制度・経営論』日本図書館協会，2016.

==========

シンポジウムの開会ご挨拶と趣旨

（永田）

皆さま，こんにちは。未来の図書館 研究所の永田でございます。シンポジウムの開始にあたって，一言ご挨拶を申し上げます。公共図書館の今後にこだわってこのようなシンポジウムを開催してまいりました。おかげさまで，今年で３回目になります。大勢の方にご参集いただき，大変嬉しく存じます。皆さまのご支援ご協力に感謝いたします。

公共図書館が社会の革新を担う機関であるということで，昨年度はソーシャルイノベーションという切り口から，社会企業といわれる事業を話題にいたしました。今回も同じようなスタンスでありますが，公共組織と連携する動き，あるいは公共組織そのものの動きをとりあげます。

本日はお二方をお招きしています。岩手県の紫波町で公民連携を成功させている，オガールプラザ株式会社の代表取締役の岡崎さんと，塩尻市にあります「えんぱーく」という施設で初代図書館長をなさった内野さん，このお二方でございます。それぞれの領域できらめくようなご活躍のお二方でありまして，お忙しいなかお越しいただいております。

お二人についてのご紹介には，たくさんの言葉を並べなければなりません。時間の関係からお手元の資料をお目通しいただくということで，割愛させていただきます。ご参照ください。お二方のお話をお聞きしようということで，はせ参じていらっしゃる方がたくさんご着席なさっております。早速シンポジウムを始めたいと思います。どうか終了のお時間までお楽しみください。

挨拶はここまでにいたしまして，これからはコーディネーターとしての役割を少し果たしたいと思います。まずは，シンポジウムの趣旨について少し述べさせていただきます。ちょっと着席させていただきます。

このテーマのとっかかりは，実は 7～8 年前の「近年英国でなくなってしまうものは地域の図書館と地元のパブだ」といった，友人の嘆きのような諦めのような言葉でした。時代が変わりゆくなか，これまでのような公共図書館のあり方は持続し得ないだろうという思いがありました。

英国は，アメリカと並んで公共図書館が早くから発達した国です。しかし昨今，公共図書館の数が激減しています。ただ図書館数の数え方は込み入っておりまして，政府の発表と BBC（The British Broadcasting Corporation）の発表とは少し異なったりして議論にもなりました。図書館団体である CILIP（Chartered Institute of Library and Information Professionals）によれば，2018 年現在の図書館の数は 3,850 ということになっています。しかしこの 10 年間に，穏やかに見積もっても 700 以上の図書館，あるいはサービスポイントがなくなっています。

英国では法によって，公共図書館サービスは住民に提供されなければならないということになっていますので，閉館に際しては住民訴訟が起こされることも多々ございます。この写真（図 1）は，英国北部のダーリントンという市にある図書館です。ご覧のとおり，ヴィクトリア朝のかなり由緒のある歴史的建物です。この図書館を廃止するという市の決定に対して訴訟が起きて，実は住民が訴訟に負けてしまったのですが，その後市長が廃止を撤回し，これは幸いいまでも残っています。しかし，全国的には多くの図書館が閉館され，それとともに，図書館員の数も激減していますし，1 年間に 1 回でも図書館を訪問した方々の人口比は，以前 50%くらいあったものが，いまは 35%まで下がってしまいました。人々が図書館というものから離れ始めています。こちらのほうが，図書館の数の減少よりも深刻かもしれません。

わが国では，ご承知のように図書館に関しては後進国といわれている状態が続いていましたので，図書館の数はずっと右肩上がり，現在でもわずかながら右肩上がりなので

図 1　ダーリントン図書館

す。しかしわが国の図書館の整備状況は，英国のような状態に一度も至っておりません。そして，ずっと上り調子だった図書館の状況ですが，資料費が 2010 年に下がりまして，そこから利用状況も下降しています。

英国や私どもの足元で，こんな動きが定着しつつあるということで，端的にいってしまえば，これまでの図書館の枠組みというものが，維持できなくなってゆくかもしれません。

こうした状況の原因の一つは，予算カットであります。それは，これまでの制度を維持してきた経済成長が，もはや先進国では見込めなくなったということを意味しております。もちろん理由はそれだけではなくて，その他いろんな理由が考えられます。時代の進展にまつわるさまざまな変化，例えば情報のデジタル化や利用者の生活行動の変化があります。そういった事柄が複合的に状況をつくっている。あるいはまた，ときには図書館経営そのものがうまくいっていないというケースもないとはいえません。このあたりで，きちんと問題を見極めておく必要があると思います。

時代の変化に対しては，なんらかの行動をわれわれも起こしてゆかなければなりません。まずは，人々がこのような社会変化に対応できるような支援，人々の技術や知識を更新するための支援，つまり生涯学習の推進が要請されています。図書館の第一の課題領域です。また，新自由主義といいますか，個々人の活動を優先する風潮から，壊れてしまったコミュニティの人々のつながりをつなぎ直してゆくというようなことも，近年図書館の役割としてあげられるようになっています。ということで，図書館が果たすべき役割は，実は非常に大きくなっているといえます。そこでこの図書館の状況を，どのように打開したらよいかを考える切り口として，今年はサステナビリティという観点をとりあげました。今後とも公共図書館という社会的制度が維持できるのか，サステナブルな図書館とは，どのようにサービスを運営するものなのかなどについて，考えてみたいと思います。

サステナビリティという横文字をカタカナにした言葉を使っていますので，それが一般にどのように使われているか確かめてみました。インターネットで検索をかけますとサステナビリティに関するウェブサイトがいっぱい出現します。そのなかで私の気に入った定義はこれでした。「サステナビリティとは，環境や経済，社会のバランスを考えて，世の中全体を持続可能な状態にするという考え方」というものです。このように環境，経済，社会という視点からみると割と把握しやすいのかなということで，この定義が気に入っております。

またサステナビリティという言葉で，状況を意味する場合もありますが，行動規範や考え方を意味するケースもあります。皆さまも最近このようなロゴ（図 2）をご覧になったことはあるかと思いますが, 2016～2030 年の 15 年の間で，達成するために掲げた持続可能な開発目標です。それを SDGs（Sustainable Development Goals）といいます。「ピコ太郎×外務省（SDGs)」という動画をご覧になっ

図 2　SDGs ロゴと 17 の目標のアイコン

た方もいらっしゃるかもしれません。2015 年 9 月に国連のサミットで採択された 17 のグローバル目標で，われわれのあるべきゆくえをさしているといえます。

図書館ではこのサステナビリティという言葉はどのような場面で使われているかというと，IFLA（国際図書館連盟）という団体がございますね，この IFLA では 2009 年に「環境，サステナビリティと図書館」をテーマにしたインタレスト・グループが構成されました。このグループが毎年総会の際に会合を開いて図書館におけるサステナビリティについて話し合っています。それから，先ほど申しました SDGs を策定する際に，IFLA は積極的に関与しております。

ただし，そうした活動では，これまで主に環境志向といいますか，環境に対する配慮を主に掲げておりまして，実は経済的あるいは社会的面から，図書館そのもののサステナビリティを問題にしているケースは多くありません。しかし，図書館の存続が厳しい状況になってくると，そのもののサステナビリティは避けられない問題です。例えば英国では，この観点から図書館の状況を変えてゆこうという政策文書を，政府（エージェンシー）が出しています。コストを削減したり，他のコミュニティサービスと統合したりして運営するなど，図書館を持続可能な形で維持してゆこうという内容です。昨年出された『英国図書館の展望』では,『持続可能な，コミュニティ中心のサービスを提供するためのガイド』というものがついておりまして,「サステナブル」という言葉が散見されます。

さて，本日のテーマは図書館をサステナビリティの観点からさまざまに考えてみようというものです。図書館は，その役割が人々から認められ，組織として十分に活動し，世の中全体を持続可能な状態にしてゆくことに寄与すれば，サステナブルなものとなりましょう。このことが議論の前提となります。

そこで，サステナブルな公共図書館をおつくりになったお二方から，お話をいただきます。まず岡崎さんからは，「エリア価値を高める図書館」というお話をしていただきます。これは，先ほどのサステナビリティの三つの視点からいえば，主に組織の経済的な視点からのお話であります。次に，サステナブルな公共図書館のサービスを，塩尻市のえんぱーくで展開された内野さんには，「図書館をまちのたからものにするには」というお話をいただきます。こちらはどちらかといえば，まちのあり方，つまり社会的視点に重心をおいたお話になろうかと思います。それでは，ここで早速岡崎さんにお話を頂戴して，シンポジウムの本題に入りたいと思います。

==========

【講演】「エリア価値を高める図書館」

（岡崎）

こんにちは，岡崎と申します。図書館の関係者の方がほとんど参加者だと思いますが，図書館の話はほとんどしないのですがよろしいでしょうか，という話を，ちゃんと僕は永田さんにお伝えして今日来ていますので，私の話の内容に文句があるときには，僕ではなく永田さんのほうにいっていただければと思います（会場笑）。私の講演のモットーは，二度と呼ばれない講演を心がけていますので，皆さま方にお会いするのも，今日が最初で最後だと思いますので，40 分間どうぞお付き合いいただければと思います。

図書館に興味のない人間って僕のことです。図書館に興味のない人間がつくった図書館。けど，自分たちのまちが自立して生きてゆくためには，絶対的に必要なコンテンツでもあるというふうに思ってはいます。思ってはいるけれども，図書館の敷地のなかだけで，図書館を考えるって大変もったいないと思っています。なので，自分が図書館に興味はないけれども，図書館に興味をもってつくったら，いまのような結果になっているということで，逆にいうと図書館がなかったら，私の仕事は成立していないといっても過言ではないと思います。

私がこれまでしてきた仕事ですね，これ（スライド :「官としてやったまちづくり」再開発ビルディングの画像が複数並ぶ）。大学に入ると同時に岩手県の紫波町から東京に出てきまして，大学卒業と同時に役人になりました。ここから歩いて 5 分のところで働いていました。17 年ぶりに日比谷公園に来まして，松本楼がきれいになっているなと思いました。

僕がやってきた仕事って，再開発とか区画整理なのです

が，これが再開発の典型的な形ですね。これなにタイプっていうかみなさんご存知ですか。図書館の関係者の方って，こういった話聞かないと思うので，ぜひ覚えていってもらいたいですけども，こういう形の再開発。低層階に商業とか行政とかが入って，高層階にマンションとかホテルが入るのですけども，これ「墓石タイプ」っていいます（会場笑）。墓石みたいな形でしょ。だいたいこういうものが墓標になります，将来。地域にとってこれができることによって，墓標になるとどうなるかっていうと，これは不動産そのものの問題じゃなくて，地域，周辺の土地の価値がガーンと下がります。ただ価値が下がるだけじゃなくて，ガーンと下がるとどうなるかっていうと，まちにとって大事な固定資産税が入ってきません。だいたいこういった再開発をやるのは，まちのど真ん中です。そもそも土地が高いところでやるのです，再開発って。安いところで再開発をやる必要はないのです。高いところで再開発をやって，それが墓標になって，ガーンと価値を落として，周辺の土地の価値も落として，一番土地が高かったところで間違った開発をやっちゃって，固定資産税が入ってこなくて，地方都市がいま疲弊しているという。

これ誰がやったんですか。僕が前いた建設省ですよ。まちの中心によいと思ってばらまいた金が，まちをダメにしていっているという。こういったことばかりやって，これがなにも悪いことだと思っていませんでした。悪いことだと思ってなかったのだけれども，父親が 25 歳のときに死んで，それから，うちの父親は小さな建設会社をつくっていたのですけれども，その 5 年後にはだんだん仕事がジリ貧になっていって，全国的に建設業の仕事がなくなっていって，母親から SOS があり，30 歳のときに帰りました。帰ったってなにも役に立ちませんよね。こんなことやってきたのだから。元建設省の役人だからって，なんの役にも立ちません。どこそこ大学出て，どこそこ省に入って，年間予算 200 億もっていた，500 億担当していた。そんなのなんの役にも立たない。

そのとき思ったのです。建設業ってこれから変わってゆかなきゃいけない。どう変わるのかっていったら，建設業って，誰かがつくった仕事を口を開けて待っている仕事です。まちに金がなくなっているのは，国の役人をやっていたのでよくわかります。地元の紫波町も，総務省の財政数値でいえば，岩手県でワースト 1 でした。金がない。金がないところに仕事をつくってくれっていったって，仕事が出てくるわけがない。だったら金がないところに公共事業をつくってあげればいい。税金でつくるのではなく，民間の金でつくって，それをサービスとして役場に買ってもらえばいいのだ。ということを考えて，もう 1 回勉強しようと思いました。帰ってから 3 年後，また東京の大学に入りまして，毎週金曜日土曜日，新幹線で通って勉強して，その間にアメリカに渡りまして，アメリカで公民連携，PPP（Public-Private Partnership），本場ですね，アメリカが。アメリカに渡って公民連携を勉強してきた。そして，紫波町に帰ってきた。

なにがいいたいかというと，失敗というのは再現性が高いのです。さっきの墓石タイプみたいな開発をずっとやっています。いまだにやっていますよ，地方都市で。土地がどんどん下がっていっているのに，なんで高度化利用しなければいけないのかよくわからないですけども，いまだにやっています。再開発すればまちがよくなると思っている人がたくさんいるのですけども，再開発すればするほどダメになるのです。

そんな私に公有地開発を任せる首長が紫波町にいました。どんな土地かといいますと，このような土地です（スライド：上空から公有地を写した画像）。地元紫波町が一番金をもっているときに，駅前の土地は一等地だといって，28 億 5,000 万円で買っちゃった土地です。一般会計 120 億しかなかったのですよ。そのときに駅前の土地は一等地だといって役人たちが買ってしまったのです。そして 10 年間放ったらかし。放ったらかしですよ。俺が紫波町に帰ったときに，町民になんて呼ばれていたか。「日本一高い雪捨て場」って呼ばれていたのですよ（会場笑）。日本一高い雪捨て場，なんとかしてくれと町長にいわれました。

自分の小さい建設会社，元気になるためにはまちに元気になってもらわなければならない。だから私は自分の建設会社の取締役をやめて，紫波町がつくってくれた第三セクターの取締役になって，この開発をほぼ一人で企画して，そしてどんどん仲間を増やしていってやってきました。

こんな土地です（スライド：公有地で撮影した画像。荒

れた土地。地面に 3 人の人影)。草ぼうぼう。これ，当時の町長。脇，当時の副町長。これ，俺（地面の人影を順に指さしてゆく）（会場笑)。「岡崎君，なんとかしてくれ」っていわれた瞬間です。これ，雪解け水（会場笑)。まあなんともならないですよね。普通に考えたら。金がないのです。金があったらなんとかしますよ，紫波町が。金がない。金がないなか，なんとかしてくれって，町長。ここが偉いのです，うちの町長。いいですか，建設会社のせがれにですよ。建設会社のせがれに，なんとかしてくれって頼めるのです，うちの町長。普通頼みませんよ，建設会社のせがれに，なんとかしてくれって。それがすごいなって思います，この町長さん。まあ僕より背が大きくてですね，御年 80 歳ですかね。まあ気合の入った，もう怒ると顔真っ赤にしてすげえ怒る町長です。「ザ・自民党」って感じの（会場笑)。

これでどうなったかって，10 年後こうなりました（スライド：オガールエリアの建物の画像)。今年（2018 年）建築学会賞いただきました。建築学会賞っていうのは，建築界で最高の名誉ある賞です。私は 3 年前に建築学会 140 周年記念シンポジウムに呼ばれまして，伊東豊雄大先生ってご存知ですよね。伊東豊雄大先生とシンポジウムで大激論を交わしました。僕は建築学科出ていませんよ，一切。僕は土木工学科を出ました。建築のケの字もわからない奴に建築学会賞。

この風景をつくったのです。ここが図書館。158m の建物の真ん中にあるのが図書館。大事なのは広場なのですよ。広場がないとうちの図書館は図書館として機能しない。そのあたりを今日話したいと思います。

図書館はなんのために存在しているのか。図書館はお金がかかるだけなのか。地方創生とはなにをもって地方が創生したということになるのか。人口が減るという局面になにをなすべきか。

地方創生，地方創生って，だいたい参議院選挙のときにみんな騒ぐのですよ，先生方は。今度また騒ぎますよ，地方創生，地方創生って。地方に金をばらまく根拠がほしいから。それで，明確に答えられる人っていないでしょ。地方創生ってなにをもって創生したっていうのですか。人口増やせっていう人がいるのですよ。地方創生で人口が増えるような自治体の総合計画つくっている人，そこに住んでいる市民の皆さんは，早くその自治体捨てていなくなったほうがいいですよ。増えません。どうあがいたって増えません，人口は。よっぽど海外からの移民とか移民政策を実施すればあるかもしれませんが，純粋な日本人は，増えることはまずない。平成 2 年の国勢調査から減っているのですよ。こんなの官僚はみんな知っています。平成 2 年の国勢調査から人口が減って，それで平成 4 年に「地方拠点都市法」っていう法律ができました。同じことやっているのですよ。毎回，毎回 30 年間。一向に増えない。

人口が増えないことは，別に問題でもなくて，これは事象です。大事なことはなにか。それは金が増えないってことです。だから先ほど永田さんがおっしゃったとおり，図書館がなんでなくなるか。金がなくなるからですよ。金がなくなるのです。図書館に興味のある皆さんは，図書館をつぶすなっておっしゃるかもしれませんけど，図書館に興味のない人が大半です。その人たちは図書館なんてなくたって，どうでもいいのです。だから町長に，「お前図書館に興味あるか」っていわれたときに，「まったくありません」って答えたのです。そしたら町長が，「岡崎君，図書館つくってくれ」っていってきたのです。「え，いいんですか僕で」と聞いたら，「俺も興味ねえんだよ」って（会場笑)。興味のない奴がつくったほうが，興味のない奴が来る図書館つくってくれるのではないかと思うからって。これ結構真理なのですよ。真理なのです。なので，そういったことを考えていろいろ仕事しました。

それと「公」って言葉があります。公共図書館，公共図書館っていいますよね。「公」って誰ですか。主体者は，主人公は。こういうと日本人は，まあだいたいのところ行政職員だっていいますよ。これ英語でいうとなんていうか。「パブリック」といいます。英国に行った人，よくわかると思います。パブって飲み屋がありますよね。あれ，役所がやっているのですか。ゴルフ場でパブリックコースってありますよね。あれ，役所がやっているのですか。どちらも，民間企業がやっています。パブリックというのは，分け隔てなく，どんな身分の人も参加ができるという意味です。なので，ゴルフのパブリックコースがプライベートコースと違うのは，誰でもできるコースということです。全英オープンが開催されるセント・アンドリュースでさえ，

パブリックコースです。誰でもできるのですよ，あのコース。パブという飲み屋入ったら，ほとんどの人が入れますよ。お金をもっていたら，誰だって入れるのです。

つまり，公の主体者っていうのは，官だけじゃないのです。民だって公の主体者になれるのです。つまり，私がやっていることは，自信をもって公共事業だといっています。自信をもって。なので，別に役所の人間じゃないから公共ができないと思ったら大間違い。ここに僕は地方創生の可能性があると思っているのです。明らかにこの日本は，公を官の人たちに任せすぎました。けれども，この公を民の人たちが担う時代がこれからやってきたら，僕は日本ってもっとよくなると思います。

江戸時代，江戸は何万人いたと思います，人口。60 万人ですよ。当時世界最多でした。60 万人で，地方公務員と呼ばれる人は何人いたか。たった 200 人です。いま 60 万人のまちがあったら，だいたい 5,000～6,000 人が必要ですよ，その自治体の職員は。多くの公共事業が民間で担われていた。寺子屋，火消し，消防だって学校だって民間で担っていた。けれどいまはずーっとみんな官の方に。民の人たちも，公共は官がやるのだ，俺は税金を払っているのだから，ちゃんとやれよって。こういう発想がはびこっている間は，この国はよくはならないと思います。

なので，従来とは違う公民連携まちづくり。従来とは違う。第三セクターだって立派な公民連携ですよ。従来とは違うのは，パブリックマインドのある民間が，主導的にプロジェクトを起こすのです。民間主導です。行政がこれを支援する形で行う，「民間主導の公民連携」が基本。

紫波の町長は僕になんとかしろといいました。自分たちが金がないからなんとかできないかということです。なんとかしろということは，民間が主導してよろしいのですね。民間が主導して行政が支援する形で参加してくださいとはっきり申し上げました。

そして遊休化している不動産資源と潜在化している地域資源を組み合わせて，経済性の高い事業を起こし，経済循環を活性化させるのです。補助金に，できる限り頼らない。補助金をばらまいていた人間がいうのです。

これによって，複数の都市，地域の経営課題を同時に解決するのです。民間が主導するプロジェクトで，公共の課題をたくさん解決するっていうことが大事なのです。いいですか。公共の，社会の課題を解決するのは，もはや役所だけではダメなのです。民間の人たちが変えてゆかなきゃならない。それをビジネスにしてゆくのです。

真の公民連携を目指しましょう。民間がパブリックマインドをもちましょう。知恵を発揮して，まちづくり事業を行い収益を上げる。そしてまちに再投資する。僕はまちづくりに参加なんかできない，時間もない。大いに結構。最大のパブリックマインドは「たくさん税金を納めてください」，立派なパブリックマインドです。公共はパブリックマインドをもつ民間の動きを支援して，公共でなければできない役割をスピーディーにフレキシブルにしっかり果たす。産官学市民が境目なく繋がり手に手を携えて，継続するまちをつくりだしてゆきましょう。いうのは簡単ですけれども，けれどもこういった，理念がないと動きは生まれない。

いいですか。パブリックマインドをもたなきゃいけないです，民間は。それをビジネスにしていってください。そして，パブリックマインドをもった民間を，公共はしっかり支援してください。逆に公共はプライベートマインドをもってください。プライベートマインドってなにか。お金と柔軟性，スピード。これをもっているのです。行政がもっていなかったものです。もしかしたら図書館の皆さん方，経営が難しいといっているかもしれない。もしかしたら，お金に対する価値観，時間に対する価値観，柔軟性，この三つを変えたら，変化するかもしれませんよ。

僕はこの図書館に初めて入りました。なんせ図書館にあまり興味がないから。そしてここの会場に来てこの席に座った。一番になにが目についたか。「飲食厳禁」。なんで飲食しちゃだめなのって思いません！？なのに，図書館の人たち，それも当たり前だっていうのですよ。図書館に興味がない人は，なんで！？って思うのです。

うちの図書館，飲食自由。BGM がんがん流れている。ときはお酒も OK。ときにはお泊りも OK。自由なのです。本当のパブリックなのですよ。パブリックなのです。僕はいま動物園の再生もやっています。僕，公共事業請負人なのです。動物園の再生。あと，立ちゆかなくなった温泉センターの再生。建て替えられなくなった集合住宅の再生。

そういった仕事をもらっています，全国各地から。

こういう言葉に出会いました。「動物にチョイスがない動物園は，監獄と同じだ」って。来館者にチョイスがない図書館は監獄と同じです。僕はそう思っています。選択肢がないのです，過ごし方の。その選択肢を与えるだけでも，ものすごくマーケットが広がってくる。いいですか，動物にチョイスを与えすぎたら動物園なんかいらなくなるのですよ。ここが，なんのために動物園をやるのか，なんのために図書館をやるのかということを，深く深く議論してゆかなければならない。動物園に関してもし興味があるなら，NHK で検索してもらうと一昨日僕が発表したことが，NHK でニュースになっています。画期的な動物園をいま再生しようと思っています。

不動産の価値を上げる手順。そうですね。さっきいった，雪捨て場だった土地をどうやって再生してゆくか。やればやるほど，不動産の価値が上昇する。人口が減っている局面で不動産の価値を上げる。そのための手順は，この左から（スライド：「不動産価値を上げる手順」四つの手順が左から順に並んでいる。一番左側，最初の手順のみ赤く色が塗られている）。四つの階層がありますけど，やることはこれだけです。赤く塗っているところだけ。「消費活動を目的としない訪問者を増やすこと」なんです。いいですか。消費活動でまちの中心を再生しようというのが，僕がつくった「中心市街地活性化法」。いまでは「中心市街地活性化しない法」といっていますけど（会場笑）。消費活動を目的としない訪問者を増やすこと。いってみれば図書館ですよ。図書館ってものすごい集客力なのです。けれども，敷地主義の図書館が多すぎて，その敷地だけで物事を考えるのです。図書館の来館者数って，ただそれだけ。

けれども，民間人にしてみればどうか。実は図書館ってね，すごいのですよ。こわいですよ。人が来れば来るほど金がかかるのですよ。公共事業でやっているから。いわゆる官製の公共事業でやっているから。人が来れば来るほど金がかかるのです。電気代だって水道光熱費だってかかる。人件費だってかかる。けれどこれ民間事業だったらどうです。人が来れば来るほどっていうコンテンツは，儲かるのです。だから，図書館という集客装置を以て，図書館のなかで商売しないかって声かけました。人が集まれば自ずとカフェ，居酒屋，ギャラリー，ショップなどの付帯サービス産業が発展します。さらに付帯サービスを提供したい人が集まる。つまり，図書館というコンテンツのなかで，商売したい人いませんかって手を挙げさせたら，40 社の人が手を挙げたのです。10 年間放ったらかしの土地に。来ましたよ。カフェも居酒屋も，学習塾も，病院も。九つのテナントを入れました。そうするとどうなるか。訪問者が増え，付帯サービスが始まれば，エリアに活気が生まれてきます。そうするとさらに人が集まってきます。さらなる付帯サービスが生まれ，最終的には不動産価値が上がって，固定資産税が上がります。結論からいいますと，紫波町のオガールエリアは 5 年連続地価が上昇中です。つまり，人口は紫波町減っていますけれども，税収は上がっています。起爆剤はなにか。ここに図書館があったからです。図書館があったからこそ，不動産の価値が上昇する流れに乗っていったという。

逆算からの積み上げ。従来の墓石タイプの再開発というのは，容積率で計画します。つまり，めいっぱいデカいのをつくりましょうという計画なのです。つくれるだけつくれ。そして設計が始まります。補助金が入るなら立派なものをつくれ。華美な設計をやる。そして建設。こんなに立派なものをつくるのだから，テナントが勝手に入ってくる，大丈夫だって。それでテナント提示したら，全然入らない。竣工して空き室の発生が顕在化するっていうのが，従来の再開発です。

新再開発，私がやろうとしたのは。自分のまちでそんなことできないな，金もないし，補助金もないし。市場調査，家賃相場の確認をして，入りたいという人たちだけの容積を決めて，ハコをつくります。そして設計施工の時点で，設計始まる前からもう入居率 100％達成しているのですよ。それで，ファイナンスから工事価格を設定して，竣工。最初から入居率は 100％なので，できあがったときにも入居率は 100％のまま。こういったプロジェクトについては，銀行はいくらでも金を出します。そうやって資金調達をするのです。

そして，「ピンホールマーケティング」という考え方があります。小さい丸と大きな丸（スライド：「ピンホールマーケティングという考え方」緑色の小さい丸と，赤色の大き

な丸の画像），これをマーケットの大きさと思ってください。スポーツでいうと，いま日本で一番マーケットの大きいスポーツは野球ですね。僕がずっとやってきたスポーツは，バレーボールです。バレーボール１に対して，野球は８倍のマーケットがあります。大きいマーケットがあります。これどっちで商売をしますかって。これはどうしてかと，小泉進次郎さんに話をするときに，僕はバレーをやっていて，進次郎さんは野球をやっていた。「野球とバレーボールではこれくらいマーケットが違うのです。進次郎さんどっちで商売をする」って聞いたのです。進次郎さんは「こっち（大きい丸＝野球）で当然やるよ」って。そうですよね。でも私はそれを「既存巨大マーケットに奪いにゆく」っていうのです。みんな進次郎さんと同じ考え方ですよ。だから日本全国に6,000を超える野球場があるのです。6,000を超える野球場。いま図書館が何個あるのですか。たぶん相当な数ありますよね。でも，バレーボール専用体育館ないのですよ，一つも。6,000かける８分の１あるかなと思ったら，一つもないのです。

だから僕はこういったマーケットの評価をしません。真上からみたらこうだけど，真横からみたらこんな形してますよと。真上からみたらこれ（小さい丸を示す）。真横からみたら尖ってる（細長く尖った三角形を示す），誰もやってないから。上からみたらこれ。すごく大きいけど（大きい丸を示す），真横からみたらこれ（ほぼ平らな二等辺三角形を示す）。6,000分の１だと埋没するでしょ。既存マーケットでは，弱者は埋没するのです。ライバルがいない分野に尖ることが，ピンホールマーケティングといった，俺たちが名付けたマーケット手法です。フィリップ・コトラー（Philip Kotler）もこの言葉を聞いて感動したそうです。進次郎さんからあとでいわれました。

こういう考え方をしないと，これから人口が減ってゆくなかでは，どんどん沈みます。ほかと同じことをやっていたら。つまり図書館も，尖らないといけないのです。尖らないと人はどんどん減ってゆくと思います。

それでつくったのがオガールプラザ（スライド：オガールプラザの建物の画像）。これです，さっきの。158mの，床面積5,800㎡。そして，われわれが図書館で解決する地域経営課題はなにか。さっきいいました。民間が企画した図書館でなにを解決するか。図書館で解決すること。エリアの不動産価値を上げ，財政の健全化を目指すのです，図書館によって。図書館によって，農業を営む人と金を増やします。図書館によってですよ。図書館によって，町内の雇用を創出し続けます。図書館をつくることによって雇用を創出し続けます。図書館をつくることによって，子育て産業を興し，魅力のあるまちなかをつくります。図書館をつくることによって，新しいライフスタイルをつくり移住者を増やします。これが，われわれ民間が掲げた図書館をつくる意義なのです。本が何冊借りられたとか，どうでもいいのです。図書館をつくることによって，これくらいのエリア価値を高めてゆきましょうというのが，われわれ民間が考えた，図書館のあり方なのです。

そしてこれがストラクチャーです（スライド：「稼ぐインフラ　オガールプラザ」）。ストラクチャーというのは，矢印が全部お金の流れです。オガールプラザ株式会社という会社をつくりました。私がいま社長です。そこにMINTO機構（民間都市開発推進機構）という政府系の金融機関，出資しています。補助金じゃないですよ，投資です。国が国民の税金を投資してくれました。そして，紫波町も投資してくれました。そして足りない部分を銀行から融資で借りました。そして資金調達をして，この矢印全部，お金の流れをつくりました。

つくったら，この土地，町民の財産を借りています。当然民間の企業ですから，紫波町に対して地代の固定資産税を払います。そして紫波町がなにをしたか。私たちが安く賢くつくった図書館を，できた瞬間に買い取りました。紫波町は最初，10億円で買い取るといってきました。10億円で買い取るっていってきたのを，10億円で売ったら名が廃ります，私たちの。10億円で買い取るっていってきたとき，私たちは7億4,000万円で売りました。2億6,000万円のディスカウント。そして，図書館は直営で経営しています。けれど売らなかった部分，つまりテナントが入っている部分は，このオガールプラザが経営しています。

そうすると，紫波町の図書館を経営している人たちは気づくわけです。町民に対して私たちが一生懸命サービスをすると，町民がたくさん使ってくれる。使ってくれるとどうなるか。テナントを利用してくれる。テナントを利用し

てくれるとどうなるか。テナントからちゃんと家賃とテナント料が入ってくる。そうすると，オガールプラザは入ってきた家賃とテナント料から，借りた銀行に対して返済をしてくれます。この流れなのです。

つまり，紫波町が買い取った図書館を運営している，直営の司書さんたちが，必死こいて，いろんなことをやっているのです。いろんなことをやっているからこそ，テナントに人が来てテナント料が入るのです。あの人たちが頑張れば頑張るほど，地代と固定資産税がどんどん入ってくるのです。これが NHK『クローズアップ現代』（「まちを潤す“にぎわい革命”」）で紹介されました。日本で初めてできた稼ぐインフラ。

そして，オープンして 5 年目で MINTO 機構さん，国民に配当金を出しました。いいですか。紫波町の図書館は，国民に配当金を出しているのです。補助金をもらうどころか，国民に配当金を出している。民が図書館をつくり官に売りました。総額 7 億 4,000 万円。公共単価でつくれば 10 億円だったそうです。これを民間の工事でディスカウントしていってつくりました。

これ図書館のエントランス（スライド：「にぎわうマーケット」）。毎週土日になるとここでマーケットやっているのです。これ図書館が民間にこの床を貸し出して，収益を上げているのです。図書館自らが貸します。図書館で高校生たちがライブします（スライド：「ライブをする高校生バンド」）。こういったフロアがあるのですよ，150 人入る。毎週のようにライブです。飲食自由です，うちは。これ地元の高校生ですね。紫波総合高校ってまあ歴史のある高校なのですよ。どちらかというと，やんちゃな子たちが集まる高校なのですよ。こんなにまで活動的だったのかってね。もうやってよかったって思う瞬間ですよ。

図書館産直の誕生（スライド：「にぎわう産地直売所」）。産直つくりました。図書館のなかに。年商 6 億 5,000 万円。いま岩手県でナンバー2。農水省の補助金 1 円ももらっていません。みてください。金がないから壁紙も貼れず，われわれ自分で塗りましたから。ミッツ・マングローブのお父さん，徳光次郎さんを呼んで，あの人は伊勢丹のスーパーバイザーだった人です。産直のつくり方を教わった。そしたら，なにを思ったか徳光さんは，「おい，伊勢丹のデパ地下と同じルールでつくれ」っていいました。どんなルールでつくったか教えられませんけども（会場笑），金がないなかで，その考え方だけは浸透させました。柱がないでしょ。そういうことです。そういうディティールをこだわるのです。図書館が雇用をつくるのです。うちの産直，雇用 25 名です。図書館とくっついたことによって，年商 6 億 5,000 万円上げて 25 人です，雇用。

これ 8 月のビアフェスト（スライド：「にぎわう広場」飲食を楽しむ人々の様子）。図書館の目の前で，こうやってがんがんライブフェスやるのです。図書館の前で結婚式やります（スライド：屋外広場で結婚式が行われる様子）。この一週間後なにが起きたかって。プロレスが起きました（スライド：広場でプロレスが行われる様子）（会場笑）。自由なのです，自由。

これが象徴的でしょ（スライド：図書館内を映した 6 枚の写真）。二つめの写真（館内で向かい合って立つ 3 名の司書の姿）。これうちのエースの司書ね，手塚。なにをやっているかっていうと，こいつがリーダーになって，朝開館する 10 分前から発声練習ですよ。「いらっしゃいませ」，「ありがとうございます」。おおよそどこの図書館よりも，うちの図書館はホスピタリティ溢れています。だから Library of the Year もいただきました，北日本で初めて。蔵書数たったの 9 万冊ですよ，たったの 9 万冊。けど貸出冊数は 25 万冊。

だから僕はこうやって講演する，本を書く，本を売る。印税は全部図書館に寄付されます。出版社の方に「俺の財布に入ると税金がかかっちゃうから，そのまま図書館に直でいく契約にしてくれ」っていいました。だから僕は本が売れても 1 円も入ってきません。ここまで聞いて僕の本買わない人は，本当人でなしといわれます（会場笑）。

これ全部図書館です（スライド：図書館で行われるさまざまなイベントの写真）。図書館に居酒屋あるのですよ，うち。20 坪。家賃月 12 万円。月の売り上げ平均 550 万円。超儲かっています。こういったところのビール 1 杯から，何十円かが全部図書館に回るのです。

これ（スライド：紫波町図書館のある日の様子を映した動画と BGM が流れる）。図書館の 1 日だと思ってください。土曜日の午前中（屋外広場のあずまやが映る）。こうい

った広場のあずまやは，占有したい場合はお金をとっています。1 時間たしか 200～300 円くらい。これも図書館が企画した工作展（広場で行っている工作展の様子）。6 月の第一週だったかな。土曜日の午前中だけです。（エントランスで開かれるマーケットの準備をする様子）土曜日の朝からこうやってマーケットが開かれる。（笑顔で映る女性）オガールやって僕もいろんな人知ったと思ったのですけども，こんな美人は知らなかったです（会場笑）。やってよかった瞬間ね，これ。こんな人いたんだ紫波にって。これ音楽スタジオ（スタジオが映り，ライブしているバンドの姿）。図書館のなかに入っていまして，小さなスタジオなんですけども，いま 700 バンドが登録しています。700 のバンドですよ。これも図書館のなかのアトリエスタジオ（工作などしている人たちの姿）。ここは IT サポートセンター（IT サポートセンターで働く人々の集合写真）。これはボランティア団体がやっている「おはなしピクニック」っていうイベントでして（おはなし会の様子），これも図書館のなかでやっています。さっき高校生がライブしていた場所ですね。稼働率は日数ベースでいうとほぼ 100%です。これが土曜日の半日で起きたことです。オガールプラザを中心とした VTR なのですけど，これが民間がつくった公共事業です。こういったことを，民間企業が地域のことを考えてやってゆく。

これ（スライド:「オガールベース」体育館の建物の外観）は 2014 年にできた完全民間事業で，国土交通省の補助金を，総事業費の約 8%いただきました。紫波町から，若者がチャレンジできる環境整備をしてくれっていわれて，これをつくりました。なにかっていうと，さっきいったバレーボールです。バレーボール専用体育館を民間の資金 92%でつくりました。体育館を民間の資金でつくっちゃった。フランスの床材メーカーのジェルフロアの役員にいわれました。世界中探しても，自分で借金して体育館つくって，うちの商品を入れたのはお前しかいないっていわれました。

これやるっていったときに地域からなんていわれたかっていうと，あいつ本当おかしくなったぞって。なんでおかしくなったっていわれるかっていうと，借金がだいたい 7 億くらいあるのです。毎月 400 万円返しています。1 回も滞っていません。今年たぶん経常で 4,000 万円くらい黒字化します。民間の資金ですよ。逆に公共に税金と固定資産税と土地代払っていますからね。年間 1,000 万。その 1,000 万も全部図書館の運営経費になります。

これです（スライド : 体育館の様子）。僕が借金してつくったバレーボール専用体育館。昨日知らない人から電話がありまして，誰かなと思ったら「日本バレーボール協会強化委員長の寺廻です」,「寺廻さん！？」って。「来年の 3 月，ナショナルトレーニングセンターが取れなくて。全日本女子の合宿受け入れてくれ。10 日間」,「はい，喜んで請負います」。以上，電話 1 分くらいで終わる。ややこしいこといわない。

壁紙貼りません。正確な言葉でいうと貼れませんでした，金がなくて。けど壁紙貼れないからって，バレーボールやる人から文句いわれることはないです。大事なのはこの床材です。2022 年まで，東京オリンピックもこの床材でやります，フランス製の床材しか使えないです。これを世界大会と同じ基準，オリンピックカラーのものを，フランスのジェルフロアは入れさせてくれました。なかなか入れさせてくれないのです。ナショナルトレーニングセンターでさえ，このオレンジ色は入れさせませんでした。だけど，俺が情熱的にいったら，ジェルフロアの担当も「よしじゃあオリンピックカラー入れるわ」って入れさせてくれました。子どもたち大喜びですよ。だいたいね，女子中学生なんてもう銀河系で一番面倒くさい奴らなんですけれども，ここへ来た途端急に声出し始めますからね。やる気を出して。

正月，春の大会前には下北沢成徳高校がここで合宿。東京からわざわざ岩手に来て合宿。なぜか。あったかいから。断熱ばっちりしています。学校の体育館が，クーラーがなくて大変だっていうでしょ。クーラーを入れたってダメですよ。ざるに水流すようなものですからね。やるべきことは断熱なのです。断熱をやってから，クーラーを入れる。これ，小学生でもわかることです。ダメですよ。真っ裸でお湯被ったって，すぐ冷めるのと一緒。断熱です。屋根に 40 センチ入っています。壁に 20 センチ。真夏外 35℃になります，岩手でも。35℃になっても，なかはだいたい 23℃くらい。冷房なしで。冬もマイナス 10℃くらいいっても，プラス 10℃を下回ることはない。というくらい，断熱性に。

これ誰につくらせたかというと，小学校，中学校のときに体育が大嫌いだったっていう建築家につくらせました（会場笑）。ここが大事なのです。

去年全日本男子が極秘に来ました。極秘で来るのです。だって世界と同じ，世界標準の床で合宿できるのはここしかないから。さっきいったように，これが「ピンホールマーケティング」です。僕が営業もしますよ。当然日本バレーボール協会に。営業もしますが，これ突発で決まりました。2 か月前くらいに電話かかってきて。日本バレーボール協会の強化委員長から。これ（スライド：体育館内で撮影した海外バレーボールチームの集合写真）先日の世界バレーボール大会カナダ代表。ついに地球の裏側からもみえました。

あと 1 分だけなので，去年完成したオガールセンターですね（スライド：「オガールセンター」）。これはさっきいったオガールプラザと同じ出資構成で，国も出資しました。子育て支援メインにしました。だいたいまちづくりっていうと，うちのまちは子育て支援頑張っているというのですよ。これ逆にいうと，子育て支援頑張ってないまちないから（会場笑）。誰でも頑張っていることを頑張っていますってあんまりいわないほうがいいですよ。紫波町は絶対子育て支援頑張っていますっていうのはやめよう，最初のうちは。だってまず住んでもらわなければ子育て支援もへったくれもないからなのですよ。住んでもらうってためのコンテンツとして，先に図書館をつくったのです。

そしていよいよ最終章，子育て支援をやりましょう。なにをやったかといったら，これです。民間の保育園 152 人の定員に，小児科クリニックと病児保育をくっつけた。つまり，うちの保育所は，インフルエンザかもしれないってなったら，親に電話しますけども「隣の小児科に預けていいですか」。「お願いします」っていうと，自動的に小児科に預けられる。そして小児科で診察して「〇〇ちゃんインフルエンザ」ってなったら病児保育に送られる。そうすると，病児保育に自動的に送られた子どもたちに，紫波町が補助金を出すのです。病児保育の利用料として。これが私たちが考えた働き方改革なのです。だから住みたいわけです。紫波町に住まないとその補助金使えませんから。すべては紫波町の財政を潤わせるためです。

2017 年，これですよ（スライド：オガールエリアの全体を映した画像）。オガールプラザつくって，オガールベースつくって。紫波町役場も PFI(Private Finance Initiative), 22 億円銀行の金借りてつくりました。で，オガールセンターつくりました。みてください。平均賃料が 6,000 円から始まって 7,000 円になって，7,500 円になっているのです。そしてここへ入りたいって人たちがいま行列をなしています。なぜかっていったら，容積率みてください。最初 103%，次 89%，その次 69%。単価を上げて，供給する床を抑えているのです。つまりこれからは，量を供給するのではなくて質を高めて，その質を供給しなければいけない時代になりました。

これは今年完成した集合住宅（スライド：「オガールネスト」集合住宅の画像）。私の仕事で一番のネックは働く人の確保なのです。だからこれは集合住宅なのですけども，オガールネストという，うちの社宅ですね。社宅も日本最高水準の断熱性能です。オール電化で，真夏，5 世帯入っているのですけども平均で 4,500 円です。これをやるのです。なぜかというと，紫波町のエネルギーロスは年間 30 億円です。エネルギーロス。キャッシュアウト。3 万 3,000 人の町で，30 億円のキャッシュアウト。その半分が室内で使われるエネルギーです。その室内で使われるエネルギーを半分に圧縮したら，単純計算で 7～8 億このまちに残るのですよ。だからエネルギー政策もすごく大事なのです。これは社宅なので，これが一般的な部屋 50 ㎡なのですけども（スライド：社宅の内装の写真），これが共有のリビングルームで，業務用の大型洗濯機と業務用の大型冷蔵庫を置いて，ここで毎週のように社員たちが集まってパーティする。こういったコミュニティをつくっているのです。

こういったことが『町の未来をこの手でつくる』という本に書かれていますし，年内に間に合うかどうか，ちょっといま最終校正なんですけども，『公民連携の教科書』という本を書きました。ぜひ興味のある方は買っていただければと思います。もっとテクニカルなことが書いてあります。僕がアメリカでなにを学んできたかということが書いてあります。

つまり，最後，すいません，時間がオーバーして。いいたいことはなにかといったら，図書館の敷地だけで図書館

を再生しようと思ったら，大間違い。できません。図書館を再生しようと思ったらまちを再生してください。周りを再生して初めて図書館が再生されると思ってください。だから，図書館がちょっと傾いてきたなと思ったら，図書館から一歩外に出ればいいのですよ。一歩外に出て，ちょっと活動すればいいのです。図書館の周りのゴミ拾いしてみてください。みんな応援してくれますよ。図書館の周りの雑草引っこ抜いてみてください。みんな応援してくれます。図書館でちょっといたずらした子にやさしく声をかけてあげてください。みんな喜んでまた来ますよ。ただ，それだけだと思います。

もう二度と会うことはないと思いますが（会場笑），あなたの図書館が立派な図書館になることを祈念いたしまして終わりにします。ありがとうございました。

==========

（永田）

ありがとうございました。少し元気になったような気がします。たくさんご質問があるかと思いますが，お手元にある質問用紙に書いていただいて，ディスカッションのときにお答えいただくということになっています。では，内野さんのお話を伺いたいと思います。ちょっと準備をいたします。

【講演】「図書館をまちのたからものにするには」

（内野）

では，よろしくお願いいたします。岡崎さんが図書館に興味のない人間だとおっしゃっていましたけども，私は図書館を知らない人間でした。図書館を知ったのは，図書館に異動になった 40 歳からでありまして，とってもお金のあるまちに生まれたんですけれども，なぜか市立図書館ができたのが，僕が 29 歳のとき。学校図書館も大学も，ほとんど使わずにやってきたものですから，考えてみると，ずっと僕はよそ者みたいな感じで図書館にいました。なぜよそ者かといいますと，図書館の関係者はときどき，ちょっとこういうきつい表現をします。あの方「行政から来た人」よと。あんたも行政職員だろよと（会場笑）。なぜか「行政から来た人」といわれます。私は資格がなかったので，あの人資格がない「行政から来た人」よ。そしてこの係長さんは 2 年もすると，ああつまんなかったと本庁に帰るのだろうと。僕は帰りませんでした。知らなかったので知りたかったんです。知りたいから大学院にいきました。知りたいから図書館を巡り歩きました。そしていつの間にか塩尻から来てくれないかとなりました。図書館でよそ者，塩尻でもよそ者でした。そしていまもよそ者みたいな感じなんですけども。なぜよそ者かといいますと，これまでのやり方，いわれてきた価値観というものではないのじゃないですか，と僕がおそらくいってきたからだと思います。

これは塩尻（スライド：長野県の地図），どんなところかわからない方もいらっしゃると思うのでここです。300 ㎢くらいの大きな市域をもっていまして，私が 50 歳のとき，図書館の建設の指揮をとってくれといってきた，塩尻市民交流センターというところが。延床面積が 12,000 ㎡，そのうち市立図書館が 3,300 ㎡，そして目的は中心市街地の活性化，いろんな意味を含んだ活性化であります。

ちょっとだけ自己紹介をさせていただきますと，先ほどいったように行政から来た人間でありますので，図書館のキャリアよりも，本庁の他部署のキャリアのほうが長いです。企画や人事や広報といった，そういったところのほうが図書館よりも長くおりました。それから，商工観光課へいきたい，商工の支援やりたいと思っておりまして，中小企業診断士の資格も取るために，予備校に通っていた時期もあります。実は商店街オタクでありまして，なんでこの商店街，こんなにさびれてしまったんだといったところには，比較的関心をもっています。そういうキャリアで図書館に入ってきました。

それからもう一つ。いま申し上げたように 40 歳で図書館に異動になり，43 歳で図書情報大学の大学院に入った。そして修士論文は「公共図書館と出版流通のあり方」。なぜこのテーマを選んだかといいますと，1990 年代頃からいわれ始めました「図書館は無料貸本屋じゃないのか」という揶揄された表現に，どうして？どうして身内からそんなことをいわれなければならないんだと思い，大学院に入ればなにか答えがみつかるんじゃないかと思って進んだわけです。今日壇上にいらっしゃる永田先生にも，ご指導を

頂戴しています。そういうことがあったので，実は『図書館員の倫理綱領』，「図書館員は，読者の立場に立って出版文化の発展に寄与するようつとめる」，この一文が僕にはとんでもなく大きなミッションになりました。ところが，図書館の現場の方々とお話をしていると，ちょっと申し訳ないんですがこの言葉が出てこない。本当に出版文化って考えているのだろうかと。これは日本図書館協会が出したもので，「読者の立場に立って、出版物の生産・流通の問題に積極的に対処する社会的役割と責任を持つ」とあるわけですから，当然これを自分がもし仮に，新しく図書館を立ち上げる機会に巡り合えたとしたら，やってみたいという気持ちでおりました。

そして塩尻に来ました。市長にこういうことをいいました。「貸出点数の多寡に拘泥しない図書館をつくります」と。私のように外様の館長は，どこでも爆発的に貸出を伸ばすみたいなところは少なくないです。私は貸出点数を増やすことを図書館のミッションにはしたくない。図書館を利用者のためのものから，市民のためのものにしたい。なぜならば，全国の多くの図書館，実際の図書館を利用されている方は，2 割とか 3 割程度しかございません。できるだけ多くの市民の方に利用してもらいたい。だから貸出点数を増やすということよりも，利用者登録を増やしたいということを，市長に申し上げました。

それから，市民というのはもちろん塩尻市民でありますけども，広域圏の住民というものを，最初から利用者としてターゲットにしたい。そうじゃないと限界があります。塩尻だけの住民のために，利用者登録を増やすといっても。そういったところからまず職員の方にお願いをしたことがあります。

実はですね，ちょっとこれから僕がお話しすることを，なんだよ自慢話かよというふうに聞かれたくありません。そんなつもりでいうつもりはないです。これもやめましょう，あれもやめましょうということはたくさんあったんですけども，それを全部やってしまうと。僕がそれまでみてきた図書館，その頃は 200 館ちょっと超えていました。いまは 500 館超えています。よくあるんです。「なぜこういう棚をつくったのですか？」，「前館長が決めたので」とか，「なんでこんなことをやっているのですか？」，「前館長が決めたので」。そうじゃない。皆さんが決めたことでしょ，というふうに落とさなければならない。といっても新館のオープンはどんどん近づいてまいりますから，これだけはやらせてくださいと，ちょっと厳しかったかもしれません。

八つの分館の購入している雑誌が非常にかぶっている。貸出を伸ばしたいから。でも貸出を伸ばすことは図書館の目的ではありません。もっとたくさん市民に提供するんですと。それから，ベストセラーの複本，この購入を抑制をしましょうと。これも申し訳ないんですけどもお願いしました。それと，近隣の図書館との蔵書の差別化というものも，徹底してやってゆきましょうと。これはなぜかというと，いまは松本に丸善があるんですけども，僕が着任したころは丸善がなかったので，いま僕が東京で目にしている，丸善やジュンク堂や紀伊國屋書店に並んでいる発行部数の少ない本は，ほとんど松本には入ってきていません。俗にいう学術書や専門書といったものです。本当になかなかみる機会がありません。そういったものをみせるのは，もちろんそれは書店の責任ではないと僕は思います。書店は商売であります。売れない本をたくさん置くということが，僕はミッションにはなりえないと。だからこれは公共の仕事でしょうと。というような話もして，図書館の関係者の方も多いのでわかると思いますけども，白水社の「文庫クセジュ」，あんまり読む人いませんよね。よいシリーズなんですけども。書店にも置いていませんね。これなんかは全点買いでいこうよと。それから「日経ビジネス人文庫」。これも書店さんにはほとんど置いていないです。長野県内の図書館にもほとんど置いていないです。これは全点買いでいこうよと。こういったことを職員に話しながらやってゆきました。

それから地域資料の収集です。県内の同人誌，大学の研究紀要等も積極的に収集しました。ということは，どちらかというと貸出は伸びない，ということをあえて設定したんです。いいじゃないかと。しかし，結果は伸びました。結果的には伸びたんです。貸出は一見伸びなくなってしまうと思うかもしれませんけども，そうではありません。

こんな変化がありました（スライド：「相互貸借件数の推移」2007～2017 年のグラフ）。相互貸借。水色がほかの地域に塩尻が貸出した点数です。濃い青が借り受けです。え

んぱーくがオープンした 2010 年，図書館が閉まっていた期間がありましたから，ちょっと減っていますけども，えんぱーくができる前は当然借りる方が多い。えんぱーくがオープンしました。人口は変わっていません。相変わらず 6 万 7,000 人の小さなまちです。ところが，あーっという間に貸出が増えました。多種多様な資料を集めるということが，こういうふうに顕著な数字になってあらわれました。

実はいままでも，図書館が書店さんをつぶしているんじゃないか，出版社をつぶしているんじゃないか，そういう議論がたくさんされてきました。私はそれが知りたくて大学院に入りました。そして，ずっとそれを研究してきています。これは，2010 年を 100 とした場合，2017 年の現状ということで，長野県の中信地方があります。塩尻を含めた四つの市が中信地方になります。そこの出版年間販売額，どう変わったか。ここは，あえて名前を伏せています。塩尻は 89.5，減っています。でも全国の出版物の販売率は，84.1 です。ところが，A 市（79.4），B 市（78.1），C 市（61.0）は非常に厳しい状況になっています。これで図書館の存在を認めてほしいと主張するものではありません。ただ，データはデータとしてあります。なかにはね，非常に厳しい経営に陥ってしまった書店さんがあることも把握はしています。

さて，サステナビリティのお話ですが（スライド：平成 27 年 5 月「県と市町村との協議の場」説明資料」），これは市の基本計画の目指す都市像というところで，平成 27 年につくられた資料なんですけども，これ総合計画です。「塩尻市のポテンシャル」というものがあります。ここに，「塩尻市のポテンシャル（潜在力）」というところで，えんぱーくが入っています。僕は役所の企画課にいたことがあるので，実はこれはすごいことなんですよ。ここに図書館が入るって。普通は入ってきません，ここには。ちゃんとまちを動かす一つの大きな潜在能力をもっているところとして，認められているということですね。

これは『KURA』という月刊誌の増刊号ですね。「信州塩尻」という増刊号なんですけども，今年の 3 月に出たものです。市長がいっています。「『人づくりから始まる地域づくりの拠点』ということで一番最初に手掛けた仕事として，えんぱーくがあります。現在，えんぱーくには年間 60 万人を超える人が来ていただいています。正確にはほとんど 70 万人近いです。ちなみに 6 万 7,000 人のまち（市）です。都会ですと人と知が集まる場所として当たり前にあり，当たり前に人が集うのですが，私もさまざまな施設を視察してきましたが，えんぱーくのように駅の近くにあり，お子さんから高齢者まで気軽に来られる場所は，明らかに地方都市における一つの都市ブランドの成功例だと思います」。市長が「都市ブランド」という言葉を使うまでに至りました。私が最初塩尻に行ったとき，「塩尻は，内野さん，ワインのまちなんです。漆器のまちなんです」と教えていただきました。最近あちこちの講演先でいわれます。「内野さん，塩尻って図書館のまちなんですね」。これが大きく変わったところで，市長も認めています。ワインより先にえんぱーくが出ちゃいました。

『図書館雑誌』という雑誌があります。これはちょっと自分の本で申し訳ないんですけども，『図書館からのメッセージ』という本を私が出しまして，その書評として書かれたものです。僕が書いたわけではありません。ちょうど真ん中あたりですね。「本書のなかから，塩尻市民の嶋田嘉一郎氏の言葉をここで挙げておこう。図書館のありがたさを，本とか知識とかじゃなくって，私はもうちょっと広い意味で人間を知る場所に利用してくれたら，と思っています。『図書館とは人間を知る場所』だという図書館の本質を市民が見抜き，市民自身が広く語ってらっしゃることに驚かされる。これは，地域の図書館が市民の間に根づき，市民のための図書館となっていることの証明であろう」ということを，レビューで書いてくれた方がいらっしゃいます。

実はですね，この話を受けたときにちょっと悩みました。私は初代館長。いまは四代目の館長です。現館長が話したほうがよいんだろうなと思ったんですけども，ちょっといろいろ考えて，登壇させていただくことにしました。というのは，毎年 5～6 通くらい，ある市民の方から定期的に手紙が届きます。『市民タイムス』という地元紙，中信地域に広く購読者をもっている地元紙がありまして，ここにえんぱーくの記事が載ると必ずそれを送ってくれます。そしてお手紙があります。最後に必ずあります。「図書館は進化しています。えんぱーくは進化しています」そして「内野さんに感謝」。必ずこの感謝っていう言葉をつけてくれま

す。ならば，多少はその DNA をまくことができたのではないか。ならば登壇させてもらってもいいかな，と思って登壇した次第です。

さて，よく図書館の関係者はいいます。予算がないんです。うちの町お金がないんです。そうでしょうか。平成 29 年度の予算。図書購入費，塩尻は 2,784 万円。鹿嶋は 700 万。ちなみに財政力指数は，塩尻は 0.71。鹿嶋は相当貧乏なんでしょう。違いますよ。0.98 です。鹿嶋は超お金もちですよ。かつては 1 を超えていました。一時は 1.34 くらいまでいきました。ものすごいお金をもっているまちです。なのになんで鹿嶋が 700 万，なんで塩尻が 3,000 万もお金があるんだ。お金があるかないかではないですね。図書館をどうやって為政者，要は首長のもとに届けるかです。危機はなかったのか。ありました。ものすごい危機がありました。拙著にも書いたことがあります。3,000 万だった資料費が，僕がいたとき 2,000 万にする，といわれました。どこの役所でもある話です。そして仕方なく頷いて，あーあまた切られちゃった，というのがどこの役所でもそうでしょう。ここは，よそ者の強みです。私は 1,000 万削らないでくれということで，復活要求をしました。1,000 万復活しろなんてね，外様じゃなかったらできないですよ。なぜならば，ずーっと仲良く仕事をしてきた財政課長，飲み友達の総務部長。彼らが頭絞ってつくった予算の内示にケチつけるんですからね。ふざけるな，私はできませんといって，市長にはっきりとできませんと。そのとき市長が，よい市長ですね。内野さんできないっていってるからなんとかしてあげたらと，市長が軽くいいます。市長はそういうとこ即決なのですね。わからないから（会場笑）。部長と課長は大変ですよ。どうすりゃいいんだろうこれから。いわれました。何人かの職員にははっきりと。「市民だって職員だって，みんなが図書館が大きくなればいいなんて思ってねえからな」といわれたことがあります。

「信州しおじり　本の寺子屋」という図書館事業があります。「本の学校」のこれは図書館版でありまして，「本の学校」というのは，鳥取県の米子市に今井書店というのがありまして，米子につくった，書店員さんの学校ですね，民間の。これを図書館版としてなんとかやりたいと僕はずっと思っていました。そこにやって来たのが，河出書房新社の元編集長です。私どもは大した時間もかからずに，お互いにインスパイアしたといいますか，やりましょう，やってみましょうという話になりました。なにをやるか。出版社の方々は，図書館員とは人脈が違います。たくさんの作家さんに知り合いがいます。「じゃあ僕が連絡すればなんとかなるという方いっぱいいるよ。そういう方を塩尻に連れてくればいいんじゃない。そして塩尻は場所を提供してくれればいいよ」ということで，信じられないくらい安いお金でこれができました。目的は修士論文の延長線上にあります。「本の学校」はずっと研究のテーマにしていました。そして，地元の書店，出版社との連携，そして出版文化を守るということが図書館の矜持である，ということを職員と意識を共有しながらやってきたつもりです。

これが「本の寺子屋」ですね（スライド：「本の寺子屋」の写真）。その「本の寺子屋」を一つの本にまとめたものがこれです（スライド：書籍『「本の寺子屋」が地方を創る』の画像）。ご覧になっている方がいらっしゃるかもしれませんけども，これの非常に面白いのは，市が少し関わっています。製本費として 100 万円計上しました。歳入として，印税として 72 万円入ってきました。要は自治体が本づくりに関わる。これが全国に出回る。読んだ方が塩尻に行ってみたいと思う。そうやって稼げる図書館が生まれてくる。そういったことのこれは一つの実践例であります。

こんなこともありました（スライド：左側に「韓・日出版文化フォーラム」のポスター。右側に韓国語で書かれた文書）。「本の寺子屋」の話が韓国に飛びました。韓国で日本の出版を研究されている研究者が，「非常に面白い。しかも 6 万 7,000 人という小さな自治体で，なぜこんなことができるのか」ということで 20 人を超える学者を中心とした方々が，塩尻に来られました。海を越えたんですね。海を越えて，塩尻はなにをやっているんだ，なぜできるんだということで，お話をさせていただく機会をいただきました。こちらの右側は韓国語で書かれた報告書です。

公共図書館の変化。これはまあ公共図書館の方はわかっていると思います。例えば 1997～2017 年を追ってゆくと，1 館あたりの資料費予算は 59%まで落ち込んでいます。もうほとんど半分になっちゃっている。専任職員数は 66%，ここも厳しい。個人の貸出点数。これは大きく伸びてはい

ますけども，1 館あたりの貸出点数でいうと，この 10 年ほとんど変わりません。

こういう状況になっているなかで，図書館のサステナビリティをどんなふうにやってゆけばいいのかとなったときに，これは『市民タイムス』，中信地域で非常に読まれている新聞ですね（スライド :『市民タイムス』の記事。「市図書館　貸出数が最多に」）。こんな感じで，地元紙があると図書館をたくさん扱ってくれます。そして，ここにも書いてあるんですけれども，塩尻は 1 人あたりの貸出点数が 9.97 ということで，長野県内の 19 の市では断トツであるということが書かれています。おかしいでしょ。貸出を伸ばさない，貸出にならないような本を収集する。しかし，結果的にいうと貸出は伸びるんですよ。単純にいうと，本が届いていないのです，読者に。だから図書館が本を届けるっていう仕事をしなければならないんです。貸出を伸ばすっていうことは悪いことではないんです。ただ多種多様な本を，図書館は届ける必要はあるだろうと僕は思います。

そこで，結論めいたことをお話しすると，図書館が進化をし続けるには，まずは為政者の理解，首長の理解が必要です。図書館員は，はっきりいってここが弱いです。私が企画課から図書館に異動になったときに，図書館のやっていることが企画課にすら届いていないのです。なんでこれを届けてくれないの，企画に。財政もいうでしょう。なんで財政に届けてくれないの。図書館はものすごいポテンシャルをもっているんですよ。わかっていればなんとかできるのにっていうことですよね。

で，館長は図書館を変革するのではなくて，図書館員を変革しなければならないと，僕は思っています。館長が図書館を変革してしまうと，続きません。あれはみんな前の館長がやったことです，私たちはなんにも聞いていません。これではいけません。図書館員がちゃんと自分たちがやったんですと。ですから，こんな例が塩尻にはあります。僕が塩尻に着任したときに，一つだけ，これだけ買ってほしいんだ。出版関係の逐次刊行物を塩尻は買っていなかった。『出版月報』を買いましょうよと。『出版月報』を入れてもらいました。『出版月報』を置いている図書館は，長野県内でもほとんどないです。僕が退職しました。退職してから，僕はなんにも塩尻に対して指導はしていません。僕が退職してから，塩尻は『出版ニュース』もちゃんと買うようになりました。『新文化』も買うようになりました。ちゃんと図書館員が変革しているんですよ。私たちがやります。だから傑出した館長は要りません。全員が矜持をもつこと。

そして，図書館員はまちに出ることです。まちに絶対出なければ図書館員はダメです。当たり前のことです。社会教育施設ですから。（車の画像がスライドに映る）あ，これで終わりですね（会場笑）。お話ししたいことではあるんですけどもね。これ全然塩尻に関係ない写真じゃないですよ。実は塩尻にものすごく関係があるんです。でも時間が来ましたので，終わりにします。

（永田）

ありがとうございます。その話は後ほどまた伺えればということで。ではここで休憩にいたします。ロビーのほうにペットボトルのお茶の用意もございますので，どうぞくつろいでいただければと存じます。また，お二方のお話に対してのご質問については，質問用紙がございますので，それにご記入いただいて，私どもにお預けいただくと，後半の進行がスムーズにゆくかと思います。どうぞよろしくお願いいたします。それでは，20 分弱の休憩です。

==========

ディスカッション

（永田）

時間がまいりましたので，ディスカッションに入りたいと思います。多くの質問をいただいております。ご質問に答えながら，少しずつまとめてゆきたいと思います。

岡崎さんが先にご登壇いただきましたので，岡崎さんへの質問からまず，「紫波町だからこそできたことは。紫波町でしかできなかったことは」という質問がございます。このあたりからお答えいただくとありがたいです。

（岡崎）

はい。できることというよりか，結構私の場合は，やるかやらないかというところで人のことを判断するので，できないことはできなくてよいと思うのですよ。なので，紫波町だからできたことっていうと，そうですね，やっぱり

町長さんがいらっしゃったからだと思いますよ。民間企業の，自分の息子よりも若い私に，10 年前に買っちゃった土地をなんとかしろといってくれる町長がいたっていうのがまあ，一番だと思いますね。これ結構大事なことでして，年齢関係ないのですよ。

なんかやるときに，よくいわれます。特に年上の，僕父親亡くしているので父親世代の方からみんながこういってるぞとよくいわれるのです。だいたいみんないってないですね，それって。だいたいみんないってないですから。だいたい一人か二人ですよ，そういったことに対して，非常に，気にしない。事業についての心配事は，やったことがない人の心配の声，というのは心配の声じゃないのですよ。「失敗してもらいたい応援団」だと思っていますので。いっている意味わかります？成功してもらいたくないのです，心配している人たちは。なので，そういった思いに対して，耳を貸さないようにしろと教えてくれたのが，町長でもありました。誰がなんといおうと正しいことやっているのだから，俺たちは正しいことやっているのだから，絶対にへこたれるなといってくれたのも町長です。

なので，紫波町だからできたということではなくて，町長という圧倒的なリーダーシップ。あの方は選挙に出たのは最初だけでしたよ。あとは対立候補すらも出てこないくらい，圧倒的なパフォーマンスを出した町長だったので。そういう人に頼まれたということが大きかったし，信用できたなということだと思います。

（永田）

はい。ありがとうございました。

さらに続いてですね，「サステナビリティを担保するためには，地域的なビジョンが欠かせないと個人的には考えています。ビジョンをつくること，ビジョンをもつことについての考えをお聞かせいただければ」ということで，これは岡崎さんと内野さん両方にお伺いしたいと思います。

（岡崎）

はい。これも「ビジョン病」になっちゃダメで，じゃあビジョンってなんですかって話ですよ。よくいわれますよね。合意形成つくるときに，ビジョンはなにかって。じゃあ「ビジョンってなに？」って逆に聞くとその人が答えられないって。

私のなかのビジョンっていうのは，はっきりしています。いろんな解釈があると思います。100 人いたら 100 人のビジョンに対する解釈違うと思うのです。僕はビジョンはなにかっていったら，この地域がどうやってメシ食ってゆくかしか考えません。会社のビジョンっていわれたら，この会社がどうやってメシを食ってゆくかしか考えません。なので，なんのためになにをやって，どうやってお金を稼いで，どうやってメシを食ってゆくかというのがビジョンなので，当然ビジョンは必要です。僕のなかでは。

だから紫波町はどうやってメシ食ってゆくのだということを考えたうえでの，あの開発だったのです。だから図書館に農業を。紫波町というのは農業のまちですよ。食料自給率 170%です。170%あるのですけれども，特産品は一つもないというのが強みなのです。だから産直をやったら，いろんな多品種多品目が並ぶのです。だからお客さんが喜ぶのです。ナス一つ取ったって 10 種類くらい並びますよ，夏場。ミニトマトだって 5 種類あります。それくらい多品種多品目な物がそろうっていうのがうちの強みなのです。ですからビジョンは，要は，紫波町は図書館が元気になるのではないのです。図書館が元気になればメシ食ってゆけるとは思っていません。農業が元気にならないとメシ食ってゆけないから，なんのために図書館つくるのかっていったら，農業を営む人が幸せになるような図書館をつくらなきゃならない。それが私にとってのビジョンなので，当然ビジョンは必要だと思います。

（永田）

内野さんはなにかございますか。

（内野）

そうですね。昨年 6 月に，韓日の出版フォーラムで塩尻に行って講演させていただいたときも，終わってから市の幹部の方から聞かれました。「非常にうまくいっている。これまではうまくいっている。これからどんなふうにしてゆけばいい？」と聞かれました。市の相当な権力をもっている方ですから，はっきり申し上げましたけども，「施設的な魅力というのはどんどん枯渇してゆくでしょう。ただ，図書館というのは資料が熟成してゆくので，しっかりとした資料をもっていれば，これは蓄積してゆくでしょう」と。「問題は人でしょう」と。人がどれだけ，素敵な笑顔で，

素敵なスキルで，ものすごいノウハウをもった人が塩尻にはたくさんいるんだということをつくるとすれば，極端ないい方をして申し訳ないですけど，「日本一高い賃金を払ったらどうですか，非正規の司書の方に」と。そして，なんでこんなに払えるんだといわれるくらい，人がどんどんやって来る図書館にしたらどうですかと。「そんなに高いもんじゃないですよ，人件費なんて」というふうに申し上げました。先ほども申し上げたように，塩尻の図書館は，かなり堅調に推移しています。例えば，そろそろ落ちるであろうと思われた新規登録者は落ちない。落ちるであろうと思われた貸出数は落ちない。それはなにが支えているかというと，いまの職員，館長をはじめとした職員のスキルであり，ホスピタリティだと思います。でも，それをもっとさらに上げてゆくためには，僕は，そろそろもうちょっと手厚い，安心できる，そういった雇用というものを，図書館界でリードするべきではないかと思っています。

（永田）

はい。ありがとうございました。ご質問なさった方はいただいたコメントでよいですか。それともさらになにか追加がございますか。

なければ，次の質問にまいりたいと思います。岡崎さんに「稼ぐ図書館が具体的にどのようなことをしているか教えてください」という質問がございました。これについてもお願いいたします。

（岡崎）

正確にいうと，稼ぐ図書館というより，僕のイメージからすると稼がせる図書館員というほうで，なにをするかというと単純です。まず返事と挨拶しっかりしてください。もう，図書館をつくるときに僕いろんな図書館へ行ったのですけれども，だいたい気分悪くなるんですね。返事もしないし挨拶もしないし，この人たち客商売しているかなって。というのが非常に違和感があったので。手塚が浦安から来てくれて話したときに，僕が企画しているものをあなたが息を吹き込むのだと。吹き込むときになにをやるかといったら，まず返事と挨拶しっかりやろうって。そこからだって。客商売なのだから，返事と挨拶しっかりやんないところに客なんか来ないのだよって。ただ単純です。それをしっかりやれるかどうかです。だから，誰でもできることを誰でもやらないくらいちゃんとやれるかやれないか，なんですよ。じゃないと，せっかく民間がいろんなこと一生懸命やったって，図書館のイメージ，たった一つの返事，挨拶しなかっただけで，もうエリアの価値観下がるのです。税収が下がる。なので，とにかく返事と挨拶はしっかりやろうと。で，さっきの図書館員がオープン 10 分前に全員が一列に並んで，発声練習をちゃんとやっていると。

うちの図書館に来ていただければわかるのですけども，館内は写真撮影禁止ですよ。けど写真を撮影しちゃう人がいる。それは悪意をもって撮影するわけじゃない。よい図書館だな，きれいな図書館だなと思って撮影しちゃう。これをうちの図書館員は，どういう注意をするかっていうと，腕章をもってゆく。もってきて，「申し訳ございません。許可が必要なので，お帰りの際でもよいので，サインだけお願いいたします」というのと，頭ごなしに叱り散らすのと，どちらが印象がよいのかということですよ。悪いことしようと思ってやったのなら，そりゃそうだけど，悪いことしようと思ってやっていないわけでしょ，写真を撮る人たちは。そういったことに対する一つ一つの対応をとっても，うちの図書館の，オガールのエリアの価値を上げてゆくってことが，非常に教育されているという。

うちの館長もそうですよ。図書館長は紫波町役場の OB ですけども，教育畑には一度も行ったことがないという。電気屋さんです。職種は。工学部電気工学科を出た人ですよ。この人が退職する直前に私のところに来まして，「岡崎君，図書館の入口のところを 1 坪だけ俺に貸してくれないか」っていってきたのです。「なにするのですか，1 坪で」っていったら，「靴磨き屋をやりたい」って。すぐ町長にいいましたね，「あの人，図書館長にしてくれ」って。なんかわかんないけど，この人が図書館やったらめちゃくちゃ面白くなりそうな気がしたのです。真っ白い靴を履いていましたからね。あんな白い靴を履きこなすロマンスグレーは，紫波町にはこの人しかいないって思って，この人が図書館長やったら，面白い図書館になるなって直感が働いたのです。で，その人もしっかりします，返事挨拶。なので，稼がせるというか稼ぐ図書館員，別に特別なことしなくていいです。レファレンス能力高けりゃそりゃいいけども，やっぱり返事挨拶しっかりするというのが，すごく大事だな

ということをいま思っています。

（永田）

ありがとうございました。実は私も紫波町の図書館にふらりと入って，その接客のよさに感激した一人です。なので，今日の岡崎さんの話は大変私には響きました。

それから，引き続き岡崎さんに「紫波町の図書館の利用者で，にぎやかなイベントで発生する音に苦情をいう人はいるのでしょうか。図書館は静かに利用するものと考えている利用者への対策など，なさっている場合はご教示ください」というものと，もう一つ，「オープンしたときは，たしかにきれいな施設だし利用が多いのが普通だと思います。数年たって利用がいまひとつの状況になった場合はどうされますか」というご質問ですが。

（岡崎）

まず一つめの質問ですが，これはよく質問されることなのですけども，よい質問だと僕は思います。当然心配になりますよね。けど，設計する段階から図書館を使い倒すっていう前提で，民間が設計しているのですよ。図書館を使い倒すって前提で考えているので，設計の段階から，騒がしいところと静かなところをすごくセパレートしています，上手に。だから建築の設計で解決しているのです。うちは学習室がないのです。だからスタジオを平日は学習室に開放しているのですけれども，ものすごい音が出るところと，廊下一つ隔てているのですが，そこの壁にものすごい防音の壁をくっつけていたりとか，あとは騒がしいところの下はキッチンスタジオにしたとか。だから，静かで本を読みたいところと，騒がしい音楽をがんがんやるところは，建築のほうで考えてセパレートしている。

二つめの質問ですけど，まあ当然そうですけど，この発想はたぶんね，行政の人だと思いますよ。行政の方。それはなぜかと，自分の金でつくってないからですよ。自分の金でつくってないから，つくったときが新しい，そこがピークだっていうのです。私，借金しています。借金したら金を返さなきゃいけないのです。金返さなきゃいけないってことは，常に新しくしてないといけないのです。常に新しいコンテンツいれないといけないのです。常に新しいことを考えなきゃならない。常に変化しなきゃいけない。だから，誰も完成したなんていいません，オガール。借金している奴らは。借金返済したらどうするか。また借金するのです。借金して設備を直すんです。また借金して屋根を塗り直すんです。公共事業は違いますよね。つくったら終わりですよ。だからこの質問した人，たぶん公共の人だと思います（会場笑）。たぶんね。自分で借金して事業やってない人。借金すればわかります。おそろしいですよ。僕，33 億円ですよ，最高。いま 23 億円です。10 億返しました。銀行からあと 10 億もう 1 回貸してやるぞといわれています。借りないですけれど（会場笑）。だけど，いつかまた借りなきゃならいのです。だって設備が壊れるから。だから，常にリニューアルするというその算盤とともにあるのです。

公共事業の怖いところは，まあすいません，変な表現になるかもしれませんけども，子どもをつくっちゃったのですよ。子どもをつくっちゃった。公共事業しちゃった。そのあとに育児放棄しているのですよ。育児放棄した子どもどうなるかって。そりゃぐれますよ。一人でぐれりゃいいですよ。違うのですよ。周りを巻き込んでぐれるのです，公共事業って。けど民間は金かけているのです。借金して子どもつくりましたから。その借金返してもらうのです，子どもに立派に育ってもらって。だからちゃんと育てるのです。いま国のほうによくいっているのです。補助金は極力やめろ，ファイナンスにしろといっています。金利のかかる金，もしくは配当としてキャッシュバックのある金に換えれば，無駄なものができなくなるって。

僕は 3 年くらい前に日本銀行に呼ばれました。日本銀行の行員 200 人に対して講演しました。いいました。皆さん方がね，金すりまくるから，補助金としてばらまかれて地方がダメになっているって。しかもすりまくったから円安だって。今日のギャラはドルでくれっていったら，もうそれ以上呼ばれなくなりました（会場笑）。

けどね，いっぱいお金すった。よいですよ。だぶついているのですよ。銀行にいま金がありますよ。だぶついているものが。いま大チャンスなのです。本当に稼ぐ公共事業つくるのであれば。ちゃんと返済の見込みがあって，ちゃんとやっている人間がやりたいと思ってやるのであれば，いまお金がつく時代なので，安易に補助金に頼るのではなく市場の金を使って，その地域に必要な事業を起こしてゆ

くっていう，いま本当に日本は大チャンスを迎えているわけですよ。なので，決して補助金を全否定しているわけではないですけれども，育児放棄するような親にお金を渡しちゃダメです。というのが，僕の考え方です。

（永田）

公共事業のお話とともに，岡崎さんのいまの説明はサステナビリティという課題への回答を含んでいると思います。

それでは，内野さんのほうに移りまして，「内野先生，首長からの理解が必要ということでしたが，理解を得るためにアピールを積極的にということですが，具体的にいまできるアピールとはどのようなものがありますか。もし実践されていたら教えてください」というものです。

（内野）

プロフィールにも書きましたけども，鹿嶋で図書館に９年おりまして，そのあと１年間だけ学校教育課の課長をやりました。着任早々に職員が，とにかく待っていました。「内野さん，学校図書館に人を配置しましょう。課長やりましょう」といってくれました。「やるよ」と。だってこの部署でないとできないんだから。図書館長時代に学校にいきました。なにをいっても学校長は聞いてくれません。たかが図書館長ですから。ところが学校教育課長になると，学校行ったら，ものすごいんですよ。金もっているわけですから，施設からなにから全部直せますよと。学校司書をつけて，本を新しくして，備品を買い替えて，電算化して，全部やっちゃいましょうと。もちろん，できるかどうかはわかりません。できるポジションについたんです。学校教育課長にならない限りできないんですよ，これ。そして市長にこれを訴えました。市長は「本当に子どもたちが図書館に来るのか」と。「来ます」と答えました。そして「一気にお金はつかないから，長期計画でやってゆこうよ」と。この言質をとりあえずいただいて，そのあと僕は塩尻にいきました。

そのあと鹿嶋は全校に学校司書を配置しました。電算化も終わりました。結局，政策にすれば，市長が知るところになれば，市長はそうなんだと。結局知らなかっただけなんですよ。知らなかったからいままでやってなかった。それを知らせるべきポジションの人が，為政者，首長に伝えるという大切な仕事を，どちらかというと僕は図書館員の方々は，若干おろそかにしているんじゃないかなと。すごいポテンシャルをもっているわけですから。それは，企画に，財政に，どんどんいうべきなんです。そしてそれを市長につなげるべきなんです。そうすると市長は「知らなかった。そういうことで変わるんだ」ということになるんです。だから市長が図書館を使わない，本庁の職員は図書館を使わないって皆さんはいいますけども，図書館の使い方を知らないだけなんです。

（永田）

ありがとうございました。よろしいでしょうか。フロアのほうからなにかご意見ございますか。

それでは，もう一つ内野さんに，「最初のほうのスライドに，『市民＝広域圏の住民』とあり，私たちの市でも，市民に限らず，期限内に返却いただける方であれば全国の方にご利用いただいております。私自身こういった考え方が全国に普及したらどんなによいだろうと思います。現在総務省の定住自立圏構想が進んでおり，これに公共図書館の相互利用などが掲げられているところかと思いますが，これの方向性についてお考えをうかがいたい」。

（内野）

実際の例をお話ししたいと思います。しっかり覚えておりませんが，こんなだったというふうに理解をしてください。隣の大きな市の議員さんから，塩尻の議員さんがいわれたようなんですね。「なんでうちの市のほうから，塩尻の市の図書館まであんなに本を借りにいくんだ。なにかしかけはあるのか」というのをいわれちゃったということを，嬉しそうに議員さんはいうんですね。「館長，なにかしかけはあるのかい」，「特にしかけはないんだけども，塩尻では近隣の自治体の蔵書を調べて，その隙間をぬうような蔵書を一部考えました。そうなってくると，自分のまちの図書館にない本が塩尻の図書館にはあるんだということになれば，それはその結果利用者になるのかもしれない。最初から利用者として想定していただけですよ。要は市民なのですよ，全部」というようなお話をさせてもらいました。

（永田）

ありがとうございました。この問題はいろいろな観点から検討してみる必要があります。こういった方向もその一

つだと思います。

さて，これはどちらかな，「図書館職員の旧役人魂をどう変えるか教えてください」（会場笑）。まあ図書館職員だけじゃないですけど。サラリーマンも役人というか組織病ありますけども。

（内野）

私も旧役人です，特に信用のおけないひげを生やしている人間です（会場笑）。なかにはよい人もいます。直接的にはお答えにならないかもしれませんけど，実は僕，最近これに気づきました。図書館を辞めてから気づきました。図書館の方よりも，役所の人のほうが接遇いいよということです。僕はそう思っていなかったんです。図書館のほうが接遇ははるかによい。役所の人のほうがぞんざいな態度をしていると。最近変わりましたよ。なぜならば，図書館に来られる方は図書館の味方です，ほとんど。市役所は違いますよ。最初から怒りにゆく（会場笑）。最初から怒りにゆくんだと思ってやって来る方がいますからね。ということは，その方々に対する接遇です。ということになると，ぶすっとなんかしていられませんよ。僕本当にそれは思います。全国の図書館歩いていると逆に「あれ，これはまずいでしょ」的な状況をみる機会が非常に増えています。逆に図書館員の方々は，おそらく他市町村の図書館には視察に行っても，一番肝心の自らが所属する自治体の市役所には行っていますか。ここと比較されるんですよと。市役所ではこうだった。図書館に行くとああだった。僕は最近顕著に市役所はよくなっているという感じがします。これは一度よく学んでいただきたいなと思います。要は，役人魂については，僕は直接的にはどのようにお答えしたものかちょっと用意ができないものですから，役人もまあ悪い人ばかりではないので（会場笑），ときおりよい人もいますので，そこらへんはみていただきたいと思います。

（永田）

はい。では岡崎さん。

（岡崎）

僕も役人だったので（会場笑）。ただ公務員の人たちはなんだかんだいいますけど，好きな部類ですけどね。僕にはないしっかりとした，体系立てて下から積み上げる考え方をもっているので。逆に自分はしませんよ，下から積み上げるっていうのは。どっちかっていうと家を建ててから設計図考えるタイプなので。公務員の方々は設計図を書いてから，家を建てるという。私とはまったく違うアプローチ。目的や目標は一緒なのですけれども，違うアプローチなので。役人魂というのは使いようだと僕は思うので，そういったものが活躍できる場に入れるしかないですね。ただ，図書館における役人魂というのは，僕はさっきもいったように返事と挨拶ができない人は，ハナから無視するという。そういうのはもう，育ちの問題ですよ。役人だからじゃなくて。

答えになっているかどうかわからないですが，株式会社オガールには毎年のように，日本全国の自治体から１名から２名研修に来ます。１年間の研修です。１年間の研修ですよ。今年来ているのは広島県の福山市。福山市の 31 歳の男子が１年間私のところで仕事をしています。私の右腕となってやってくれています。最初の役所の評判は，真面目。真面目です。岡崎さんのところへ行ったら，絶対岡崎さん使えないよっていわれたのですけれども，私不真面目なんで，真面目な人大好きなのですよ（会場笑）。私が気づかないところをちゃんとやってくれるので，非常にありがたく思っています。３月に帰る予定なのですけども，「福山市役所の倍出すから俺のところへ残れ」って（会場笑）。だんだんちょっとその気になってきましたね。

けど本当にね，育ちの問題は結構あって，環境なのですよね。図書館とか，いま動物園の再生もやっているのですけど，動物園も役人魂大事だっていっている人たちが，まあ８割くらいいますからね。動物の命より自分の給料のほうが大事だっていっている人たちですよ。これどうしてこうなるかっていうと，すぐに変えるのは難しいと思います。すぐに変えたいと思ったら，人事異動や組織の改編を活発化させることだと思います。外の空気を味わわせて，ああ自分の考え方は本当小さい，小さい社会のなかでしか通じなかったのだということに気づかせてあげる。それをパワハラだとかなんだっていうんだったら，しょうがないですよ，もう。ブラック企業だって。僕，建設省勤めていたときなんか始発ですよ，帰るの。始発。終電で帰れたら今日帰るの，早かったって。いまブラック企業だブラック企業だっていろいろと騒がれていますけど，僕にしてみたらオ

フホワイト企業だって（会場笑）。グレーにもなってないですね。だけど僕は耐えました。耐えた結果どうなったかっていいますと，建設省にいた頃の上司二人がもう，いま事務次官になっていますよ。僕の上司二人が事務次官になりましたし，いま MINTO 機構の理事長だし，都市再生機構の理事長だし。めちゃくちゃ応援してくれます。当時めちゃくちゃ俺は怒られましたけど，めちゃくちゃ応援してくれます。それはなぜかっていうと，そういう社会で耐えたからなのですよ。

だから役人魂がよい意味での役人魂と，なんかその新しいことをやりたくない役人魂。これを変えたいのであれば人事しかないですよね。さっきもちらっといいましたけど，歳をとっているから図書館長をやる，これはあんまりよくないですね。紫波町の図書館はさっきいったとおり白い革靴を履きこなす，不思議なおじさんがやっているから面白いのですよ。そうすると，若い司書たちがなにか提案をすると，やれやれっていうのですよ。やってみろよって。司書さんたちだって賢いですよ。金がないとわかっているから，金がかからない企画もってくるのですよ。なんのリスクもないですよ。なんのリスクもない。やれやれって。だけどやらせないんですよね。それでしょ，たぶん役人魂っていうのは。やらせてもらえないっていう。そういうのはね，黙ってやればよいのです（会場笑）。黙って。うちの町長にもいわれました。改革する改革するっていって受かった奴みたことないって。そりゃそうですよ。改革するぞって，「改革されるの？俺ら」ってなったら投票しないですからね（会場笑）。改革者はね，黙ってやるのです，黙って。じーっと，なにも知らん振りして，黙ってやって世論を巻き込んでゆくっていう。小さなレジスタンスが起こっているわけですよ。なので，そういったものをちょっと駆使しながら。だって，やってよいことと悪いことありますから，黙ってやってよいことやればいいんですよ。よいことを黙ってやったら，まあ怒られはしてもクビにはならないっていうくらいの，勢いでやったほうがいいと思いますよ。

（永田）

キレのあるお言葉をいただきましたが。

次に，「図書館の隣に廃校の校庭があります。これを有効活用するには，法的な規制は別として来てもらうテナントはどのような優先順位になりますか」という，都心の図書館と聞こえますが，なにかヒントをいただきたいようです。岡崎さんどうでしょうか。

（岡崎）

僕にはわかりません（会場笑）。わからないですね，ロケーションみないと。軽々しく，これでべらべらしゃべる人のことは信用しないほうがいいと思いますよ。いまの質問の内容で。

（永田）

まあ商業施設じゃないほうがよいかもしれないですが。

（岡崎）

あの，要は廃校利用ってことですよね。廃校利用ってことは，少なくとも「廃校」っていうのをやめたほうがよいと思いますね。地域から嫌われます。廃校っていっちゃダメです。財産です。地域のアイデンティティですから，学校というのは。だからまず廃校というのをやめることです。そうしないと，まず地域から肯定的にとらえることができません。僕にも来ますよ。たくさん学校の跡地利用っていうの。だからまず廃校っていうのをやめろと。まず廃校っていうのを禁止します。その地域の人たち，自分たちの地域の学校のこと，廃校と呼ばれるのですよ。これほど悲しいことってないですよ。だから，皆さんたちのアイデンティティを「これからの社会にマッチした使い方をします」っていってあげたらいいのです。で，やはり教育施設として存在していたわけだから，「教育」というアプローチでなんか考えたほうがいいかもしれないですね。

教育というと，なんとなく銭儲けしちゃダメというようなところがあると思うのですけども，僕はまあちょっとあまり大きい声ではいえないですけども，マイクとおしていっちゃうと大きい声になってしまうのですが（会場笑），N 高校ってご存知ですか，N 高校。株式会社ドワンゴがやっている通信制の高校。N 高校さんと組んで，今度オガールに通信制の高校つくろうと思っています。バレーボール高等学院。バレーボールを通じて人間教育するっていう。通信教育を受けた高校生が，3 年間で全日制の高校を卒業した高校生と同じ資格もらえるのです。全日制の高校は 3 年間で学校に拘束される時間はだいたい 3,600 時間，けど通信制だったら 3 年間でだいたい 300 時間です。そして授業

料もだいたい 3 年間で 24 万円。世帯収入が 900 万円くらいだったら。要は通信制の教育カリキュラムを N 高校から買って，バレーボール高等学院っていうのを，オガールに本拠地を置いて，そしてそのチューターを図書館員にしてもらいます。つまり図書館の司書さんたちが，高校生たちのチューター役になるのです。こうやって教育をちゃんとやんないと，不動産の価値が上がらないって気づいたのです。ですから廃校利用については，教育っていうところに対して投資をどんどんしてゆかないと，その地域の不動産の価値が上がらないと思います。少なくとも学校がなくなったのだから，教育のコンテンツが一つなくなったことになりますよね。そうすると，どんどん宅地化は進むかもしれないけども，不動産の価値は下がってゆきますよ。だから教育のビジネスコンテンツを，少し考えたほうがいいですよ。

旧新宿区立四谷第五小学校ってご存知ですか。歌舞伎町にある。いまなにやっているかって。よしもとですよ，よしもと。あれもわれわれのチームがやったのですけども，よしもとさんを神保町から本社ごと歌舞伎町に移して。よしもとエージェンシーの方と一緒に。なにやったかって。学校のアイデンティティを残そうって。そして上場をやめたのです。よしもとは上場をやめて，そこの学校で，いわゆる教育プログラムみたいな社員育成していますよ。教室が事務所ですよ。面白い事務所ですよ，あれ。そういうふうに学校のアイデンティティを残す。そして新宿を文化芸能のまちに戻そうと。風俗とドラッグのまちから，文化芸能のまちに戻そうって。いわゆる「喜兵衛プロジェクト」っていうのですが，（鈴木）喜兵衛さんという人が歌舞伎町をつくった人です。その喜兵衛さんの想いを現代に取り戻そうっていって，そして学校を拠点にした。中山（弘子）さんですよ，そのときの区長さん，あの女性の区長さんが一生懸命よしもとさんを連れてきて，文化芸能のまちにしようという拠点にしたのです，その廃校を。なので学校利用というのは，その地域のアイデンティティというのが必ず残っているので，そのアイデンティティを変わらず残した教育ビジネスというのを，最初に考えたほうがいいです。そのあとですよ，カフェだとかなんだとかそういう商業的なことは。

（永田）

話がよい具合に発展しました。ありがとうございました。

あと少し，一つは「他の国，中国や韓国でも同じように公共図書館のあり方が検討されています。さまざまな形でボランティアの方たちの協力を得たり，NPO の方たちが中心となるところも出てきています。日本はどのように考えればよいか考えをお聞かせください」。それと，「第三セクターの問題点を解決に導く手立てを教えてください」。それから，「まちづくりの中心としての新たな図書館づくりにおいて，公開性と閉塞性のバランスをどう考えますか」。少し抽象的なので，司会者のほうで翻訳を試みますと，公共図書館のあり方を今後どういった形で展開したらいいかというところ，たとえば，第三セクター，NPO などなどの組織での展開も考えられます。まずはそのあたりでなにかお考えあったらお聞かせ願いたいということかと思います。いかがでしょうか。

（内野）

すいません，ちょっとご質問の趣旨が咀嚼できていないんですけども，NPO を立ち上げて…？

（永田）

公共図書館を公共機関として運営してゆくのが財政的に立ちゆかなくなってきているから，どういうふうにしたらいいんだっていう趣旨かと思います。だから，NPO だとかボランティアだとかそういった人たちにコミットしてほしい，そういう話かと。

（内野）

自分で実践をしていないので，こんなふうにするとできるとかそういった話をするべきでもないし，非常に難しいというところが正直ありますね。

（永田）

一つ私のほうから申し上げますと，例えば行き詰まっている英国の公共図書館は，従来の法的な根拠をもった公共図書館以外の図書館の設置を，認めるようになりました。それを「コミュニティ図書館」と呼び，ボランティアがやったり，あるいは企業が運営したりすることも可能にし始めています。日本では，状況は違いますが，指定管理者というケースがたくさん出ていますね。まあそういうことについてなにかお考えがありますか。

（内野）

アメリカのアリゾナ州の図書館を僕もみてきたことがあるんですけども，まあ全米的にも永田先生がいまおっしゃったボランティアに依存した動きがあります。ちょっとずれますけども，実はある方から声をかけられたことがあり，「NPO を立ち上げてその代表になって，図書館を受託できるというような形で，動いていただくことはできませんか」という話があったことがあります。そのときに思ったのが，とても曖昧な表現になるんですけども，図書館をやってみたいと思っている市民の方ってたくさんいらっしゃる。逆になんであんな方が図書館にいるんだろう，本の匂いはしないし，接遇ダメだし，全然ダメ。自分ならこんな図書館できるのになあって思ってらっしゃる方，そんな方々が当然いらっしゃる。そういう方々と一緒に，とにかくやってゆくことができればいいかなあと考えたことがあります。あくまでこれはやったわけではないですよ，まあちょっと調べたってだけの話なんですけども。

（永田）

一つは，組織をどう展開するかという話ですが，もう一つは人の問題です。図書館がサステナブルでありうるためには，人の問題としては，そこによい人が働いていなきゃいけない。それは内野先生がおっしゃったとおりです。例えば英国のケースでいうと，図書館員として地域を支える人たちをきちんと確保してゆく，それからボランティアが働いている図書館では，ボランティアの人たちにも，図書館のことを学んでいただいたあとに働いてもらおうというような動きがあります。これが人の問題です。

図書館を運営する組織体をどうするかについては，公共組織以外には，これまで NPO だとか第三セクターだとか，あるいは企業だとか，そういったものが各地あげられてきました。サステナビリティの観点からいって，いくつもの議論があります。例えば，日本の法制による NPO っていうのは，非常に行動の制限があります。サステナビリティ，世の中にとってプラスのことをしようとするんだけども，余剰金は残しちゃいけない。投資ができない。だから大きなことはできないっていうような制限があり，日本の場合は，持続性があるものなのか疑問です。それから第三セクターっていうのは，これは非常に妙なしかけで，官民でやっている第三セクターのことを，質問された方はおっしゃっていると思いますが，どういったらいいんでしょうか，もうほとんど公共的な意味合いの第三セクターであって，オガールの株式会社のような公民連携ではないという感じがします。第三セクターという言葉に関しては，岡崎さんになにか言葉をいただきましょうか。

（岡崎）

第三セクターっていう，会社法上的なその，第一セクター行政でしょ，第二セクター民間で，第三セクター官民が出資したっていう意味の第三セクターなんですけど，会社法上の第三セクターに関する仕組み上の欠点っていうのは，あんまりないと思っています。なにが欠点なのか。日本の第三セクターのなにが欠点なのかっていったら，行政主導の第三セクターはほとんど失敗しています。行政主導の第三セクター。つまり行政側が第三セクターをつくるという発議のもとにつくられた第三セクターは，ほとんどうまくいっていない。なぜか。やりたい人が社長やってないからですよ。単純。お前社長やれと。なになに部長の次退職したらそこの社長やれと。給料月 30 万円だから。やりたくない人が社長やっているから。考えられないですよ，民間じゃ。やりたくない人間が社長やるって。そりゃダメになるのは当たり前ですよ。

オガールは私，第三セクターの二つ社長やっていますよ。民間主導の第三セクターです。私，紫波町に税金払っています。土地代払っています。国に配当金出しています。だから，民間主導の第三セクターっていうところに，つまり民間がやりたいっていうところに，行政的な支援で資本金を拠出するって。あとは配当金で回収する。エリアの価値を高めて税収で回収するっていう発想のもとに，第三セクターってあったほうがいいなって僕は思います。

それとあと，さっきの質問の，もう時間があまりないと思うので，まちづくりの公開性と閉塞性っていう話があったのですけども，市民の財産を使うまちづくりっていうことに対しては，原則市民に公開しないといけないですよ。市民の大事な財産を使うわけだから。オガールがまさにそうですよね。10 年間塩漬けだった土地とはいえ，紫波町民の立派な財産ですよ。それを使うってなったときに，公開して，なにをするのかっていうことは逐一やっぱり議会に

かけるし，住民に説明もするし。町長は，ああやって喧嘩っ早かった町長ですけど，合計 100 回以上の住民説明会やっています。なまった言葉で，「俺の役割はぶっかれテープレコーダーだ」っていっていましたね。「ぶっかれ」って，壊れたテープレコーダー。テープレコーダーって言葉すら明治の言葉に聞こえますけど（会場笑）。まあそういった，「ぶっかれテープレコーダー」，つまりなにをいわれようが同じこといって，同じこと理解してもらうんだって。まあ執念ですよ，あの人の，執念。だからそういったことを公開性で，自分の想いをずっと壊れたテープレコーダーのように，何度も何度もしゃべるっていう覚悟のあらわれですよね。

それと閉塞性っていう，まあビジネスはあんまり，俺はこれやるんだっていっちゃうとやらない奴が出てくるんですね。だからビジネス的な要素については，黙ってやってしまうっていうのが大事で。

あとは意見をもらうっていうじゃないですか。市民からの意見をもらうって。これ聞こえはいいですけどれも，オガールでやったときには，市民参加にはある一定のルールを定めました。それはなにかっていったら，対案なき批判はダメっていいました。対案なき批判。これ結構大事ですよ。対案もつってすごく大事。だってその人の意見をもつってことだから。こっちは提案しているのだから，だったらこっちのほうがいいのではないかと。そういう議論になってゆくと，非常によいものができあがってきます。頭ごなしにそんなのダメだっていわれたら，終わりですよ，それで。だから対案なき批判はダメだってことです。

で，まちづくりってなにかって，さっきも話があったんですけど，ここ日比谷公園ですよね。『日比谷公園：一〇〇年の矜持に学ぶ』って本読んだことあります？当然ここ日比谷公園の図書館だから，この本は絶対置いていると思いますが，名著ですよ。これ誰つくったと思います？この公園。民間人ですよ。税金ゼロですよ，この公園。明治のときの人たちは金がなかった。金がなかったけども，セントラルパークがほしいって民間人がつくった。それを当時の行政職員がサポートしたのです。金じゃない部分で。規制と制度の緩和で。そしてなにができていったか。なぜ松本楼ができて，なぜ音楽堂ができて。これ学べば，これからの公共事業のあり方ってこうだよなって。別にアメリカに渡る必要ないですよ。この本 1 冊読めば。本当の公民連携ってわかりますよ。『日比谷公園：一〇〇年の矜持に学ぶ』。ぜひ読んでもらいたい。それを制度化したのが去年，都市公園法という法律が改正されました。100 年前の日本人の知恵に，いまの霞ヶ関の官僚が学んだのですよ。立派ですよ。この公園の成り立ちは。なぜ松本楼ができて，なぜ日比谷公会堂ができて。できた当時は，熱中症になる公園っていわれたのですよ。ここにいたら熱中症になるって。皆さん方のまちにもあるでしょ。ミミズが干からびる公園。居場所がなくて。この公園は民間主導で開発されたからこそ，そういったものができているのです。非常に優れたスキームになっているので，これを勉強していただくと，これからの図書館ってどうあるべきだってヒントにつながると思いますので，ぜひ読んでもらいたいと思います。

（永田）

ありがとうございました。われわれは適切な場所でシンポジウムをやっていることになります（会場笑）。

最後に「これからの図書館員のあり方について，コミュニケーターになるべきか，専門家になるべきか，営業マンになるべきか，あるいはそのすべてになるべきか」という趣旨の質問かと思いますが，この質問について，お二方にご回答いただきたいと思います。

（内野）

以前，滋賀県の衆議院議員をお務めだった，また大蔵大臣になった武村正義さんという方，みなさんご存知だと思います。田井郁久雄さんが書かれた『前川恒雄と滋賀県立図書館の時代』という本がありましたよね。このなかで武村正義さんのいった言葉として，以下の言葉が掲載されていますが，「自分が知事だった時代にいろいろな事をしてきたが，事業に比べて効果が一番大きかったのは図書館だった」と前川さんにいっていた。とても印象的な言葉で，僕も企画や広報や人事を経て，図書館に行って思っていました。なんで図書館はアピールしないんだろうか。なんで届けないんだろうか。先ほど学校教育課長だった話をしました。そのポジションにいれば，できる仕事はあるんです。そのポジションでなければ，できない仕事があるんです。ということは，もっと図書館員は館長をはじめ，図書館の

ポテンシャルを，やはり為政者，首長に伝える術，ということはコーディネーターでもあり，営業マンでもあり，あらゆる立ち回りをしてゆく必要があると僕は思います。ということは，出ていかなければならない。まずは図書館から出ていかなければならないと思っています。

一昨日鹿嶋市の自治体広報が届きました。ある議員さんが，鹿嶋市の図書館の質問をされたやりとりが掲載されていました。「鹿嶋は県内で下から四番目の資料費だということを知っていますか」というような質問があったんですね。教育部長がそれに対して，「少しずつこれから増額してゆけるよう努めたいと思います」と答弁をしたということが，議会広報に掲載されていました。要は言質をとるということですね。ちゃんと活字に残りました。もちろん議会答弁というのは，すべて言質が残ります。ということはこういう形で，少しずつやってゆけば，僕は図書館というのはそんなに軽んじられるものではないと思います。もちろん図書館がすべてだとは思いません。ただ図書館が明らかに軽んじられている。今回のサステナビリティへの寄与という意味では，十分にまちに寄与できる公共サービスであると，僕は思っています。結局はなかなか伝え方が，思うようにいっていなかったのではないかと思いますね。

この議員さんがなぜ図書館の資料費のことを質問したかというと，1 年ほど前，私が鹿嶋で講演をしたときに聞きに来ていたんです。鹿嶋はとんでもないことになっちゃっているよという話をしたときに，その議員さんが「知らなくてごめんなさい」っていったんですよ。それもあって，じゃあ少し議会で考えてみると動いてくれたというのがあります。最近図書館が非常に批判的にいわれることが多いですけども，そんなことはない。図書館だけではなくて，地域やもっと広いエリアで読書を楽しむ方々のためにも，やれること，やらなければならないこともいくらでもあるので，そのためにはコーディネーターにもならなければならないし，専門家にもならなければならないし，営業マンにもならなければならないということを，僕は申し上げたいと思います。

（岡崎）

図書館の職務については，正直どんなお仕事をやられているか，詳しいわけではないのですけども，図書館に付随した都市型のサービス業っていうのは，いろんなコンテンツをさせてもらっています。そこには必ずマネージャーと呼ばれる人がいて，社員がいて，彼らにある程度の権限を与えて，彼らの好きなようにやらせるっていうのが，私のやり方なのです。なんで私もこうやって日比谷公園に来て，平日の昼下がり，おしゃべりをしていられるのも，働いてくれる人たちがいるからなのです。ただ一つだけアドバイスすると，どうやって僕がその人たちを配置して選んでいるかっていったら，私はいつもバレーボールのコーチ，監督もしているんですよ。日本スポーツ協会の公認の上級コーチなのです。つまり全日本のコーチもできる資格をもっているのです。そのコーチ経験で学んだことを，組織経営にも活かしているのですが，私がいつもいっているのはなにか。最後に勝つのは動機をもっている奴だっていっています。動機です。つまり，やらされるマネージャーなのか，自らやりたいと思うマネージャーなのかで，全然経過が違うのです。同じ蕎麦屋をやらせても，そばを打ちたい奴とそばを打つことをやらされている奴では，どんなに同じやり方したって，出来栄えは全然違います。なので，適材適所という言葉ではなくて，動機をもっているかどうかです。動機っていうのがなにかっていったら，ほかの言葉でいえば目的です。目標じゃないですよ，目的。なんのためになにをやるかっていうことが，しっかりと言葉で説明できる人間をマネージャーにする。図書館でもそうだと思います。本当に，なんのためになにをやるかっていうのを明確にもっている人間に，営業であろうが，司書であろうが。

私はなぜ手塚を紫波町役場に呼んだのか。完全に彼女は動機をもっていたのです。彼女は体が弱いです。いつ死ぬかわからないっていう病気だったのです，浦安にいたとき。そして私が声をかけたとき，最後のチャンスだって。私の夢は一から図書館をつくることだって。最後のチャンスだと思ってここに来ましたって。命がけですよ，命がけ。命がけでつくった図書館がダメになるわけはないのです。これなんか浪花節に聞こえるかもしれないですけど，結果ここですよ。なにやるにしたって魂が宿るか宿らないかは，命がけで動機をもった奴がつくるかつくらないかです。ここものすごく大事です。なにをやるにしても動機をもって，目的をもって，なんのためになにをやるかっていうことを

考えて，それぞれの皆さん方の図書館，もしくは日々のお仕事に反映させていただければ，もう二度と会うことはないのですが，（会場笑）アイツこんなこといっていたなと思っていただければと思います。

（永田）

ありがとうございました。本日は，皆さんからのご質問がたくさんございまして，私のほうで整理のつもりで予定していた論点（図 3）について引き合いにする時間はありませんでしたが，興味深い，質疑のやりとりにおいて大方言及されたように思います。

ちょっと時間が過ぎましたが，本日は大変貴重なお話をいただきました。ここで改めて岡崎さんと内野さんに，そして手話をなさってくださった方，それから後ろでグラレコ（図 4）を描いてくださっている北村さんに，拍手申し上げたいと思います。また，ご参集いただいたみなさん，お越しくださいまして，どうもありがとうございました。

本日の記録については，私どものウェブサイトに掲載するとともに，来年の研究レポートにも掲載するつもりでございます。以上で，シンポジウムを終えさせていただきます。誠にありがとうございました。

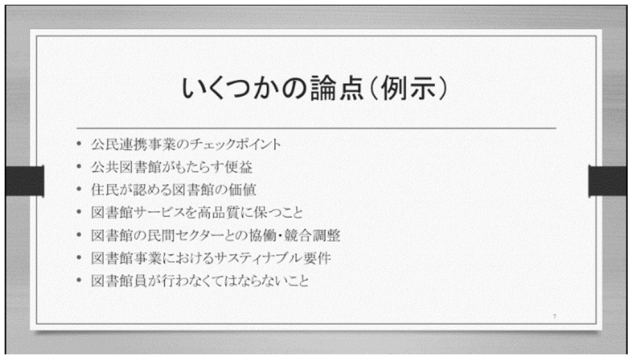


図 3　いくつかの論点

図 4　図書館パートナーズ北村志麻氏による本シンポジウムのグラフィックレコード

第3回ワークショップ「図書館員の未来準備」報告

1. 趣旨

当研究所では，調査・研究の成果を活かした教育研修の役割を認識し，図書館員の皆さまのこれからに向けた事業としてワークショップ「図書館員の未来準備」を企画・開催しています。

主に公共図書館向けの内容としていますが，包括的な内容をもつものもあり，学校・学術図書館の方々の参加もあります。

このワークショップについての情報も少しずつ広まってきており，内容についてより詳しく知りたいとの声もありますので，本号でも，第3回ワークショップ開催報告をまとめました。

図1　グループワークの様子

2. 第3回ワークショップ開催概要

当研究所オフィスのある東京都文京区本郷にて，2019年9月9日～30日の期間に，毎週月曜（月曜祝日の場合は火曜）に開催しました。

前回までと同様に，三つの領域，「図書館情報システム」，「図書館の役割1（図書館と学び）」，「図書館の役割2（図書館とコミュニティ）」を設定のうえ，カリキュラムを構成しました。今回は，特に「図書館情報システム」の充実を図り，進展し続ける情報技術の基礎の学び直しの機会として，オプション科目「図書館サービスのための情報技術」を設けたほか，テーマの更新をし，新たな講師の方々に加わっていただきました。オプション科目については，領域「図書館情報システム」について効果的に学ぶための事前準備として位置づけ，全科目，または領域「図書館情報システム」の受講者のうち，希望者のみ受講可能としました。

3. 第3回ワークショップ参加者

募集の際の定員は10名程度としていますが，第3回は全科目受講14名（領域ごとの受講は平均17名ずつ）の参加がありました。

参加者の所属については，公共図書館や学校図書館に勤務されている方，図書館勤務経験のある大学院生などの参加がありました。また，首都圏だけでなく遠方からの参加が4名ありました。

特に今回は，第1回ワークショップ受講者からの参加が3名あり，これまでのワークショップの満足度の高さや，テーマの更新の効果を読みとることができました。

4. 第3回ワークショップの内容

今回は，前述のオプション科目に加え，領域「図書館の役割2（図書館とコミュニティ）」の科目数の増加に伴い，4日間三領域8科目でカリキュラムを組み立てました。第3回のカリキュラムは表1（p.36）のとおりです。

4.1 第3回ワークショップの様子

ワークショップ当日の様子を，写真とともにご紹介します。

（1）領域「図書館情報システム」

まず，オプション科目「図書館サービスのための情報技術」（図 2）では，一人 1 台 PC を使用し，基本的なパソコン操作方法から始め，段階的に，講義と演習を繰り返しながら，プログラムが動く仕組みまでを実際に体験しました。

図 2　「図書館サービスのための情報技術」の様子

「デジタルアーカイブ」（図 3）では，国文学研究資料館の事業「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」について，アーカイブ事業の進め方や，地域資料の活用事例について説明がありました。講義が中心となりましたが，一人 1 台 PC を使用して，国文学研究資料館のウェブサイトを実際にみて体験しながら，わかりやすく学ぶことができました。このワークショップで展開された内容については，増井氏の研究レポート（p.37）をご参照ください。

図 3　「デジタルアーカイブ」の様子

「図書館サービスの未来準備：VR と AR，そして AI」（図 4）では，AI（人工知能）や MR（複合現実）などの技術やデータサイエンスについての講義，活用事例についての紹介を踏まえ，グループワークでは「世界を変える図書館」についてアイデアを出し合い，グループごとに発表を行いました。

図 4　「図書館サービスの未来準備」の様子

「Web を活用した図書館サービス」（図 5）では，OPAC だけではない図書館の Web サービスを考える機会として，一人 1 台 PC を使用してプログラムを作成しながら実践的に学びました。外部リソースを活用して，書影などを使った本の紹介リストの作成や，複数の検索サイトにつながるページの作成を行いました。

図 5　「Web を活用した図書館サービス」の様子

（2）領域「図書館の役割 1（図書館と学び）」

「図書館と学び 1」（図 6）では，「新しい学びへのチャレンジ」をテーマとして，ファブラボ（アナログからデジタルまでの多様な工作機器を備え，個人が自由に利用できる地域工房としての場，またネットワークで結ばれたその活動）の取り組みで活躍されている講師のもと，ICT 技術を用いてアイデアを形にする次世代の学習について考え

ました。ファブラボや STEM 学習の事例についての講義のあと，ブレストカードやアイデアスケッチ，プログラミング体験など，アイデアを形にするさまざまな手法を体験しました。グループワークでは，「図書館と学び」をテーマに，これからの図書館サービスを考えました。

図６　「図書館と学び１」の様子

「図書館と学び２」（図７）では，これまでの読書指導のあり方を総括し，それから「創造的読書のパターン・ランゲージ『読書の秘訣カード』」を用いたワークショップにより，読んだ本の内容などについてではなく，読書のコツや読書の楽しみ方について話し合うという新しいアプローチを体験することで，これからの読書とその支援について考えました。講師がこれまでに実施した「創造的読書のパターン・ランゲージ」を用いた中学校での授業についての事例紹介は，ワークショップでの実際の体験と結びついてその成果を実感しやすく，また豊富な写真でわかりやすく学ぶことができました。

図７　「図書館と学び２」の様子

⑶ 領域「図書館の役割２（図書館とコミュニティ）」

「図書館と地域コミュニティ１」（図８）では，まずは岩手県紫波町で「まちと人に寄り添う図書館」を展開している講師から，多彩な実践例の紹介があり，それからグループごとにテーマを設定し，それぞれのテーマに沿った図書館サービスを考え，発表しました。

図８　「図書館と地域コミュニティ１」の様子

「図書館と地域コミュニティ２」（図９）では，図書館と地域をむすぶ協議会チーフディレクターとして全国で活躍されている講師から，これまでに関わった幕別町図書館（北海道）をはじめ，ふみの森もてぎ（栃木県）やゆすはら雲の上の図書館（高知県）など豊富な事例紹介があり，最後に「編集ワークショップ」で発想をひろげる手法を体験しました。

図９　「図書館と地域コミュニティ２」の様子

4.2 参加者の評価や意見

科目ごとと，ワークショップ全体について，参加者にアンケートを実施しています。ワークショップ全体に対する満足度と期待度に対する合致度を調査した結果，満足度の平均値は 6.93（8 段階評価），期待度に対する合致度の平均値は 1.97（-3 から+3 の 7 段階評価）であり，前回までに引き続き，よい評価をいただけたと思っています。これ

も，講師の皆さまの充実した内容・方法によるワークショップの賜物であり，厚く御礼申し上げます。

参加者のワークショップでの様子やアンケートから，「さまざまな分野，視点から図書館について考えることができた」，「多くの先進事例から学ぶだけでなく，自分だったらどう取り入れるかを考えることができた」，「学び続けることの大切さを実感した」等の声がありました。今回は首都圏だけでなく遠方からの参加者もあったことなどからも，「普段接することのできない，さまざまな方の意見を伺うことができた」との声もありました。熟練した講師（ファシリテーター）のリードがあってこそですが，参加者同士のやりとりから得られる学びの大きさも，より強く感じられました。また，第 1 回ワークショップ参加者からは，「内容が更新されており，復習だけでなく新しい気づきもあり，定期的に参加したい」との声もありました。

期待と合致しなかった点については，特に領域「図書館情報システム」のうち，プログラムに触れる実習科目については，「自分には難しい」，「すぐに業務に活かせない」といった声もありました。オプション科目については，領域「図書館情報システム」について効果的に学ぶための事前準備として位置づけていましたが，オプション科目の開催当日は，台風 15 号の影響もあり受講できなかった方も多く，オプション科目の効果を十分に発揮することができませんでした。内容についても，次回以降に向けて精査していきます。

また，期待と合致しなかった点で最も多かったのが，第 1 回と同様，「時間が足りない」という意見でした。第 1 回の際と比べて今回は，ワークや作業時間が足りないというよりは，講師からの事例紹介など，講義内容についてもっと伺う時間が欲しかったとの意見が多かったようです。事例紹介の内容については，資料を読むことで済む場合は，それを事前課題として設定し，ワークショップ当日は質疑を行うなど，運営方法を検討していきたいと思います。

日程については，今回は，4 日間開催，曜日固定（毎週月曜または火曜開催）とし，午後からの開催の日を設けるなど，試行錯誤を重ねています。土日祝日明けの開催のためか，遠方からの参加者が増えたことや，参加申込者が過去最多であったことから，一定の成果が得られたと感じています。引き続き，多忙な図書館員の皆さまがより参加しやすい環境を模索していきます。

5. 今後の展開について

本ワークショップは，前号でも紹介しましたが，外部展開を行った事例もありますので，ご要望・ご依頼があれば可能な限りお応えできればと考えています。

2020 年度も，より効果的な企画を目指しながら，第 4 回を行うことを計画しています。（とりまとめ文責：木村　瞳）

表１　日程表

No.	日時	領域	テーマ	概要	講師
1	9/9(月) 10：00～ 12：00	①図書館情報システム	デジタルアーカイブ	地域資料・古典籍のアーカイブ（資料の扱い，書誌，ディジタル化）構築と活用について考えます	増井 ゆう子 氏 （前 国文学研究資料館古典籍共同研究事業センター事務室副室長）
2	9/9(月) 13：00～ 17：10 (休憩時間含む)		図書館サービスのための情報技術	図書館サービスにいま求められる情報技術の基礎を実践的に学びつつ，進展する情報技術活用の可能性をとらえる機会とします	木村　優 氏 （国立情報学研究所）
3	9/17(火) 13：00～ 15：00	②図書館の役割１	図書館と学び１	新しい学びへチャレンジ：ICT 技術を用いて，アイデアを形にする次世代の学習をワークショップ形式で，考察します	渡辺 ゆうか 氏 （国際 STEM 学習協会／ファブラボ鎌倉代表）
4	9/17(火) 15：10～ 17：10		図書館と学び２	「創造的読書のパターン・ランゲージ“読書の秘訣カード”」を用いて，これからの読書とその支援について考えます	庭井 史絵 氏 （青山学院大学准教授）
5	9/24(火) 13：00～ 15：00	③図書館の役割２	図書館と地域コミュニティ１	地域に積極的に出ていき，人々に寄り添いながら，図書館だからこそできることを基本として，これからの図書館サービスを展開します	手塚 美希 氏 （紫波町図書館）
6	9/24(火) 15：10～ 17：10		図書館と地域コミュニティ２	住民をつなぎ，人々の力で愛すべき地域をつくるコミュニティ・イノベーションに着手します	太田 剛 氏 （図書館と地域をむすぶ協議会チーフディレクター）
7	9/30(月) 10：00～ 12：00	①図書館情報システム	図書館サービスの未来準備：VR と AR，そして AI	最近注目を集めている仮想現実(Virtual Reality)，拡張現実(Augmented Reality)，人工知能(Artificial Intelligence) について，図書館サービスへの応用という観点から議論します	宇陀 則彦 氏 （筑波大学准教授）
8	9/30(月) 13：00～ 17：10 (休憩時間含む)		Web を活用した図書館サービス	情報資源の入口としての役割が求められる図書館 Web サイトのデザインを，実践的に修得します	川嶋 斉 氏 （Code4Lib JAPAN／野田市立興風図書館）

注：講師の所属は，ワークショップ開催時（2019 年 9 月 30 日時点）のものである。

日本語の歴史的典籍のアーカイブ構築と活用

Construction of Archives of Pre-Modern Japanese Works and Its Utilization

増井　ゆう子 [1]

Yuko MASUI [1]

1　国文学研究資料館古典籍共同研究事業センター

The Center for Collaborative Research on Pre-Modern Japanese Texts,

National Institute of Japanese Literature

抄録

国文学研究資料館では，2014 年度から「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」を 10 年間の予定で実施し，現在その半ばを迎えている。

本稿では，まず，その概要について説明するとともに，その計画の基盤となっている，当館が継続してきた調査収集事業・古典籍総合目録の作成事業について説明する。また，実際のデジタルアーカイブ事業の内容や進捗状況や，それを活用した新たな事業への展開などを報告する。また，対象となっている日本古典籍の特徴と，それに対応してきた国文学研究資料館での目録作成事業について説明し，今後さらに重視されてゆく古典籍資料の典拠コントロールについても述べたい。

1. はじめに

国文学研究資料館が，2014（平成 26）年度から実施している「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」は，現在 10 年計画の半ばを過ぎ，このプロジェクトにおいて研究活動の基盤となる，「新日本古典籍総合データベース」を 2017 年に公開することができた。約 11 万点の画像作成・収集を終了し，2019 年 11 月現在，約 8 万点の画像を公開している。日々画像および書誌の作成が続けられ，続々と公開を待つ状態である。

以下，この事業を進めている国文学研究資料館について改めて紹介するとともに，計画の概要やその進捗について述べる。また，対象となっている日本語の歴史的典籍について，その特徴とそれに対応してきた国文学研究資料館での目録作成事業について説明し，今後さらに重視されていく古典籍資料の典拠コントロールについても述べたい。

2. 国文学研究資料館とは

人間文化研究機構国文学研究資料館（National Institute of Japanese Literature）（以下，国文研という）は，大学共同利用機関の一つであり，1972（昭和 47）年品川区に創設され，その後，2008（平成 20）年 3 月に現在の立川市に移転した [1)]。

従来の事業は大きく下記の 3 点に集約されてきた。

（1）国内外の日本文学および周辺分野の資料の専門的な調査研究と大規模な集積
（2）研究基盤整備のための資料の整理・保存，発信
（3）研究成果・事業の社会への還元

これらに基づき，長く多くの調査・研究を継続するとともに，図書館サービス事業，古典籍関連の目録作成事業，そして展示・講演会・講習会等の催事を行ってきた。現在所蔵する古典籍の点数は，写本・版本約 1 万 8,000 点，マイクロフィルム約 20 万点（4 万 3,000 リール），紙焼写真本約 7 万 5,000 冊である（『国文学研究資料館概要 2019』による）。

3.「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」の概要

それでは，国文研の事業に新たに加わった「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」（Project to Build an International Collaborative Research Network for Pre-modern Japanese Texts）[2]（以下，「歴史的典籍 NW 事業」という）について説明したい。

「歴史的典籍 NW 事業（NIJL-NW project）」は，大規模学術フロンティア促進事業（文部科学省）の一つであり，人文社会科学分野としては初めての取り組みである。同様の事業としては，「大型光学赤外線望遠鏡『すばる』の共同利用研究」（自然科学研究機構国立天文台）や「スーパーカミオカンデによるニュートリノ研究の推進」（東京大学宇宙線研究所），そして「新しいステージに向けた学術情報ネットワーク（SINET）整備」（情報・システム研究機構国立情報学研究所）などが進められている。

3.1 事業の概要

2014 年度から 2023（令和 5）年度までの 10 年間で実施され，国文研を中心に国内外の大学等と連携してあらゆる分野の日本語の歴史的典籍の画像 30 万点を収集・公開するというものである。国文研はこれまで行ってきた日本文学およびその周辺の分野から，医学・理学・産業等あらゆる分野の古典籍を対象とすることとなった。なお，計画当初より国内の 20 の大学を拠点[3]とし，協力して事業を行っている。また，この事業推進のため国文研内に古典籍共同研究事業センターを新たに設置した。

3.2 事業の目的

この事業の目的としては次の 3 点があげられる。

（1）日本語の歴史的典籍データベースの構築

30 万点の歴史的典籍画像データを作成・収集し，それを提供するための新たなデータベースを構築・公開することが一つめの目的である。画像の収集を日々進めるとともに，2017（平成 29）年度から「新日本古典籍総合データベース」として公開を開始している。また，このデータベースは，画像データの利活用を大きく推進するための検索機能等多くの仕組みを備えている。

（2）国際共同研究ネットワークの構築

この計画は国文研単独の事業ではなく，国内 20 の拠点大学や国内外の連携機関とともに推進する事業であることから，それら機関との共同研究体制をもとに国際共同研究ネットワークを構築することが，二つめの目的である。

（3）国際共同研究の推進

（1）で構築したデータベースを利用し，またはその構築のために，（2）で構築したネットワーク等を活用して国際共同研究を具体的に推進することが第三の目的である。これまでの研究活動は日本文学を中心として展開されてきたが，それだけではなく，異分野融合研究，「総合書物学」の創出等，新たな分野が加わった。

3.3 進捗状況

今年度 3 月までに約 11 万点の画像作成・収集を終了し，11 月現在 82 機関[4]121 文庫から収集した約 8 万点の画像を公開している。現在も日々画像および書誌の作成が続けられ，公開を待つ状態である。先述した国内拠点大学のほか，大学図書館，公共図書館，博物館・美術館，研究機関等の古典籍所蔵機関，寺社，個人を含み，もちろん国文研所蔵和古書の画像も含まれる。現在計画の 6 年目，折り返し点を迎えている。

4. 国文学研究資料館と歴史的典籍 NW 事業について

それでは，国文研がなぜこの事業を始めることになったのか。創設以来 40 年以上にわたって持続してきた事業とその成果が，今回の歴史的典籍 NW 事業の基盤となった。長年にわたる調査研究・マイクロ収集・書誌作成のノウハウと，その成果として蓄積してきた古典籍の書誌データベースがそれである。

4.1 調査収集事業

国内外の古典籍所蔵機関での書誌調査のあと，撮影許可を得られた資料について，マイクロフィルム（近年ではデジタル撮影も含む）により全冊の画像を収集してきた。また，それらを閲覧・複写サービスに供するため書誌を作成し，データベースの公開を長年継続してきた。この書誌は後述する古典籍の特質に配慮した，国文研独自の工夫がされたものである。なお，調査結果については，別に古典資料調査データベース[5]として公開している。

4.2 古典籍総合目録作成事業

当初より作成してきたマイクロ書誌のほか，国文研所蔵和古書の書誌データも加えてデータベース公開を行ってきたが，さらに昭和 55（1980）年に開始された日本古典籍総合目録作成事業による書誌データも合わせて公開している。

この事業は，日本古典籍を対象とした総合所在目録としてもっとも基本的なものである『国書総目録』（全 8 巻著者別索引 1 巻，森末義彰・市古貞次・堤精二編，岩波書店，昭和 38～51（1964～1976）年刊，平成 1～3 年補訂版刊）（以下『国書』という）を継承し，その増補版を作成する目的で始まり，『国書』刊行後に公刊された古典籍所蔵機関の所蔵目録から，個々の掲載書目を書誌データとして採録するものである。平成 2（1990）年『古典籍総合目録』（全 3 巻，国文学研究資料館編，岩波書店刊）刊行後はデータベースでの公開を行っている。

このようにして作成されてきた，マイクロ・デジタル，和古書，古典籍総合目録の 3 種の書誌データが一つの古典籍総合目録データベースとして構築され，現在も新たなデータを加えつつ発展している。その概要は図 1 のとおりである。データ件数は，書誌データの合計が約 63 万点，また，後述する著作・著者の典拠ファイルを合わせると 120 万点にもおよぶものとなっている。なお，歴史的典籍 NW 事業により作成した書誌データについてもここに格納される。

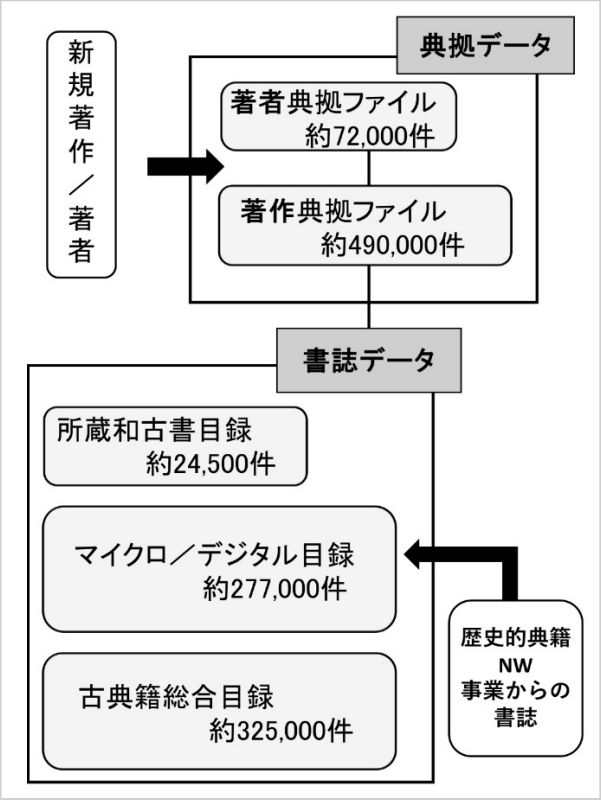


図 1　古典籍総合目録データベースの概要

5. デジタルアーカイブ事業の進め方

このような基盤をもつ国文研での，歴史的典籍 NW 事業は実際にどのように進められているのか，特にデジタルアーカイブ事業について，画像収集と書誌の作成に分けて説明する。

5.1 画像収集

画像収集については，各々の所蔵機関の状況やこれまでの国文研との関係により複数の方法がとられている。基本的には，新規撮影画像（カラー）を収集することとしているが，方法は業者委託撮影（デジタルカメラ，スキャナ）のほか，オーバーヘッド型ブックスキャナを用いての各所蔵機関あるいは国文研においての画像の内製を含んでい

る。また，すでにマイクロフィルムによる収集を行ってきた機関については，新たに許諾のとれたところから収集マイクロフィルムからデジタル変換画像（モノクロ）を作成している。

一方，既に各所蔵機関で，撮影，公開されている画像の提供を受ける場合もある。

結果としてカラーとモノクロが混在し，撮影仕様の不統一も生じている。これについては，10 年間で 30 万点を収集・公開する計画のため，効率のよい収集を行うこと，マイクロ資料がある場合，新たに撮影は行わないとの方針があり，今後もこのまま進める予定である。なお，一部の機関についてはそこで既に公開されている画像へリンクする方式をとっている。

5.2 書誌データ収集・作成

画像を公開する際には書誌にリンクする形式とするが，その書誌データの収集・作成についても，基本の方針として，既存の書誌データがあれば可能な限り活用することとしている。（1）NACSIS-CAT に登録済みの書誌，（2）各大学・機関独自に構築するデータベースに搭載済みの書誌，（3）国文研の日本古典籍総合目録データベース等に登録されている書誌，（4）既存の冊子体目録などを利用・調整して登録する。既存の書誌がない場合には国文研で新たに作成を行っている。

データ作成・入力に際しては，国文研で内容を吟味しつつ，十分に形式を整えるなど調整を行うとはいえ，このようにさまざまな基準で作成された書誌が混在することとなる。ここで重要なのが，著作典拠コントロールである。後述するように，古典籍の目録，特に総合目録においては，著作・著者のコントロールは必須であると考え，国文研のデータベースでは，書誌データは必ず著作データとリンクさせている。

6.「新日本古典籍総合データベース」の新たな取り組みと画像の活用

このように収集した画像と書誌をリンクさせ，新日本古典籍総合データベースから公開している。平成 29 年 4 月に試験公開，10 月より正式公開を開始した。このデータベースは，従来の書誌を効率的に検索することにより，画像を含む個々の資料に関わる情報を提供してきた「日本古典籍総合目録データベース」の方針から，画像自体の利活用を促進する新たな検索の仕組みをはじめとする新機能を備えることとなった。

6.1 多彩な検索

新データベースのトップページ[6]（図 2）には，「書誌から探す」のほか「画像タグから探す」「全文から探す」が設けられた。画像タグについては，例えば「戌」「源氏物語」「卵」といったタグからの検索が可能である。これまでに付与されたすべてのタグを参照することもできる。「全文から探す」では，まだ数は少ないが本文テキストからの検索を用意している。また，「おすすめキーワード」「ピックアップコンテンツ」など，よく利用され注目度の高い資料の紹介を行うなど，画像の利用を主たる目的とする利用者にとっても，多彩な検索が用意され使いやすいものとなっている。

図 2　「新日本古典籍総合データベース」トップページ

6.2 国際的識別子 DOI（Digital Object Identifier）の採用

電子データに付与される国際的な識別子である DOI（Digital Object Identifier）を採用した。この DOI を入力することで画像の所在情報（URI）に変換され，直接画像にリンクすることとなる。データベースの URL が変更されても，DOI はその影響を受けず，永続的なアクセスが保証され，心配されるリンク切れを防ぐことが可能となる

のである。

6.3 IIIF（International Image Interoperability Framework）への対応

デジタルアーカイブの新規格 IIIF に対応したことにより, 異なるデジタルアーカイブとの間で画像共有が可能となり，すでに他の機関から公開されている IIIF 対応画像との比較を同じ画面で行えることとなった。

なお, センターホームページからダウンロードできる概要説明のパンフレットのほか, 実際の検索についてさらに詳細に解説した基本マニュアル「新日本古典籍総合データベースの使い方」も公開されている [7]。

6.4 他機関との連携

利用者のさらなる便宜をはかるため, 国立情報学研究所（National Institute of Informatics : NII）の「CiNii Books」との連携や，ネットアドバンスのジャパンナレッジ（JapanKnowledge）（契約済ユーザ向けの機能）との連携も開始されている。

また, 画像利用促進のために, 2015（平成 27）年 11 月，NII との協働により，国文研所蔵の日本古典籍 350 点の全冊画像データ等を，NII の「情報学研究データリポジトリ」（Informatics Research Data Repository : IDR）より，オープンデータとして公開，そして 2016（平成 28）年 11 月より，NII との連携のもと，情報・システム研究機構に新設されたデータサイエンス共同利用基盤施設人文学オープンデータ共同利用センター（Center for Open Data in the Humanities : CODH）と新たに連携し，CODH より下記のデータセットを公開中である [8]。

（1）日本古典籍データセット

『源氏物語』『徒然草』『伊勢物語』などのよく知られた作品を中心に公開。3,126 点，609,631 コマ（2019 年 1 月現在）。

（2）日本古典籍くずし字データセット

日本古典籍データセットから公開している国文研および関係機関所蔵の古典籍から切り取った，くずし字 4,328 文字種の字形データ 1,086,326 文字を公開（2019 年 11 月現在）。

（3）江戸料理レシピデータセット

日本古典籍データセットに含まれる江戸の料理本を, 現代レシピに変換して提供。

6.5 画像の活用

これまで作成・公開してきた画像の活用について簡単に紹介したい。本来の目的である，「歴史的典籍 NW 事業」に関連して進められる共同研究等への活用はもちろん, 国文研内でも, 出版物への当館所蔵資料の画像の迅速な提供など，十分に活用されている。

また，既に国文研データベースで公開している画像を，拠点大学・専門図書館等その所蔵機関が，自館のホームページから公開している場合も多い。規模の大きなものとしては，拠点である京都大学の富士川文庫の電子化事業 [10] において, 当該事業による画像もその一部として含まれることとなった。

また, 江戸料理に関わる取り組みにおける画像の活用ついては,「歴史的典籍 NW 事業と江戸料理」として，企業との連携による画像の収集その後の協力について詳細にまとめたものがある [10]。

7. 日本語の歴史的典籍の特徴について

最後に，これら事業の対象となっている「日本語の歴史的典籍」とはどのような資料なのか改めて説明し，国文研のその書誌作成に関わるこれまでの対応についてまとめたい。

日本古典籍, 和古書とも呼ばれ,『日本目録規則 1987 年版改訂 3 版』（以下「NCR1987 改訂 3 版」という）においては,「和古書」について用語解説に次のように定義される。「日本人の編著書で，かつ日本文で書かれ，日本で書写・出版された和書のうち，主として江戸時代まで（1868 年以前）に書写・刊行された図書をいう。（以下略）」。また，国文研でも，同様に国初から慶応 4（1868）年までに，日本人がその成立に寄与（著・編・撰・訳等）した著作で，典籍（写本・版本の冊子・巻子本・畳物等）の形態，

あるいはそれに準じたまとまりを有する資料としており，これは『国書』の収録範囲ともほぼ合致するものである。この計画では，原則として，漢籍および，明治期以降の活版・複製本，文書類は含まない。

なお，国文研では，和古書についての知識を一般に向けてより広めるため，古典籍に親しむこと等を目的とする催しを行っている[11)]。

7.1 書誌作成時の対応

古典籍は現代の一般的な図書とは異なる特徴により，書誌作成には困難な点が多い。資料の保管・保存の問題にもつながる，取り扱いの困難な資料である。また，その多くがくずし字により記載され，さらに記載される内容も不安定であることから，まず，どこからどのようにデータを採録するべきかなど，書誌作成者を悩ますところである。

国文研では，これらの特徴に対応しながら，よりよい書誌作成を目指してきた。

7.1.1 書誌データの作成単位

（1）個別資料ごと

写本と版本があるが，諸本に占める写本の率が高い。写本は同じ内容の資料であっても同じものは存在しない。版本の場合もたとえ同じ版・刷りのものであっても，長く伝来する間に装丁や冊数，大きさ等さまざまな改変が行われ，書き入れや蔵書印が加えられる可能性がある。もともと別の資料として成立した複数資料を合綴することもあり，写本と版本の合綴も存在する。そのため，手元の資料のみからでは，他の同内容と考えられる資料との同定識別の判断が困難なのである。また，同版である各伝本にも相違がある可能性がある。同一の版木を用いても，刷り毎に部分的な省略が行われる場合（図 4『優曇華物語」』参照）や，入れ木による修訂が行われる場合があり，料紙が異なることもある。従って，版の特定が困難である上に，刷りによる差異を考慮する必要がある。

写本・版本とも，これらの異なりが本文・内容におよぶこともある。

このように同版ごとに書誌記述を共有できる現代の資料とは異なることから，個別資料（個々の，書誌的に他と区別されるひとまとまりの資料）ごとに書誌データを作成している。NCR1987 改訂 3 版でも，2.0.2.1C に「和古書，漢籍については，個別資料ごとに別の記述を作成する。」との条項が設けられ，同様の扱いとなっている。

（2）著作単位

資料は，資料としての成立に関わる面と著作を具現化している面とを併せもち，その資料としての実態を，資料上に出現する著作に対応する単位ごとにとらえ，書誌データを作成している。

多くの資料は全体が一著作に対応する単位で成立しており，その場合は冊数に関わらず 1 件のデータを作成する。一方，一つの資料のなかに複数の著作に対応する部分がある場合は，全体に対応するデータに加え，その部分ごとのデータを作成する。さらに書誌に現れる叢書，合刻などの著作間の関係を書誌の構造としてとらえ，その種別を表示して，叢書とその細目，合写・合刻・合綴を階層構造として表現している。これにより，資料としての実態を示し，資料を成立の点からも明確に記すことが可能となった。

7.1.2 著作・著者の典拠コントロール

古典籍に現れる書名や著者名の記述は，そのままでは作品の判断には不十分な場合も少なくない。資料にはなにも記されていないこともある。

（1）著作典拠コントロール

そのため，国文研では，すべての書誌データについて，書名・内容等を判断し，該当する著作データに確実にリンクさせ，他の諸本との集中を図っている。

同じ内容をもつ資料であっても，その資料や版により異なる書名をもつ場合や，一つの資料の中に複数の異なる書名が存在する場合もある。これは，著作成立のあとに多くの写本が作成されたり，版本の場合も版元の変更や版が重ねられたりすること等がその原因となっている。一方，同じ書名をもちながら内容はまったく異なる資料（同名異書）も多く，例えば当館の古典籍総合目録には，『貝つくし』という作品が二つ存在するが，内容は異なり，一方の分類は「本草」，もう一方は「和歌」である。

同名異書を区別し，また，異名同書を含む同じ内容の資料を著作データにより集中させることで，標目としての統一性・一貫性を維持し，異なる書名からの十分な検索を用意することが重要である。そのため著作典拠ファイルによる典拠コントロールを行っている。なお，すべての著作データはその著者の典拠データとリンクし，同一著者の執筆作品を集中させている。

(2) 著者典拠コントロール

その著者についても一人の人物が複数の名称をもち，著作のジャンル・執筆時期により使い分けている場合は多い。山東京伝や曲亭馬琴などがそうである。同名異人も多く，浮世絵師・歌舞伎役者などのように同一の名称を代々伝えていくこともある。それらの名称を人物ごとに整理し，その人物を著者とする著作をとりまとめ，別称からも検索できるようにすることが必須である。

現在，国文研の著作典拠ファイルは，『国書』の収載情報を継承し，『国書』の個々の項目を 1 件の著作とみなして取り込んでいる。全件数は図 1 にあるように約 49 万件，そのうち『国書』からの著作が約 39 万 3,000 件，日々のデータ作成にあたり該当する著作がない場合に新たに作成したデータが約 9 万 7,000 件である。また，著者典拠ファイルの全体の件数は約 7 万 2,000 件，『国書総目録著者別索引』からの約 5 万 8,000 件に新規に作成した約 1 万 4,000 件を加えたものである。

この典拠コントロールを経ることで，国文研の古典籍総合目録においては，個別資料（item）ごとに作成した個々の書誌データが，著作典拠コントロールの結果，その属している著作（work）のもとに集められていることとなり，マイクロ／デジタル，和古書，古典籍の書誌に歴史的典籍 NW 事業からの書誌を加えた，各書誌データは，著作・著者の典拠ファイルを共有して相互に結びついている形となっている。

8. 書誌作成業務への画像の効用

画像の収集・公開は研究の発展が主たる目的ではあるが，それだけではなく書誌作成事業にも大きな効用がある。

日本語の歴史的典籍の特徴について述べてきたが，書誌情報だけではその実際の資料について，どのような特徴をもつか十分に把握できず，その詳細を判断することもまた困難な場合が多い。画像を公開することの意義はここにある。

特定の著作や他の書誌と同じ内容のものと考えてよいのか，著作の同一性の判断に画像を参照できることが決定的な決め手になることはいうまでもない。

一方，内容により一つの著作のもとに集められた書誌であっても，個々の資料には，本文の内容のほかにも重要な情報がその個性として存在している。どのような文字で書かれているか，文字の配置や書の技法はどうか，挿絵はどのように入っているか，挿絵に描かれている着物の模様や色はどのようなものか，建物の構造はどのようなものか等々，画像でしかわからない多数の情報である。また，版の異なりや本文の系統などの判断にも画像は大いに役立つのである。

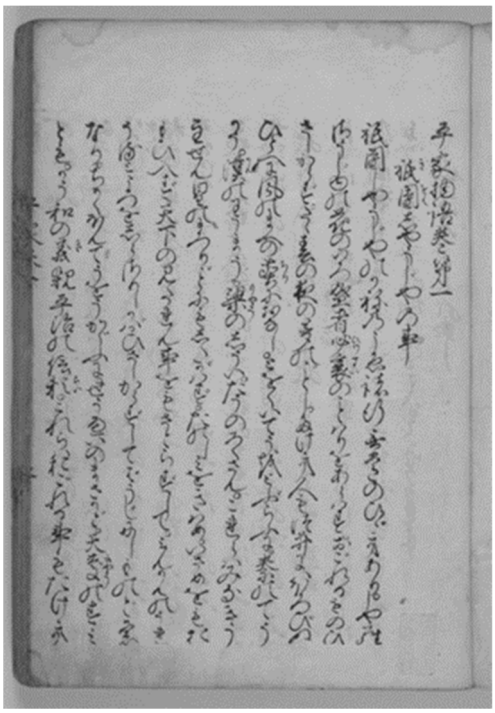
例えば，図 3 の 2 点の『平家物語』（WID 6939）[12]は，ともに国文研所蔵である。図 3（A）は寛永 3（1626）年刊，図 3（B）は万治 2（1659）年刊である。同じ作品ではあるが，版面には匡郭の有無，仮名と漢字の比率の違いといった異なりがある。図 4 は近世の読本『優曇華物語』（WID 104256）[12]で，これも国文研所蔵である。図 4（A）は文化元（1804）年刊，図 4（B）は嘉永元（1848）年刊で図 4（A）と同じ版木を用いての後印本である。図 4(A)には薄墨の刷りを重ねて，風に雪が吹雪く様子が施されているが，図 4（B）では省略されている。この違いはその重要性に注目しない限り，書誌データ上には現れにくいものである。

これらのほかに，画像の収集・蓄積が進むにつれ，これまで確認することが困難であった，異版の存在などが実際に確認できることとなった。

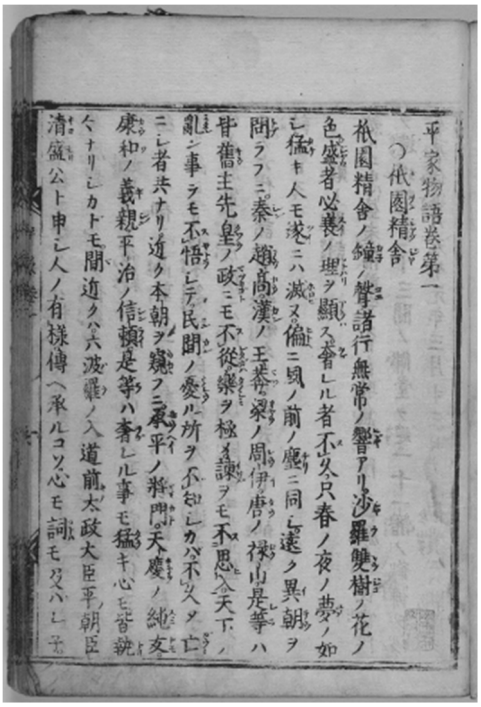
近世の滑稽本『北里十二時』（WID 492831）[12]について，『日本古典文学大辞典』（全 6 巻，日本古典文学大辞典編集委員会，岩波書店，1983-1985）では項目末の【諸本】欄に「全国の狂歌師からの狂歌を付した，半紙本型の入選者向けの異版がある。」とあるが，本来の 1 冊本の丁数を大きく上回る 3 冊本となっていること，入選作を途中に挟

み込むような形になっていることなど，実際に画像を確認するまでは実態がつかめないことであった。また，目録上は同じタイトル，同じ刊年をもちながら，まったく異なる挿絵をもつ諸本が存在する例もみつかっている。

典拠ファイルと画像が連携することで，より確実により容易に，書誌作成を正確に進めることができ，著作の同一性と個々の資料の個性を認識できるようになってきている。今後，目録規則に取り込まれ，典拠コントロールは重要なものとなってきた。より多くの画像の収集・公開することによりこれに役立つと考えている。

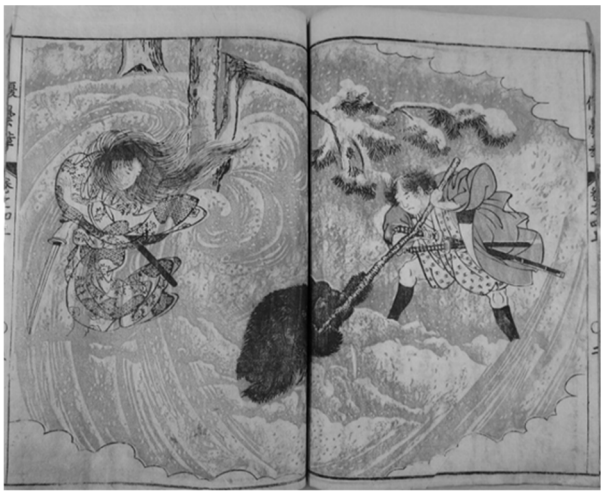


（A）寛永 3 年刊

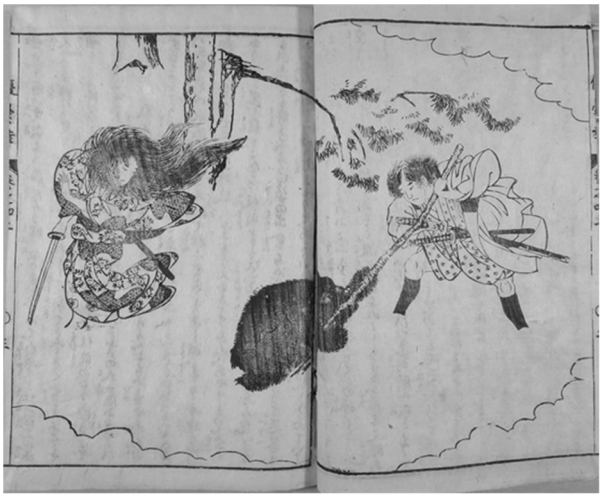


（B）万治 2 年刊

図 3 『平家物語』2 種（国文学研究資料館蔵）



（A）文化元年刊



（B）嘉永元年刊

図 4『優曇華物語』2 種（国文学研究資料館蔵）

【注・参考文献】

1) 国文学研究資料館ホームページは下記のとおり。
https://www.nijl.ac.jp/

2) 「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」のホームページは下記のとおり。
https://www.nijl.ac.jp/pages/cijproject/

3) 拠点 20 大学は次のとおり。
国立大学：北海道大学，東北大学，筑波大学，お茶の水女子大学，東京大学，名古屋大学，京都大学，大阪大学，奈良女子大学，神戸大学，広島大学，九州大学
私立大学：慶應義塾大学，國學院大學，立教大学，早稲田大学，大谷大学，同志社大学，立命館大学，関西大学

4) 全 82 機関については，下記にある「デジタル公開所蔵者一覧」を参照のこと。
https://kotenseki.nijl.ac.jp/page/usage.html

5) 古典資料調査データベース・日本古典籍総合目録データベース等の国文研の日本古典籍に関わるデータベースについては，下記電子資料館からも利用が可能である。
https://www.nijl.ac.jp/search-find/#database

6) 「新日本古典籍総合データベース」は下記のとおり。
https://kotenseki.nijl.ac.jp/

7) 「新日本古典籍総合データベース」（パンフレット）は下記のとおり。
https://www.nijl.ac.jp/pages/cijproject/images/kotensekiDB-pamphlet.pdf
「新日本古典籍総合データベース」（基本マニュアル）は下記のとおり。
https://kotenseki.nijl.ac.jp/page/manual_20171027.pdf

8) 人文学オープンデータ共同利用センター（Center for OpenData in the Humanities : CODH）のホームページは下記のとおり。なお，CODH ホームページからの閲覧・利用も可能である。
https://www.nijl.ac.jp/pages/cijproject/data_set_list.html#section_004

9) 国文研では，毎年「和書のさまざま」展を開催し，日本語の歴史的典籍の，現代の書物とは異なる特徴・形態を一般向けにわかりやすく展示している。また，図録は下記の「学術情報リポジトリ」からダウンロードが可能である。
https://kokubunken.repo.nii.ac.jp/

10) 京都大学の富士川文庫の電子化事業については下記のとおり。
https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/collection/fujikawa

11) 詳細は下記を参照されたい。
松原恵・小宮山史・山本和明．歴史的典籍 NW 事業と江戸料理－企業とのコラボの可能性と課題. 情報の科学と技術. 2018，Vol.68，No.6，p.285-290.

12) WID（著作 ID）は，図 1 の著作典拠ファイルにおいて，個々の著作（work）を識別するために付与される ID。

Author Abstract

The National Institute of Japanese Literature (NIJL) has been implementing "Project to build International Collaborative Research Network for Pre-modern Japanese Texts" since 2014.

First of all, this paper overviews the status of this project and the collection building of pre-modern Japanese Books in the Institute as well. And the features of bibliographic data which compose the “Union catalogue of Early Japanese Books” are examined. Then, the structure of the actual digital archive database, and its new development of the project are described. Additionally, the characteristics of the Japanese pre-modern books and the cataloging procedures at NIJL featured. At the end, a discussion about authority control of classical materials is added.

中野区教育委員会「山崎家資料図録（1989）」

図書館を”ゆめ”いっぱいに

IIIF に対応したデジタルアーカイブのシステムを構築し、地域資源の利活用に貢献しています。

株式会社ヴィアックス
図書館事業本部
〒113-0033 東京都文京区本郷 5-23-12　TEL. 03-3815-3788　FAX. 03-3815-3135
URL.http://www.viax.co.jp

デジタル世界にいまなにが起きているのか

What Is Happening in the Digital World Now?

宇陀　則彦 [1]

Norihiko UDA [1]

1　筑波大学図書館情報メディア系教授

Faculty of Library, Information and Media Science, University of Tsukuba (Professor)

抄録

ヨーロピアナ，米国デジタル公共図書館，ワールドデジタルライブラリ，ジャパンサーチをご存知だろうか。デジタル世界は，コンテンツ構築の時代，コンテンツ共有の時代，コンテンツ集約の時代と着実に発展し，いまや数千万件のコンテンツへのアクセスを可能にする巨大デジタルポータルが出現するに至っている。一方，図書館はどうであろうか。一部の先進的な大学図書館を除き，図書館は，OPAC，データベース，地域資料等，ウェブ初期の頃とほとんど同じサービスを続けているように感じられる。デジタル世界が発展していくなか，図書館だけが取り残されているような危機感を覚えるのである。そこで本稿では，巨大デジタルポータルと最近注目を集めているトリプルアイエフ（IIIF : International Image Interoperability Framework）を簡単に紹介し，その意味するところを解説する。そのうえで，デジタル世界と利用者の間をつなぐ新しい図書館サービスを提案する。

1. はじめに

ウェブ登場から四半世紀が過ぎた。この間，図書館の世界では，OPAC，メタデータ，電子図書館，デジタルアーカイブとデジタル化の波が押し寄せ，デジタル技術は図書館サービスには不可欠のものとなった。しかしながら，図書館におけるデジタルサービスは，あるレベルから一歩も進展していないように感じる。すなわち，館の情報，OPAC，電子化資料の提供から大きな変化はなにも起きておらず，図書館サービスを本質的に変えるには至っていない。一方，デジタル世界では，スマートフォンの普及，SNS の影響増，GAFA の技術的優勢により，人々の行動と意識および社会の仕組みを大きく変えており，最近では人工知能が大きく注目を集めている。このようなデジタル世界の進歩に対して図書館のデジタルサービスは止まったままであり，取り残されているという危機感を感じるのである。

そこで本稿では，ジャパンサーチ（Japan Search）やヨーロピアナ（Europeana）などの巨大デジタルポータルおよびトリプルアイエフ（IIIF : International Image Interoperability Framework）を簡単に紹介し，その意味するところについて解説する。そのうえで，巨大デジタルポータルによって図書館が失ったものについて考察し，IIIF による新しい図書館サービスを提案する。なお，本稿

でいうデジタル世界とは主に図書館，文書館，博物館に関連するものであることをお断りしておく。

2. デジタルコンテンツの動向

2.1 デジタルライブラリとデジタルアーカイブ

本論に進む前に用語について確認しておきたい。デジタルライブラリは図書館を電子化した意味で概ね正しいと思われるが，デジタルアーカイブはアーカイブズを電子化したものであるとはいえない。国際公文書館会議（International Council on Archives：ICA）によれば，アーカイブズは真正性，完全性，出所原則，原秩序保存原則，永久保存などを満たなければならず，電子記録においても厳しい制限がある [1)2)]。しかし，実際にはデジタルアーカイブという言葉は，デジタルファイルを一定以上収集し，なんらかの名称のもとに公開されているサイトであれば，なんでもデジタルアーカイブと呼ぶ状況にある。実は「デジタルアーカイブ」という言葉は和製英語であり，デジタルアーカイブ推進協議会を設立する際に月尾嘉男が提案したといわれている。しかし，月尾の説明を読む限り，本来のアーカイブズを理解していたとは思えない [3)]。このような経緯で誕生したデジタルアーカイブという言葉は本来のアーカイブズとは異なる意味で使われるようになっていった。OCLC の用語集にも”Digital Archive”があるが [4)]，この定義も現状に合っているとはいえない。しかしながら，現実に曖昧に使われている以上，本稿でも曖昧なまま用いる。

筆者の考えでは，デジタルライブラリは「世界に存在する文献に確実に到達するシステム」で，デジタルアーカイブは「『出所原則』『原秩序尊重原則』『原形保存原則』に従った永久保存を前提としたシステム」で，デジタルミュージアムは「資料の持つ意味や魅力を効果的に提示するシステム」というように目的には大きな違いがあると考えている。この考えに立てば，現在デジタルアーカイブと称しているサイトはデジタルミュージアムに近い。

田窪はウェブ登場間もない 1995 年に図書館資料，文書館資料，博物館資料が統合管理された電子メディア空間としてとらえるべきであると書いている [5)]。ようやく時代が追いついたのかもしれない。

2.2 巨大デジタルポータルへ

2.2.1 デジタル世界の変化

デジタル世界はコンテンツ構成の発展順に時間軸を三つに区分できる。最初はコンテンツ構築の時代，2 番目がコンテンツ共有の時代，3 番目がコンテンツ集約の時代である。コンテンツ構築の時代はとにかく資料のデジタル化に費やした時代で，コンテンツ共有の時代は複数機関で横断検索を実現した時代，そして現在，コンテンツ集約の時代は共有したコンテンツをさらに集約して巨大なデジタルポータルを構築している時代である。

コンテンツ構築の時代における代表的なプロジェクトには，技術指向のプロジェクトである Digital Library Initiative（DLI）[6)]，大規模デジタル化資料のはしりである American Memory[7)]，日本版の DLI といえる文部省電子図書館予算 [8)]，日本版 American Memory といえる近代デジタルライブラリ [9)]，公共図書館のデジタル化プロジェクトとしては早い時期に着手したデジタル岡山大百科 [10)] などがある。デジタル世界に大きな衝撃を与えたのが電子ジャーナルの普及で [11)]，その後，機関リポジトリ [12)] が構築され，学術情報基盤は変革の波にさらわれていく。

次のコンテンツ共有の時代は，それぞれの機関で構築したコンテンツを共有し，有効活用することを目指した時代である。図書館の世界では，複数の電子ジャーナルやデータベースを論文単位で横断検索できる Metalib とメタデータから論文本体へ誘導するリンキングシステムが登場し，図書館システムにとって不可欠な存在になった。やがて，セントラルインデックスを搭載したディスカバリサービスに発展し，文献への到達可能性が飛躍的に高まった [13)]。一方，デジタルアーカイブの世界では，文書館や博物館などのデータベースのメタデータを相互にマッピングし，横断検索を実現した nihuINT[14)]のようなシステムが数多く構築された。この時期に図書館，文書館，博物館の相互交流が盛んになり，コンテンツ共有における人的，組織的，技術的な問題が明らかになった。

2010 年代に入る頃には，プログラミングやデータ形式などの共通化が進み，API を介してデータを相互利用する流れがつくられた。また，ディープラーニングの成功により，人工知能がにわかに脚光を浴び，その裏にあるビッグ

データを機械学習によって処理するデータサイエンスが注目を集めるようになった。このような背景から大規模にデータを集約し，そこから API を介してデータをオープンに取り出し，活用しようという考え方が広がっていった。

このような大規模集約サイトの代表的なものとしては，ヨーロピアナ（Europeana）[15]，米国デジタル公共図書館（Digital Public Library of America：DPLA）[16]，ワールドデジタルライブラリ（World Digital Library）[17]，ジャパンサーチ(Japan Search)[18]がある。ヨーロピアナは EU の執行機関である欧州委員会（European Commission，以下 EC）が 2005 年に打ち出した 5 か年の情報政策プログラム「i2010 - 成長と雇用のための欧州情報社会」のなかで計画されたものであり，ヨーロピアナ財団が運営している [19][20]。米国デジタル公共図書館はハーバード大学図書館長であったロバート・ダーントン（Robert Darnton）教授の呼びかけで始まり，米国の図書館や文化施設のもつコンテンツをすべての人に提供するデジタルライブラリという理念の下に 2013 年に創設された [21][22]。ワールドデジタルライブラリはユネスコ米国国内委員会でジェームズ・ビリントン（James Billington）館長が打ち出した構想で，American Memory のように貴重書や手稿など一つしかない歴史的文化遺産を米国議会図書館が中心に運営している [23]。ジャパンサーチは日本が保有する書籍，文化財，メディア芸術等のさまざまなコンテンツをまとめて検索できる「国の分野横断統合ポータル」である。本稿では，機能的に最も先進的なヨーロピアナと日本のジャパンサーチを中心に説明する。

2.2.2 ヨーロピアナ

ヨーロピアナのメタデータはアグリゲータモデルで収集されている。アグリゲータとは複数のデータ提供機関からメタデータを収集して，ヨーロピアナにデータを提供する組織のことである。ヨーロピアナにデータを提供したい機関は原則としていずれかのアグリゲータのパートナーになる。ヨーロピアナは基本的に個別機関からではなくアグリゲータからメタデータを収集する。アグリゲータは収集データを増やそうとするため，アグリゲータが成長するにつれてヨーロピアナのデータは多様で膨大なものになる [24]。

ヨーロピアナに提供されたメタデータには以下のようなものがある。ドイツデジタル図書館（Deutsche Digitale Bibliothek：DDB）[25]は，ドイツの文化・学術機関が発信するデジタル情報を連続的かつ相互にリンクしてアクセス可能にするという目標のもと，ヨーロピアナを支えるアグリゲータとしての役割を果たしながら，同時に独立したサービスを展開している [26]。ドイツ国立図書館と英国のオックスフォード大学はヨーロピアナと共同で，第一次世界大戦期の私文書等をデジタル化し，オンラインアーカイブを作成することで合意した。これは，オックスフォード大学がすでに英国内で進めていた“Great War Archive”[27]による同様の取り組みをドイツにも広げるために，ヨーロピアナがドイツ国立図書館に対してオックスフォード大学との提携をもちかけたことによるものである [28]。英国図書館は，欧州の音声資料と音声関係の資料へのアクセスを改善し，ヨーロピアナを通じてアクセスできる音声資料の増加やメタデータの充実を目指す“Europeana Sounds project”[29]の一環として，エディタソン（編集ワークショップ）が開催された [30]。

フランス国立図書館の電子図書館 Gallica は，フランスの代表的アグリゲータであり，特定のテーマまたは地方の利益に資する資料を対象としてデジタル化支援プログラムを複数用意している。ボルドー市立図書館所蔵の貴重書である，哲学者モンテーニュ（Michel Eyquem de Montaigne）の著者自注の『随想録』のデジタル化はその一つである。Gallica が収集したメタデータはヨーロピアナに提供されるため，Gallica 収録資料はヨーロピアナからの検索も可能である [31]。大日本印刷株式会社はフランス国立図書館のリシュリュー館全面改修にあたり，同館所蔵資料および歴史的空間のデジタル化を共同で推進する協定を締結したと発表した [32]。ヨーロピアナはフランスの国民教育・高等教育・研究省との連携を進め，フランスの初頭・中等教育の教員向けのポータルサイト“Éduthèque”上に Europeana 専用ページを構築した [33]。同ページには，国民教育・高等教育・研究省がフランスの教員に特に関係が深いものとして選択・翻訳した，ギャラリー・展示・検索結果へのリンクが設けられているほか，

Europeana のコンテンツを教育に用いる際の基礎知識を案内する“Guide to using Europeana in education”のフランス語版や，授業でデジタル化資料をテキスト化する際のツールが用意されたページが公開されている[34]。

オランダの社会史国際研究所（Internationaale Instituut voor Sociale Geschiedenis：IISH）が，マルクス（Karl Marx）とエンゲルス（Friedrich Engels）の論文をデジタル化して公開したと発表した。デジタル化資料は，同研究所のカタログやヨーロピアナから閲覧でき，PDF ファイルとしてダウンロードして利用できる[35]。

ヨーロピアナのメタデータモデル（Europeana Data Model：EDM）は要件として，①提供された文化遺産機関の資料とそのデジタル表現の分離，②オブジェクトとそのレコードの分離，③同一のオブジェクトに対する複数レコードの許容，④他のオブジェクトからなるオブジェクトのサポート，⑤抽象モデルの異なる記述との互換性と維持，⑥詳細化も可能な標準的メタデータ形式，⑦統制語彙由来の概念など文脈的リソースのサポートというようにかなり複雑である[24]。ヨーロピアナのメタデータ品質については，ガルシア（Paulo Alonso Gaona-García）らの研究があり，複雑さからくるデメリットを指摘している[36]。

2.2.3 ジャパンサーチ

ヨーロピアナ，米国デジタル公共図書館，ワールドデジタルライブラリの公開を受けて，日本でも大規模デジタルポータルについて検討が始まった。日本には当時国立国会図書館サーチが存在したが，ヨーロピアナと比較した結果，目標値管理ができていない，データのライセンスが未整備である，メタデータ形式や連携方式が普及していない，リンク切れ等品質管理が十分でない，利用者参加型の付加価値データの作成の観点が乏しいといった点が後れをとっていることが明らかになった[37]。

2015 年「デジタルアーカイブの連携に関する関係省庁等連絡会」が招集され，続いて「実務者会議」および「メタデータのオープン化等検討ワーキンググループ」が設置された。1 年半にわたる議論の末，「我が国におけるデジタルアーカイブ推進の方向性」報告書と「デジタルアーカイブの構築・共有・活用ガイドライン」がまとめられた[38]。2017 年には「デジタルアーカイブジャパン推進委員会及び実務者検討委員会」が設置され，「デジタルアーカイブに関する諸外国における政策調査」が公表された[39]。ここでは，海外に追いつくために，国の分野横断統合ポータルであるジャパンサーチの構築が提言され，メタデータ，利用条件，データ共有方法の具体的策定に向けた方向性が示された。

ジャパンサーチは国立国会図書館サーチに足りない部分を開発し，国の分野横断検索統合ポータルにふさわしいものにすることを目指している。具体的には，①横断検索のための，最低限のマッピングをある程度自動化したメタデータアナライザーの開発，②ユーザ独自のマッピングを可能とする検索の仕組み（カスタム検索）の提供，③キュレーションページの提供，④電子展示会ページの提供をあげている。メタデータの収集についてヨーロピアナのアグリゲータ方式を基本としているが，アグリゲータ相当のコンテンツをカバーしている場合には個別機関から直接メタデータをアップロードできる[40][41]。メタデータ連携については，提供されたメタデータをそのまま登録し，メタデータアナライザーでデータ解析を行い，ジャパンサーチが指定する共通項目ラベル候補を提示し，必須項目だけは必ずマッピングを行い，それ以外は個別項目ラベルとしてそのまま登録することで，マッピングの負担を減らしている[42]。

2.3 トリプルアイエフ（IIIF：International Image Interoperability Framework）

2.3.1 提供側

IIIF[43]は英国図書館，フランス国立図書館，ノルウェー国立図書館，オックスフォード大学ボドリアン図書館，スタンフォード大学，プリンストン大学，イェール大学などが 2011 年から 2016 年にかけて開発した，画像を公開し共有するための共通規格である。世界には多くのデジタルアーカイブがあり，それぞれが貴重書などの画像を公開している。しかし，ウェブサイトに画像があるだけなので，それぞれのサイトを訪問し，閲覧するだけならよいが，それらの画像を比較したり，分析したりするには不便である。すなわち，デジタルアーカイブのサイトを探し，画像をダ

ウンロードし，サイズや色を調整し，画像ビューワーで表示させ，別のツールでメモ（アノテーション）をつけるなど，煩雑な作業を繰り返す必要があり，研究に入るまでに疲弊してしまう。IIIF は画像表示の際の属性指定，画像ファイル群の構造記述を共通化し，ビューワーが一つあれば，世界中のデジタルアーカイブの画像を自由に取り込み，比較し，アノテーションを付与し，公開することが可能になる[44]。なお，技術的詳細についてはすでに多くの解説がウェブ上にあるので，本稿では立ち入らない。

IIIF は 2.2 節であげた巨大デジタルポータルはもちろん，各国の機関やアグリゲータの間で急速に普及しつつある。ゲティ財団では，ゲティ美術館が所蔵する作品のうち，パブリックドメインもしくは同財団が権利を保有する資源を無料で提供するプログラム“Open Content Program”収載の 3 万点の画像を IIIF に準拠（Image API，Presentation API の実装）して公開した[45]。英国図書館はフランス国立図書館との協力プロジェクトにより，西暦 700 年から 1200 年頃に英・仏等で製作された，両館所蔵の手稿類 800 点の全文を初めてオンラインで公開した[46]。英国図書館はさらに，デジタル化資料を閲覧するための新しいビューアを導入したことを発表した[47]。バチカン図書館は“Thematic Pathways on the Web”を公開し，資料のキュレーションページであり，“Latin Classics”，“Greek Paleography”など五つのテーマ別展示を収録し，英語・イタリア語での表示に対応している[48]。

2.3.2 利用側

IIIF を語るうえで重要なのはこの技術の意義である。現在，IIIF に関する議論はほとんどが提供側の話で，これからデジタルアーカイブを構築する際はとにかく IIIF に準拠することが必須であるとされ，IIIF に準拠すること自体が目的化し，なんのために IIIF に準拠するのか理解していない組織やシステムベンダーがあるように感じる。デジタルアーカイブのデータ基盤整備という意味では，まずは IIIF に準拠して公開することは間違いではないが，図書館，文書館，博物館などで働くライブラリアン，アーキビスト，キュレーターは意義を理解しておく必要がある。

実は IIIF の意義は提供側ではなく利用側にある。デジタルアーカイブを利用し，研究する分野にデジタルヒューマニティーズがある。欧州研究図書館協会（Ligue des Bibliothèques Européennes de Recherche : LIBER - Association of European Research Libraries）の「デジタル人文学とデジタル文化遺産に関するワーキンググループ」[49]は大規模調査に基づく報告書“Europe's Digital Humanities Landscape: A Report from LIBER's Digital Humanities & Digital Cultural Heritage Working Group”を公開した[50]。報告書の目的は，LIBER 加盟館におけるデジタル人文学の現状の概観を提供し，デジタル人文学事業に携わる研究図書館を支援するために，調査から得られた知見を共有することである。このなかで IIIF が画像データ相互運用の事実上の標準であると説明されている[51]。

IIIF を利用者主導の観点から環境整備と研究を進めている機関に人文学オープンデータ共同利用センター[52]がある。北本らは IIIF Curation Platform を開発し，利用者主導でキュレーションが行える環境づくりを目指している[53]。このようなツールが普及すれば，IIIF を使った資料研究が促進されるであろう。

IIIF を利用したデジタルヒューマニティーズの研究例を一つあげよう。江戸前期の奈良絵本・絵巻などの書写者に朝倉重賢がいる。重賢は多くの書写を行ったようで，署名のない奈良絵本や絵巻物の詞書（絵巻物の説明文）にも同じ筆跡のものが数多く残っている。これら署名のない絵や詞書が重賢の書写であるかどうかを判定するには，複数の機関に所蔵されている多くの資料を比較する必要がある。

鈴木は IIIF ビューワーを使って朝倉重賢筆の作品を比較している。具体的には，国文学研究資料館所蔵の『大国舞』『羅生門』と慶應義塾大学所蔵の『ともなが』『熊野権現縁起』（すべて IIIF で提供）の人物画のすべての顔貌を切り出し，比較した。その結果，作品間の関係性を容易に見出すことができた。これまでであれば，研究対象を複写した紙媒体をハサミで切り取り，ノリで貼り付けていく作業が必要であり，煩雑であるばかりかやり直しや変更ができない。鈴木は IIIF を使った研究をとおして，IIIF の優位性として比較作業の効率を上げ，さらに比較した研究成

果を公開・共有できる点を強調している[54]。ほかにも小倉百人一首をLinked Open Data（LOD）とIIIF化した試みがあり[55][56]，IIIFを利用した研究が今後盛んになることが予想される。

鈴木の研究が意味するところは，複数の図書館のコレクションから必要な資料を選択し，自分独自のコレクションを形成したとみなせる点にある。IIIFを使えば，国内だろうが海外だろうが遠隔地の図書館の所蔵資料を自分用のコレクションとして自由に形成できるのである。

IIIFの展望については北本と永崎が興味深い論考を行っている。北本はIIIFの意義を，①IIIFは画像公開（配信）のオペレーティングシステムに相当する，②OSの載せる「アプリ」は今後増えるが，OSの流儀に従う必要がある，③OSとしてひととおりの機能を備える必要があり，車輪の再発明も必要ならやる，④IIIF内で扱うべき課題と外で扱うべき課題との切り分けと接続が重要である，というように四つにまとめた[57]。

永崎は，「東寺百合文書データミーティング」の発表のなかで，デジタルアーカイブが多数構築されているにもかかわらず，いまひとつデジタルの利点を活かせていない現状への解として，データ提供者と利用者との間をつなぐ「サービス提供者」という中間層が期待されると述べた[58]。これは重要な指摘であり，このサービス提供者という中間層こそ，図書館の担う役割であると考える。

3. 新しい図書館サービス

ここまでの話の流れを整理しよう。デジタル世界がコンテンツ構築，コンテンツ共有，コンテンツ集約と発展し，現在，ヨーロピアナやジャパンサーチといった巨大デジタルポータルが構築されている。一方，図書館サービスはウェブ登場から本質的にはなにも変わっておらず，デジタル世界の変化に適応できていないようにみえる。こういう状況のなかで，IIIFという新しい技術が注目を集め，図書館の果たすべき役割がみえてきた。言い換えるならば，デジタル世界でいま起きている巨大デジタルポータル構築の流れは，図書館にとって新しいサービスを開発するチャンスではないかというのがここまでの流れである。

では，新しい図書館サービスとはどのようなものなのかを永崎のいう「データ提供者と利用者との間をつなぐサービス提供者という中間層」という発言を出発点に考えてみよう。2.3.2節でIIIFビューワーを使った自分用のコレクション形成を行った研究例を示した。朝倉重賢筆と思われる作品を国文学研究資料館と慶應義塾大学の二つの機関から画像をIIIFビューワーに取り込んだ例である。これは永崎の発言でいうサービス提供者と利用者の間のやりとりである。IIIFでは，このように複数の機関から必要な画像を自由に簡単に取り込めることをIIIFのメリットであるとアピールしている。ここまではそのとおりであるが，実際IIIFビューワーを使おうとしたとき，すぐに直面する問題がある。「どこからなに（どの画像）を取り込めばよいのか」である。

2.3.2節に示した研究例では，この研究者が朝倉重賢について知識があるからこそ，国文学研究資料館と慶應義塾大学に朝倉重賢の画像があることを知っているわけである。しかし，専門知識がない人はどこからなにを取り込めばよいのかわからない。いや，専門家であっても必ずしもすべての画像の所在を知るわけではあるまい。研究を行う前にまずは画像を入手しなければならない。この構図は研究者（利用者）が文献を探しに図書館に来るのと似てはいないだろうか。文献と利用者をつなぐ役割を図書館が担っているように，IIIF画像と利用者を図書館がつなぐのである。これが永崎の中間層が必要であるという指摘である。

IIIF対応の画像の所在情報が必要であるという認識はIIIF関係者のなかで既にあり，日本国内のIIIF準拠画像を発見するための横断検索システムが公開されている[59]。しかし，図書館サービスとしてみた場合，これだけでは不十分である。読者のなかには，IIIF画像のレファレンスサービスをすればよいのではないかと考える人がいるかもしれないが，それでは新しい図書館サービスとはいえない。

もっと大胆に，IIIFの特性を活かしたサービスをここに提案する。すなわち，「画像コレクション形成サービス」である。利用者が複数の機関から自由にIIIFビューワーに取り込んで自分用のコレクションを形成できるのであれば，これを図書館が行ってもよいだろう。図書館が巨大なIIIF画像空間から利用者のためにコレクション形成を行うのである。そして，利用者のIIIFコレクションと比

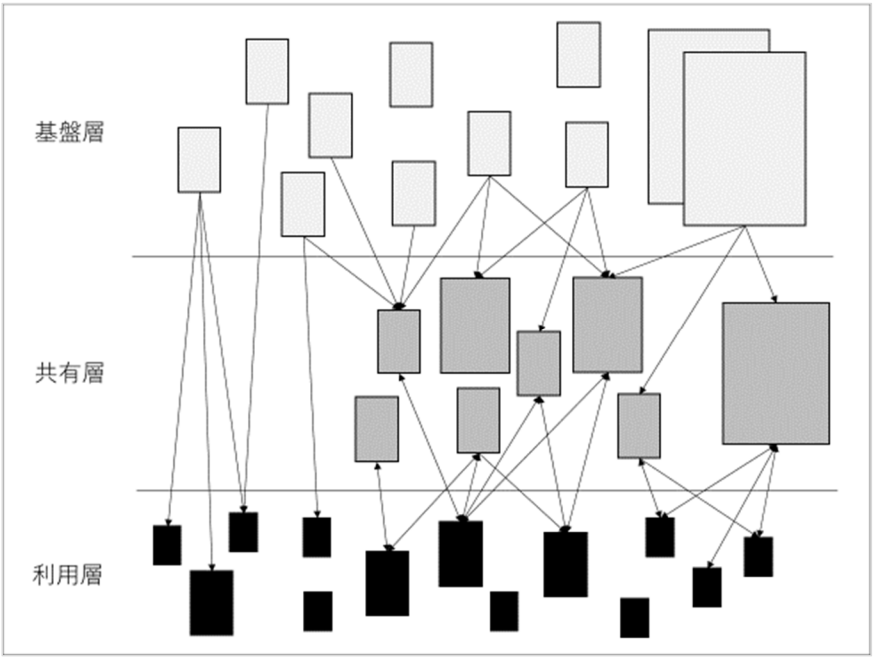


図１　デジタル世界の多層化モデル

較し，利用者のコレクションに足りない画像を図書館コレクションから自動的に補うサービスが考えられる。

これを一般化すると，図１のような多層化された新しいデジタル世界がみえてくる。基盤層では，それぞれの機関が所蔵しているデジタルドキュメントを IIIF に類する共通規格で提供するレイヤーである。基盤層は実世界の所蔵を基に構成されているため，必ずしも特定の文脈は有していない。

共有層では，基盤層のデジタルアーカイブから図書館が自由にコレクションを形成する。実世界の図書館では，紙メディアの物理的制約から量，質ともに限界があるが，デジタル世界においては限界がない。デジタル世界においては世界中のデジタルアーカイブからドキュメントを取り込むことができる。コレクションは一つの図書館で複数構築して構わないし，スクラップアンドビルトを繰り返し，コレクション形成を試行錯誤できる。

利用層では，基盤層からドキュメントを取り込んでもよいし，共有層から取り込んでもよい。例えば，利用層で江戸時代の名主に関するコレクションを形成している研究者が，中野区立図書館の山崎家文書や堀江家文書を取り込むことが考えられ，逆に山崎家や堀江家に関連する文献を，ある個人がもっていたら，中野区立図書館がその文献を取り込み，中野区立図書館のデジタルアーカイブを充実させることができる。このように，共有層のコレクションと利用層のコレクションの間で相互作用を生じさせることによって，ドキュメントを追加，再編，削除したり，新しいコレクションを生成したりすることが可能となる。

多層化されたデジタル世界とは，田窪のいう図書館，文書館，博物館が統合された電子メディア空間内に，あえて図書館がコレクションを形成する世界である。区別がない世界に区別をつくる。それはすなわち，サイバー空間に図書館，文書館，博物館の区別はあるのかという田窪の問いに対して，あるかないかで答えるのではなく，「両立する」という新しい答ができたということでもある。

では，この新しい図書館サービスに名前を与えよう。サイバー空間に図書館がつくるコレクションを，世界に遍在するコレクションという意味で「ユビキタスコレクション（Ubiquitous Collection）」と名づけよう。そして，ユビキタスコレクションによって利用者のコレクションを支援するサービスを「相互援用型コレクションサービス（ミックス）（MICS : Mutual Invoked Collection Service）」呼ぶことにする。図書館と利用者のコレクションをミックスする意である。

4. おわりに

本稿の冒頭で，デジタル世界の発展に対して，図書館サ

ービスはウェブ登場の頃からほとんど変わっていないと述べた。その原因の一つは現実世界の図書館という枠に縛られているからであると思われる。そのため，現実世界の図書館という単位でしかウェブサイトを構成できないのである。しかし，今回提示したデジタル世界では，現実世界の枠を超えてサイバー空間に自由にコレクションを形成できる。現実世界の図書館という縛りを超えた新しい図書館サービスを展開してほしいと願う。ただし，現実の図書館が不要といっているわけではない。現実空間でしか行えない図書館サービスがあるからである。

図書館の本質は，資料によって人の知識活動を支えることである。これは時代が変わっても変わらない。コンテンツ構築の時代，コンテンツ共有の時代と経て現在はコンテンツ集約の時代である。次はおそらくコンテンツ編成の時代であろう。図書館の時代がやってくる。

【参考・引用文献】

1) 国際公文書会議．電子記録：アーキビストのためのワークブック. http://www.archives.go.jp/hourei/ICASTUDY16_ELECTRONIC_RECORDS_JPN.pdf http://www.archives.go.jp/about/report/pdf/ICASTUDY8_ELECTRONIC_RECORDS_JPN.pdf (Accessed 2020-3-6)

2) 国立公文書館．アーキビストの職務基準書．2018. http://www.archives.go.jp/about/report/pdf/syokumukijunsyo.pdf (Accessed 2020-3-6)

3) 影山幸一．デジタルアーカイブという言葉を生んだ「月尾喜男」. https://ci.nii.ac.jp/naid/10020494150 http://www.dnp.co.jp/artscape/artreport/it/k_0401.html http://www.tsukio.com/denki2.html

4) OCLC glossary. Digital Archive. https://help.oclc.org/Librarian_Toolbox/OCLC_glossaries/OCLC_glossary (Accessed 2020-3-6)

5) 田窪直規．電子図書館から電子メディア空間へ、そしてその意味するところ．電子図書館の未来，人文学と情報処理，1995, no.9, p.23-30.

6) Griffin, S. Funding for Digital Libraries Research Past and Present. Dlib Magazine, 2005, vol.11, no.7/8. http://www.dlib.org/dlib/july05/griffin/07griffin.html (Accessed 2020-3-6)

7) American Memory. https://www.loc.gov/collections/ http://memory.loc.gov/ammem/about/index.html (Accessed 2020-3-6)

8) 篠塚富士男，栗山正光．国立大学における電子図書館プロジェクトーその経緯と現状ー．情報の科学と技術，1999, vol.49, no.6, p.284-289.

9) 国立国会図書館．近代デジタルライブラリ. https://current.ndl.go.jp/node/28960 (Accessed 2020-3-6)

10) 森山光良．「デジタル岡山大百科」ー電子図書館ネットワークー．情報管理，2007, vol.50, no.3, p.123-134.

11) 国立大学図書館協議会．電子ジャーナルタスクフォース活動報告，2004．http://www.janul.jp/j/projects/ej/ katsudo_report.pdf (Accessed 2020-3-6)

12) 学術機関リポジトリ構築連携支援事業. https://www.nii.ac.jp/irp/ (Accessed 2020-3-6)

13) 飯野勝則．ウェブスケールディスカバリーの誕生と展開ー情報検索ツールの歴史的変遷とスケーラビリティの観点から．大学図書館研究，2015, no.102, p.11-21.

14) 人間文化研究機構．研究情報資源共有化研究会. http://www.nihu.jp/ja/publication/source_rd https://current.ndl.go.jp/node/18979 https://int.nihu.jp/ (Accessed 2020-3-6)

15) Europeana. https://www.europeana.eu/portal/en (Accessed 2020-3-6)

16) Digital Public Library of America (DPLA) . https://dp.la/ (Accessed 2020-3-6)

17) World Digital Library. https://www.wdl.org/en/ (Accessed 2020-3-6)

18) Japan Search. https://jpsearch.go.jp/ (Accessed 2020-3-6)

19) 古山俊介. Europeana の動向：「欧州アイデンティティ」および「創造性」の観点から．カレントアウェアネス,2012, CA1785.

20) 時実象一．欧州の文化遺産を統合する Europeana．カレントアウェアネス，2015, CA1863.

21) DPLA 戦略計画 2019-2022．カレントアウェアネス，2019, E2188.

22) 「米国デジタル公共図書館」計画のイニシアチブ開始. 情報管理, 2011, vol.53, no.11, p.645-648.

23) ワールドデジタルライブラリーの動向. カレントアウェアネス, 2019, CA1967.

24) 福山樹里. Europeana のメタデータ：デジタルアーカイブの連携の基盤. 情報の科学と技術, 2017, vol.67, no.2, p.54-60.

25) ドイツデジタル図書館. https://www.deutsche-digitale-bibliothek.de/ (Accessed 2020-3-6)

26) 丸本友哉.ドイツデジタル図書館（DDB）の沿革とサービス. カレントアウェアネス, 2017, CA1906.

27) オックスフォード大学. Great War Archive. http://www.oucs.ox.ac.uk/ww1lit/gwa (Accessed 2020-3-6)

28) ドイツ国立図書館, オックスフォード大学, Europeana が, 第一次世界大戦期の私文書等のデジタルアーカイブ構築で合意. https://current.ndl.go.jp/node/17313 (Accessed 2020-3-6)

29) Europeana Sounds Edtion. http://britishlibrary.typepad.co.uk/sound-and-vision/2015/10/europeana-sounds-editathon.html (Accessed 2020-3-6)

30) 英国図書館（BL）において“ Europeana Sounds”のエディタソン開催 野生生物の音源のコレクションを Wikipedia で公開へ. https://current.ndl.go.jp/node/29845 (Accessed 2020-3-6)

31) 服部麻央. フランス国立図書館の電子図書館 Gallica. カレントアウェアネス, 2017, CA1905.

32) 大日本印刷 フランス国立図書館　リシュリュー館の歴史的遺産の継承で連携. https://www.dnp.co.jp/news/ detail/ 1192845_1587.html (Accessed 2020-3-6)

33) Présentation de l'offre Europeana. https://www.edutheque.fr/utiliser/partenaire/europeana.html (Accessed 2020-3-6)

34) Europeana とフランスの国民教育・高等教育・研究省との連携事業. https://current.ndl.go.jp/node/34617 (Accessed 2020-3-6)

35) オランダの社会史国際研究所. https://search.iisg.amsterdam/Record/ARCH00860(Accessed 2020-3-6)

36) García,P., García, A. and Alonso, S. Exploring the Relevance of Europeana Digital Resources: Preliminary Ideas on Europeana Metadata Quality. Revista Interamericana de Bibliotecología, 2017, vol.40, no.1, p.59-69.

37) 塩崎亮, 菊地祐子, 安藤大樹. 国立国会図書館サーチのメタデータ収録状況 Europeana との比較調査. 情報管理, 2014, vol.57, no.9, p.651-663.

38) デジタルアーカイブの連携に関する関係省庁等連絡会，実務者協議会及びメタデータのオープン化等検討ワーキンググループ. 報告書およびガイドライン等. https://www.kantei.go.jp/jp/singi/titeki2/digitalarchive_kyougikai/index.html (Accessed 2020-3-6)

39) デジタルアーカイブジャパン推進委員会及び実務者検討委員会. 報告書等. https://www.kantei.go.jp/jp/singi/titeki2/digitalarchive_ suisiniinkai/index.html (Accessed 2020-3-6)

40) 国立国会図書館. デジタルアーカイブの連携拡張に向けた「ジャパンサーチ（仮称）」構想. アーカイブサミット 2017 in 京都, 2017/9/9. http://archivesj.net/wp- content/uploads/2017/03/65b1b83ceb7f7851141fbd092b1adb90.pdf (Accessed 2020-3-6)

41) 木藤淳子. 国の分野横断統合ポータル「ジャパンサーチ（仮称）」との連携について. ジャパンサーチ（仮称）との連携促進のための説明会「ジャパンサーチ（仮称）・フェーズゼロ～分野横断統合ポータル構築に向けて」2018/5/16. https://www.ndl.go.jp/jp/event/events/03_ndl.pdf (Accessed 2020-3-6)

42) ジャパンサーチのメタデータ連携について（2019 年 2 月）. https://jpsearch.go.jp/static/pdf/cooperation/jps_manual_s201902.pdf https://jpsearch.go.jp/cooperation (Accessed 2020-3-6)

43) International Image Interoperability Framework. https://iiif.io/ (Accessed 2020-3-6)

44) 永崎研宣. デジタル文化資料の国際化に向けて:IIIF と TEI. 情報の科学と技術, 2017, vol.67, no.2, p.61-66.

45) Getty Museum Images Published Online as IIIF.

http://blogs.getty.edu/iris/30000-getty-museum-images-published-iiif/ (Accessed 2020-3-6)

46) England and France beyond the Conquest. https://www.bl.uk/press-releases/2018/ november/ polonsky-project-medieval-manuscripts- website -launch# https://current.ndl.go.jp/node/37108 (Accessed 2020-3-6)

47) There's a new viewer for digitised items in the British Library's collections. https://blogs.bl.uk/digital-scholarship/2016/12/new-viewer-digitised-collections-british-library.html https://current.ndl.go.jp/node/33065,(Accessed 2020-3-6)

48) バチカン図書館プレスリリース. https://www.vaticanlibrary.va/download/Mellon.pdf https://current.ndl.go.jp/node/39793 (Accessed 2020-3-6)

49) LIBER The Digital Humanities & Digital Cultural Heritage Working Group. https://libereurope.eu/strategy/digital-skills-services/digitalhumanities/ (Accessed 2020-3-6)

50) LIBER. "Europe's Digital Humanities Landscape: A Report from LIBER's Digital Humanities & Digital Cultural Heritage Working Group". https://zenodo.org/record/3247286#.XmUJHUrgqUn (Accessed 2020-3-6)

51) 御幡真人. 欧州の研究図書館におけるデジタル人文学の現状と展望. カレントアウェアネス, 2019, E2195.

52) 人文学オープンデータ共同利用センター. http://codh.rois.ac.jp/ (Accessed 2020-3-6)

53) 北本朝展, 本間淳, Saier, T. IIIF Curation Platform：利用者主導の画像共有を支援するオープンな次世代 IIIF 基盤. 人文科学とコンピュータシンポジウム, 2018, p.327-334.

54) 鈴木親彦, 高岸輝, 北本朝展. IIIF Curation Viewer が美術史にもたらす「細部」と「再現性」絵入本・絵巻の作品比較を事例に. 人文学とコンピュータシンポジウム, 2017, p.157-164.

55) 高橋菜奈子. 小倉百人一首 LOD チャレンジ 2017. http://idea.linkdata.org/idea/idea1s2398i (Accessed 2020-3-6)

56) 高橋菜奈子. 小倉百人一首の IIIF 対応 LOD チャレンジ 2018. http://idea.linkdata.org/idea/idea1s2623i (Accessed 2020-3-6)

57) 北本朝展. IIIF で進むソフトウェア開発と画像公開プラットフォームへの道. 第 4 回 CODH セミナー デジタルアーカイブにおける画像公開の新しいトレンド ～IIIF が拓く画像アクセスの標準化と高度化～, 2017. doi:10.20676/00000308 (Accessed 2020-3-6)

58) 岡本隆明. 東寺百合文書データミーティング＜報告＞. カレントアウェアネス, 2018, E1998.

59) 中村覚, 永崎研宣. 日本国内 IIIF 準拠画像に対する横断検索システムの構築. 情報処理学会人文学とコンピュータ研究会, 2018, vol. 2018-CH-118, no.8, p.1-6. http://id.nii.ac.jp/1001/00190728/ http://iiif2.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/s/iiif (Accessed 2020-3-6)

Author Abstract

Do you know Europeana, Digital Public Library of America, World Digital Library, or Japan Search? In the digital world, the era of content construction, the era of content sharing, and the era of content aggregation have been steadily developing, and now a huge digital portal that can access tens of millions of contents has emerged. On the other hand, what about libraries? Except for some advanced university libraries, the library seems to have provided almost the same services as the early days of the Web, such as OPACs, databases, and regional materials. As the digital world evolves, only the library is left behind. This article describes the huge digital portal and IIIF (International Image Interoperability Framework), which has recently attracted attention, and explains what it means. Then, the article proposes a new library service that connects digial world and end users.

編集後記

2019年4月5日に，当研究所は設立3周年を迎え，『未来の図書館 研究所　調査・研究レポート』もVol.3となりました。いかがでしたでしょうか。定番となりました，当研究所主催シンポジウム記録（第3回シンポジウム「図書館とサステナビリティ」）とともに，2019年度の第3回ワークショップ「図書館員の未来準備」について報告しました。3周年らしく数字の「3」が並んでいます。研究レポートは，前号での予告「次号（Vol.3）について」とは予定を変更し，資料のデジタル化やその提供（「デジタルアーカイブ」という言葉で推進されていますが）に関わる二つのレポートを掲載しました。予告でお知らせしました宇陀氏のレポートのタイトルにある，AR，VR，MR，AIについては，皆さまとしても興味のあるところだと思いますので，当研究所でも今後とりあげ，発信していきたいと思います。

さて，2019年度を振り返って，先ほどから何度も出ている「3」に因み，2019年に当研究所にお問い合わせくださった3者との出会いについて，紹介したいと思います。

まず春には，愛知県の中学校から，「修学旅行の班別学習で，未来の図書館についてインタビューさせてほしい」との問い合わせがあり，図書館について興味のある中学3年生の皆さんの訪問を受けました。私たち研究所の活動やこれまでに訪れた世界の図書館について紹介し，中学生の皆さんからのインタビューを受けました。中学生からは，「未来の学校図書館はどうなるのか」，「AIが出てきたら本がなくなってしまうのではないか」といった質問があり，若い世代の皆さんとともに，これからの図書館のあり方や役割について考える，よい機会となりました。

夏には，ラジオ番組のディレクターの方から問い合わせがあり，「未来」をテーマにした番組内で，「これからの図書館についてお話しいただきたい」ということで，所長 永田のラジオ番組出演が決定し，9月に放送されました。番組内では，2019年夏に視察に訪れた，フィンランドのヘルシンキ市立中央図書館Oodiについてお話ししました。Oodiを含む視察内容については，動向レポートVol.6「Dokk1 からOodiへ：公共図書館の新しい表情」で，詳しく紹介しています（http://www.miraitosyokan.jp/future_lib/trend_report/vol6/）。

秋には，とある企業の方から，「デジタルネイティブな次世代にとって，未来の図書館がどうあるべきかについて意見交換をしたい」といった旨の問い合わせがありました。2020年からの新学習指導要領や「教育の情報化」への対応を求められる学校図書館や，公共図書館のあり方については，当研究所としても興味深いところであり，有意義な機会をもつことができました。

以上のように，さまざまな方々との出会いは，私どもとしても嬉しいところです。ぜひお気軽にお問い合わせいただければ幸いです。2019年度は，東京都より受託しました「令和元年度都立中央図書館の在り方に係る調査検討等業務委託」にも取り組むなど，図書館づくりへの支援等の実績やご相談も増えてまいりました。

図書館に関わる皆さまとの出会いを，日々の研究活動に活かしながら，整理し，発信していきたいと思います。次号以降も，ぜひご期待ください。（木村　瞳）

中学生のインタビュー訪問の様子

図書館のアクセシビリティ
「合理的配慮」の提供へ向けて
野口武悟・植村八潮 編著
A5判 219頁 本体2,000円＋税 ISBN978-4-88367-262-2

学校司書のための 学校教育概論
野口武悟・鎌田和宏 編著
A5判 214頁 本体2,000円＋税 ISBN978-4-88367-316-2

公共図書館でできる 知的障害者への合理的配慮
藤澤和子 編著 B5判 194頁 本体 2,300円＋税 ISBN978-4-88367-328-5

分類法キイノート 第3版
—日本十進分類法［新訂10版］対応—
宮沢厚雄 著 B5判 104頁 本体1,500円＋税 ISBN978-4-88367-318-6

論考 図書館とレファレンスサービス
齋藤泰則 著 A5判・上製 284頁 本体3,600円＋税 ISBN978-4-88367-283-7

目録法キイノート
—日本目録規則［1987年版改訂3版］対応—
宮沢厚雄 著 B5判 104頁 本体1,500円＋税 ISBN978-4-88367-260-8

日本の文化をデジタル世界に伝える
京都大学人文科学研究所・共同研究班「人文学研究資料にとってのWebの可能性を再探する」編
永﨑研宣 著 A5判 238頁 本体 2,300円＋税 ISBN978-4-88367-327-8

検索法キイノート
—図書館情報検索サービス対応—
宮沢厚雄 著 B5判 144頁 本体1,800円＋税 ISBN978-4-88367-290-5

現代図書館情報学シリーズ［全12巻］
高山正也・植松貞夫 監修 各巻A5判 平均210頁 本体2,000円＋税（三訂：本体2,100円＋税）

- 改訂 1 図書館概論 高山正也・岸田和明／編集
- 2 図書館制度・経営論 糸賀雅児・薬袋秀樹／編集
- 3 図書館情報技術論 杉本重雄／編集
- 改訂 4 図書館サービス概論 高山正也・村上篤太郎／編集
- 改訂 5 情報サービス論 山﨑久道・原田智子／編集
- 6 児童サービス論 植松貞夫・鈴木佳苗／編集
- 改訂 7 情報サービス演習 原田智子／編集
- 改訂 8 図書館情報資源概論 岸田和明／編集
- 三訂 9 情報資源組織論 田窪直規／編集
- 改訂 10 情報資源組織演習 小西和信・田窪直規／編集
- 11 図書・図書館史 佃 一可／編集
- 12 図書館施設論 植松貞夫／著

日本十進分類法の成立と展開
—日本の「標準」への道程1928-1949—
藤倉恵一 著 A5判・上製 310頁 本体3,800円＋税 ISBN978-4-88367-310-0

プロの検索テクニック
—検索技術者検定2級 公式推奨参考書—
一般社団法人 情報科学技術協会 監修 原田智子 編著
小河邦雄・清水美都子・丹 一信・藤井昭子 著
B5判 180頁 本体2,200円＋税 ISBN978-4-88367-307-0

情報革命の世界史と図書館
—粘土板文書庫から「見えざる図書館」の出現へ—
山口広文 著 四六判・上製 402頁 本体 3,400円＋税 ISBN978-4-88367-324-7

検索スキルをみがく
—検索技術者検定3級 公式テキスト—
一般社団法人 情報科学技術協会 監修 原田智子 編著
吉井 隆明・森 美由紀 著
B5判 144頁 本体1,800円＋税 ISBN978-4-88367-308-7

図書館のための 和漢古書目録法入門
伊藤洪二 著 四六判 262頁 本体 2,100円＋税 ISBN978-4-88367-329-2

学校図書館の基礎と実際
A5判 156頁 本体1,800円＋税 ISBN978-4-88367-291-2
後藤 敏行 著

健康医学情報の伝達におけるリーダビリティ
酒井由紀子 著
A5判・上製 242頁 本体3,600円＋税 ISBN978-4-88367-303-2

学校図書館サービス論
—現場からの報告—
A5判 164頁 本体1,800円＋税 ISBN978-4-88367-299-8
後藤 敏行 著

図書館情報学における統計的方法
岸田和明 著 A5判・上製 252頁 本体3,000円＋税 ISBN978-4-88367-249-3

IFLA図書館参照モデル 書誌情報の概念モデル
Pat Riva, Patrick Le Bœuf, Maja Žumer 著
訳者代表 和中幹雄・古川 肇
A4判 104頁 本体2,200円＋税 ISBN978-4-88367-330-8

〒112-0002 東京都文京区小石川5-11-7
URL：http://www.jusonbo.co.jp/
樹村房
TEL：03-3868-7321 FAX：03-6801-5202
E-mail：webinfo@jusonbo.co.jp

LIBRARY FACILITATOR

図書館で使えるビジネススキルを
少人数のワークショップで学べる！

ライブラリー・ファシリテーター®

認定講座

定員6名！ | 受講料30,000円

こんなスキルがアップします！

- 調整力
- 発想力
- コミュニケーション力
- プレゼン力
- ファシリテーション力

受講生特典：オリジナル認定バッジ贈呈・限定フォローアップ講座（無料～実費）等

＊いずれの日程も同内容

日程（1）

2020年 5月24日(日)
10:00-17:00

日程（2）

2020年 7月19日(日)
10:00-17:00

会　場

ちよだプラットフォーム
（神田錦町）

内　容

講座監修：慶応義塾大学名誉教授　糸賀雅児

- チームビルディングワーク
- 傾聴力を高めるワーク
- 図書館法ワーク
- 自治体基本方針ワーク
- 図書館経営・PR
- プレゼントレーニング
- アイデア発想法
- ファシリテーション実践
- アクションプラン作成 等

講　師

北村志麻
「図書館パートナーズ」代表

＜実績＞
日本図書館協会研修、公共図書館館長向け研修
埼玉県図書館協会・埼玉県立図書館研修
丸善・紀伊國屋・ヴィアックス社内研修、等
＜著書＞
「マイクロ・ライブラリー
人とまちをつなぐ小さな図書館」学芸出版社
「地方自治職員研修」2015年8月号-
「進む！協働」公職研

お申し込み・お問い合わせはこちらまで

以下のメールアドレスまで、「お名前・メールアドレス・お電話番号」をご記入の上、お送りください。

✉ info@libraryfacilitator.com

主催 | 図書館パートナーズ

Contents

■ **Introduction** ―――― **1**

■ **3rd Symposium of The libraries of the future research, Inc.** : ―― **3**

Library and Sustainability /

Masanobu OKAZAKI, Yasuhiko UCHINO and Haruki NAGATA

■ **3rd Workshop on Librarian's Preparation for the Future : Summary** ― **32**

■ **Research Report**

Construction of Archives of Pre-Modern Japanese Works

and Its Utilization ―――― **37**

Yuko MASUI

What Is Happening in the Digital World Now? ―――― **47**

Norihiko UDA

未来の図書館 研究所 調査・研究レポート 2019 第 3 号

2020 年 3 月 30 日発行

定価（本体 2,000 円＋税）

編集・発行　株式会社 未来の図書館 研究所

〒113-0033 東京都文京区本郷 5-23-12　7 階

Tel.03-6673-7287　Fax.03-6772-4395

URL http://www.miraitosyokan.jp

印　　刷　株式会社　丸井工文社

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分は，それぞれの筆者の個人的見解であることをお断りいたします。

本誌 PDF 版を当研究所ホームページ（http://www.miraitosyokan.jp）でご覧いただけます。